

# 第V章 考察

## 1 寺名比定とその沿革

### A 吉備池廃寺と百済大寺

**吉備池廃寺の性格** 以上、吉備池廃寺における発掘調査の成果を報告してきた。ここに、飛鳥時代としては並はずれた規模の金堂と塔が建っていたこと、中門・回廊や僧房をはじめとする関係施設も相当に充実していたことは、もはや動かしがたい。また、個々の建物だけではなく、回廊の東西長をはじめ、伽藍全体もきわめて大規模であったことが明らかとなっている。

詳細については次節以下で論じるが、飛鳥時代の主要寺院と比較すると、吉備池廃寺の金堂は、山田寺（桜井市山田）の実に2.8倍、藤原京の官寺である本薬師寺（<sup>きどの</sup>檀原市城殿町）に比べても1.7倍の基壇面積をもつ。これを越える規模の金堂は、文武朝に国家筆頭の官寺として大官大寺（明日香村小山）が建立されるまで存在しない。さらに、塔に関してはその巨大さがいっそう際だっており、吉備池廃寺の塔は、同時代の他の寺院にくらべて、実に4～7倍の基壇面積を有している。これに比肩しうる塔は、やはり文武朝大官大寺の九重塔しかない。

巨大な金堂  
と塔の基壇

したがって、吉備池廃寺の性格については、その規模からも、一豪族の氏寺とは考えられない。この点でも、吉備氏の氏寺としての吉備寺にあてる説は成立しえないだろうし、近隣に本拠をもつ阿倍氏の氏寺と考えるのも、その氏寺たる安倍寺（桜井市阿部）が別に存在する事実とあわせて、無理があろう。吉備池廃寺とはほぼ同時期の氏寺としては、大化改新後に右大臣となった蘇我倉山田石川麻呂の発願による山田寺があるけれども、吉備池廃寺の伽藍や堂塔は、山田寺はもちろん、のちの官寺である川原寺（明日香村川原）や本薬師寺をもはるかに凌ぐ規模を有しているのである。やはり、天皇（大王）家にかかわる寺院と考えざるをえない。

天皇家に関  
係する寺院

また、吉備池廃寺の位置は、当時、宮室が集中した飛鳥地域にも近接している。天皇家関係の寺院であればなおのこと、それに関わる記録は残りやすいはずである。とすれば、吉備池廃寺を、史料上の寺院の中に求める可能性はひじょうに高いとみてよい。

**百済大寺への比定** そこで、有力な候補として浮上してくるのが、百済大寺である。この寺は、『日本書紀』と『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下、『大安寺縁起』）が、ともに舒明11年（639）の創立と伝える、日本最初の勅願寺であった。寺地の移転を伴う複雑な沿革をたどるが、その法燈は、高市大寺・大官大寺を経て、今の大安寺に伝わっている。

百済大寺の所在については、現在の広陵町百済周辺に比定するのが古くからの通説であった。しかし、この一帯で、それに該当する遺構や瓦の出土は知られていない。一方、香具山の北西麓一帯に百済大寺を比定する見解<sup>1)</sup>もあり、吉備池廃寺同範の瓦を出土する木之本廃寺（檀原市木之本町）は、近年、その有力な候補となっていた。

吉備池廃寺の軒瓦 (=木之本廃寺の軒瓦) については、本章の「4 出土瓦をめぐる諸問題」で詳述するが、それらの年代は、まさしく百済大寺の年代と合致する。というより、現状で、百済大寺の軒瓦は、ほかに求めがたいのである。これらを百済大寺のものとする見解は、山崎信二によって最初に提示されたが<sup>2)</sup>、以後、瓦の研究者が例外なくこの説を支持する<sup>3)</sup>のは、決して理由のないことではない。今までは、木之本廃寺を含めて、寺院跡としての明証を欠いていたけれども、それが実際に、しかも並はずれた規模の遺構として確認された以上、吉備池廃寺が百済大寺である可能性は、考古学的には否定しがたいだろう。

また『大安寺縁起』によれば、百済大寺は、天武2年(673)に高市の地に移建されて、高市大寺となっている。『日本書紀』も、同年の造高市大寺司任命を伝えており、これらの記事は史実と考えられるが、それを裏づけるように、吉備池廃寺における瓦の種類や出土量は、そこで命脈を絶った寺院のものとしてはあまりにも僅少である。そのうえ、圧倒的に小片が多く、再用に耐えるような製品はほとんどない。よって、短期間のうちに、別の場所へ移転したことはほぼ疑いなく、吉備池廃寺で出土する瓦は、その際に廃棄された不要品とみてよい。史料に見える高市への移建とまさに符合するものといえよう<sup>4)</sup>。

以上、吉備池廃寺が百済大寺である蓋然性はきわめて高いと考えられる。ただし、百済大寺や高市大寺については、主として史料に基づく研究の蓄積があり、上記の推定の妥当性を確認するためには、それとの整合性を含めた検証作業が不可欠となる。以下、とくに百済大寺の所在をめぐる既往の学説との関わりを中心に、この問題を考えてみることにしたい。

## B 百済大寺・高市大寺の沿革

**百済大寺の創立** まず、百済大寺と高市大寺の沿革を簡単に振り返っておこう (Tab. 7)。

天平19年(747)勸録の『大安寺縁起』によると、大安寺の歴史は、聖徳太子の<sup>くまごり</sup>熊凝寺に始まるとされる。けれども、この部分は後代の仮託であって、事実とは認められない<sup>5)</sup>。すでに詳細に論じられているように、<sup>6)</sup>『日本書紀』『大安寺縁起』が一致して舒明11年(639)の創立とする百済大寺をその淵源とみるのが、現在、ほぼ定説となっている。

『日本書紀』によれば、百済大寺は、舒明の詔により、百済宮と対になるかたちで創建された。天皇の発願による最初の寺院であり、「西の民は宮を造り、東の民は寺を作る」とあるように、広汎な地域から動員がおこなわれたことがうかがえる。そして、いずれの史料も、「百済川の側」に九重塔が造立されたことを伝えている。奈良時代以前に九重塔をそなえていたことが史料に明らかな寺院は、これと後身にあたる大官大寺の二つだけである。

なお、『大安寺縁起』には百済宮の記事が見えないが、これは、撰録者が、『日本書紀』と共通の原史料から、百済大寺関係の記事だけを採ったためとみてよいだろう<sup>7)</sup>。一方、『大安寺縁起』のみに見えるものとしては、建立の際に子部社を切り開いたため、社神の怨みにより九重塔と金堂の石鴟尾が焼失し、舒明は崩御にあたって、皇后である皇極に寺の再建を遺勅したという、説話的な記事がある。

しかし、舒明が百済宮で死去したのは、百済大寺の発願からわずか2年3ヵ月後の舒明13年(641)10月のことである。したがって、上記の記事を根拠に、舒明創建の百済大寺が焼失し、皇極朝に再建されたとする見解があるけれども、<sup>8)</sup>舒明朝のうちに、そこまで堂塔が建ち上がっ

Tab. 7 百済大寺・高市大寺の沿革

年 (西暦)	記 事	出 典	備考	
舒明11年 (639)	大宮と大寺をつくる。百済川のほとりを宮処とし、西の民は宮を造り、東の民は寺を作る。書直県をその大匠とする。 百済川のほとりに九重塔を建てる。	日本書紀	百 済 大 寺	
	百済川のほとりに子部社を切りひらいて、九重塔を建てる。百済大寺と号す。 社神の怨みにより、九重塔と金堂の石鴟尾を焼破。	大安寺伽藍縁起 并流記資財帳 (以下、縁起)		
舒明12年 (640)	舒明、百済宮に移る。	日本書紀		
舒明13年 (641)	舒明、百済宮で死去。宮の北で殯をおこなう。	日本書紀		
皇極元年 (642)	百済大寺を建てるために、近江と越の人夫を動員。 阿倍倉橋麻呂と穂積百足の二人を造此寺司に任命。	日本書紀 縁 起		
皇極2年 (643)	皇極、飛鳥板蓋宮に移る。	日本書紀		
大化元年 (645)	恵妙法師を百済寺の寺主とする。 孝徳、難波に都を遷す。	日本書紀 日本書紀		
白雉元年 (650)	丈六・脇侍・八部など36体の繡仏を造らせる。	日本書紀・縁起		
白雉2年 (651)	丈六の繡仏などが完成する。	日本書紀・縁起		
斉明元年 (655)	斉明(皇極)、飛鳥板蓋宮に重祚。	日本書紀		
天智7年 (668)	丈六釈迦仏像ほかの諸像を百済大寺に安置する。	扶桑略記		
天武2年 (673)	天武、飛鳥浄御原宮で即位。 美濃王と紀臣訶多麻呂を造高市大寺司に任命する。 御野王と紀臣訶多麻呂の二人を造寺司に任命する。 百済の地から高市の地に寺を移す。	日本書紀 縁 起		高 市 大 寺 (天 武 朝 大 官 大 寺)
天武6年 (677)	高市大寺を改めて、大官大寺と号す。	縁 起		
天武11年 (682)	大官大寺で140人あまりを出家させる。	日本書紀		
天武14年 (685)	大官大寺・川原寺・飛鳥寺で経をよませる。	日本書紀		
持統8年 (694)	持統、藤原宮へ移る。	日本書紀		
大宝元年 (701)	造大安寺官と造薬師寺官を寮に準じさせる。 造塔官と造丈六官を司に準じさせる。	続日本紀	文 武 朝 大 官 大 寺	
大宝2年 (702)	高橋朝臣笠間を造大安寺司に任命する。	続日本紀		
文 武 朝	文武、九重塔と金堂を建て、丈六の仏像を造らせる。	縁 起		
和銅3年 (710)	元明、平城宮へ移る。	続日本紀		
和銅4年 (711)	大官大寺焼け落ちる。	扶桑略記		
霊亀2年 (716)	(大安寺を)平城京左京六条四坊へ移し建てる。	続日本紀		大 安 寺
神護景雲元年 (767)	高市郡高市里の古寺地西辺の田2町など、大和・摂津・山背の計6町の田を大安寺に献入する。	類聚三代格		
元慶4年 (880)	百済大寺と「高市大官寺」の旧寺地である十市郡百済川辺の田1町7段160歩と高市郡夜部村の田10町7段250歩を、大安寺の願い出によって返還する。	日本三代実録		

塔の焼失は  
史実でない

ていたとは考えがたい。その時点では、百済大寺の堂塔は一つとして完成にいたっていなかったとみるべきである。<sup>9)</sup> こうした火災を含む説話的な記事が『日本書紀』にまったく認められないこととあわせて、これを史実と考えるのは無理であろう。<sup>10)</sup> 両者の史料的価値の差については多言を要しませんが、『大安寺縁起』にしかない記事の信憑性を『日本書紀』と同等に扱うことによって組み立てられる論理には、根本的な危うさがあると言わざるをえない。

ところで、この九重塔造立については、まったくの虚構とみる説と、史実を伝えるものとする説とが対立している。<sup>11)</sup> しかし、史実と認めがたい『大安寺縁起』の焼失記事を取り去れば、<sup>12)</sup> これを含む舒明朝以後の造営に関して、『日本書紀』と『大安寺縁起』の語る記事は、相互に補完するかたちで、ほぼ一致している点が注目される。

造営の再開

すなわち、『日本書紀』によれば、皇極元年(642)9月には、百済大寺造営のために、近江と越の夫を動員しており、これは、阿倍倉橋麻呂と穂積百足の二人を「造此寺司」に任じたという『大安寺縁起』の記事とも対応する。前年の舒明の死によって頓挫した造営の再開を示すものとみてよいだろう。<sup>13)</sup> そして、大化元年(645)8月には、寺主として恵妙が任命され(『日本書紀』)、白雉2年(651)3月には、皇極の命により前年10月に製作を開始した36体の繡仏が完成している(『日本書紀』『大安寺縁起』)。さらに、天智7年(668)には、<sup>14)</sup> のちの大安寺金堂本尊となる丈六仏ほかの乾漆像が、天智によって施入された(『大安寺縁起』『扶桑略記』)。したがって、少なくとも、こうした造像と施入がおこなわれた時点で、それをおさめるべき堂宇は、ほぼ完成していたと考えざるをえない。

順調な進展

また、以上の記事は、百済大寺の造営の継続とその進捗状況を示す一連の記録として、つながりがきわめてスムーズである。『大安寺縁起』が『日本書紀』を参照することなく成立したと<sup>15)</sup> 考えられる点とあわせて、両者に一致する記述内容は、史実を伝えるものと理解すべきであろう。百済大寺の造営は、舒明・皇極から天智へとつづく皇統によって継承され、比較的順調に進展したとみてよい。<sup>16)</sup>

よって、百済大寺における九重塔の存在についても、これを潤色とする理由は乏しく、舒明朝における起工は事実と考えるのが妥当だと思う。また、舒明は、あえて蘇我氏の勢力基盤から離れた場所に、百済大寺と百済宮を建設した可能性が高いが、<sup>17)</sup> その場合、天皇家の寺として創建された百済大寺は、蘇我氏の氏寺であった飛鳥寺(明日香村飛鳥)に対する強烈な対抗意識の産物とみることができる。飛鳥寺をはるかに凌ぐ九重塔は、そのシンボルにほかならないだろう。なお、こうした大規模な塔の系譜は、以後、文武朝大官大寺の九重塔、さらに大安寺の2基の七重塔へと受け継がれており、百済大寺以来の伝統と推定される。<sup>18)</sup>

高市大寺へ

**高市への移建と文武朝の造営** 天武2年(673)、百済大寺は、百済の地から高市の地に移されて、高市大寺となる。『大安寺縁起』には、同年12月の御野王と紀臣訶多麻呂の「造寺司」任官と高市移建記事が見え、『日本書紀』も同様に、美濃王と紀臣訶多麻呂の「造高市大寺司」任官を記す。天武がこの年の2月に飛鳥浄御原宮で即位していることから、これらが飛鳥浄御原宮に近接した場所への移建措置であったことは確実であろう。

なお、『大安寺縁起』によれば、その後ほどなく、天武6年(677)には大官大寺への改称がおこなわれている。『日本書紀』でも、これ以降は大官大寺の呼称に統一されており、地名に基づく従来の寺名からの転換が図られたことがうかがえる。<sup>19)</sup> そして、天武9年(680)には、官司

の治める「国の大寺たるもの二三」として、高い寺格が保証された。この「大寺」とは勅願寺のことであって、その第一号としての百済大寺・高市大寺・大官大寺は、例外的に寺名に「大寺」の呼称を含む特別な扱いがなされたのである。<sup>20)</sup>

一方、『続日本紀』には、文武朝における「大安寺」(大官大寺)の造営を示す記事がある。『大安寺縁起』にも対応する記録があることから、この時点で新たな伽藍の造営がおこなわれたことは疑いの余地がなく、それは発掘調査によっても裏づけられる。

文武朝大官大寺の造営

すなわち、明日香村小山に基壇を残す大官大寺は、文武朝の建立にかかるものであって、高市大寺(天武朝大官大寺)ではないことが明確となった。伽藍の中で最初に造営された金堂基壇とその下から、藤原宮期の土器が出土したのである。<sup>21)</sup>また、この伽藍は、藤原京の条坊に完全に則っている。<sup>22)</sup>藤原京条坊の施工は、早くとも「新城」造都記事の見える天武5年(676)以後と推定されるので、<sup>23)</sup>この点からも高市大寺とは考えられない。

高市大寺は、移建年次から考えても、藤原京条坊とは無関係の伽藍であったはずであり、またその経緯からみると、百済大寺をほぼそのままのかたちで移建した可能性が高いと思う。<sup>24)</sup>とすれば、藤原京第一の官寺としては不十分なものであったことは想像に難くないだろう。文武朝の大官大寺の造営は、それを藤原京の条坊にあわせた大伽藍へと脱皮させるための措置として理解できるのである。

なお、文武朝大官大寺の伽藍は、完成を間近に控えて焼失したことが、発掘調査で確認されており、『扶桑略記』和銅4年(711)条の大官大寺焼亡記事を裏づけている。

## C 百済大寺の所在

**所在を示す史料** 百済大寺や百済宮の位置を具体的に示す史料は限られており、確実に信頼が出来るのは、『日本書紀』『大安寺縁起』が一致して伝える「百済川の側」に建てられたという記録にすぎない。ただし、『大安寺縁起』のその部分には、子部社を切り開いて九重塔を建てたとあり、『日本三代実録』元慶4年(880)10月20日条にも、百済大寺が子部大神の近傍にあったとする記事が見える。後者は、百済大寺と「高市大官寺」の旧寺地の返還を願い出た大安寺三綱牒の中に見えるもので、この申請は朝廷の認めるところとなり、十市郡百済川辺の田1町7段160歩と、高市郡夜部村の田10町7段250歩が、大安寺に返入されている。

百済川の側

子部社近傍

これらによって、百済大寺の近辺に子部社が存在したこと、百済大寺が十市郡の百済川のほとりに存在したことは、事実と考えてよいだろう。<sup>25)</sup>もちろん、『日本三代実録』の記事は、厳密には、大安寺が返還を要求した土地の位置を示すものであって、百済大寺や高市大寺の位置を正しく伝えていない可能性はある。<sup>26)</sup>しかし、廃絶後の時間的な経過や、大安寺との地理的な隔たりが、正しい所伝を全く失わせるほど大きいものだったとは思われない。とくに、過去の寺地に大規模な基壇が形をとどめていたとすれば、何らかのかたちで、そうした記憶は残されていたと考えるのが自然ではないか。朝廷がこの申請を認めている点とあわせて、これらは百済大寺の所在を示す史料と判断してよいと思う。

**既往の学説** 通説では、百済川を現在の曾我川にあて、その西方、鎌倉後期の三重塔の建つ北葛城郡広陵町百済を百済大寺の旧地としてきた。この曾我川を隔てた東は十市郡に属し、現在、そこに子部神社も鎮座する。また、『万葉集』の高市皇子の殯宮挽歌には、葬列が「百済の原」

広陵町説

を経て、「<sup>きのへ</sup>木上宮（<sup>きのへ</sup>城上殯宮）」へと向かう姿が歌われており（巻2-199）、「百済の原」を百済大寺近辺、城上殯宮を広陵町内に比定しようとすれば、両者の位置関係にも無理がない。

しかしながら、広陵町一帯では、それらしい瓦や遺構は全く見つかっていない。瓦葺の寺院の場合は、少なくとも瓦の散布というかたちで、その存在の徴証は得られるのが普通であり、この点が通説の大きな弱点である。さらに問題となるのは、広陵町百済の地が、十市郡でなく広瀬郡に属したことで、『日本三代実録』の記載とは齟齬をきたしてしまう。

和田 萃 説　そこで、これに対して疑問を呈したのが、和田萃である。和田は、檀原市高殿町に「東百済」「百済」「西百済」の地名が残り、「百済川」という小河川も存在することから、香具山の北西の一带に百済大寺を比定する説を提起した。そして、城上殯宮についても、阿倍山田道に沿った明日香村の「木部」<sup>27)</sup>（明日香村飛鳥）に求める。

この説は、多くの賛同者を得て一時定説化するが、その後、さらにこれに対する反論が提示される。なかでも、通説に立つ平林章仁<sup>28)</sup>の反論は詳細だが、和田説の最大の問題点は、持統10年（696）に死去した高市皇子の葬列が通過したという「百済の原」が、遷都2年後の藤原京内、それも宮内かそのごく近辺となってしまうことである。宮内は論外としても、その間近の都市的な様相を示していた地域を、「百済の原」と呼んだとは考えられない。また、明日香村の「木部」の一带は、当時京内と意識されていた可能性が高く、死穢を避ける喪葬令皇都条の規制により、そこに皇子や皇女の殯宮が営まれることはなかつた<sup>29)</sup>。以上、こと「百済の原」と城上殯宮の位置に関して、和田説は成立しがたいと思う。

渡里 恒信 説　城上殯宮の所在　こうしたなかで、近年、城上殯宮の所在に関する新説が、渡里恒信によって<sup>30)</sup>提示された。『日本書紀』の武烈3年11月条に「城の像を水派<sup>みまた</sup>邑に作れとのたまふ。仍りて城上と曰ふ」と見えることから、「水派邑」や用明2年（587）4月丙午条の「水派宮」を寺川と粟原川の合流点付近に求め、城上殯宮もその一带に想定するものである。この近辺には、2カ所に「木部」の小字名も残っている（城上郡二十二条二里三十・三十一坪、現桜井市上之庄。十市郡路東二十三条六里八坪、現桜井市東新堂<sup>31)</sup>）。

一方、『万葉集』には、題詞を欠くものの、同じく高市皇子の殯宮挽歌と推定される一群があり、そこでは、葬列が「<sup>きのへ</sup>城於の道」を通り、「<sup>いはれ</sup>石村を見つつ」、殯宮へ向かったことが歌われている（巻13-3324<sup>32)</sup>）。前者は、城上殯宮への道の意味であろうが、後者の「石村（=磐余）」は、「第Ⅱ章1 調査地域」で述べたように、吉備池廃寺の一带を含むか、その南ないし南西に隣接する地域の呼称であったと推定される。したがって、高市皇子の宮であった香具山宮から、「百済の原」を経て城上殯宮へ至る道筋の途中に位置することになり、これは葬列が「石村を見つつ」通過したという歌詞とも整合してくる。

もっとも、磐余については、吉備池廃寺よりさらに北東に比定する説もあるけれども<sup>33)</sup>、いずれにしても、香具山からみて北東方向にあたることは確実であり、香具山宮を發した葬列が北東へ向かったことは間違いないだろう。その場合、香具山から北西方向の広陵町に城上殯宮を求める通説では、北東へ向かう理由を説明しがたいのに対し、渡里説はこうした葬列のコースをもっともよく説明しうる。周辺の青木廃寺（桜井市橋本）や宗像神社（桜井市外山）などが、高市皇子やその子の長屋王との強い結びつきを示している<sup>34)</sup>事実とあわせて、城上殯宮や長屋王家の「木上司」が渡里の比定地に存在した可能性は高い<sup>35)</sup>と考える。

**百済大寺の所在** 城上殯宮の位置を以上のように想定すると、おのずから、「百済の原」は吉備池廃寺の一带に求められることになる。<sup>36)</sup> 百済大寺の所在を十市郡と記す先の『日本三代実録』の記事を考えあわせれば、地理的にも、百済大寺を吉備池廃寺に比定する説は、通説であった広陵町（旧広瀬郡）百済説以上に有力といえるだろう。吉備池廃寺の一带が、古代から一貫して十市郡に属していたことは、確実だからである。

百済大寺は  
十市郡所在

また、子部神社は、現在、櫃原市飯高町<sup>ひだか</sup>に鎮座するが、それが古代の位置を伝えるという確証はまったくない。逆に、この東方でおこなった発掘調査では、西北西へ向かう、13世紀頃に埋没した幅200mにおよぶ河川<sup>37)</sup>の存在が確認されており、子部神社の社地を含むこの地域の条里の乱れは、そうした古い時期の曾我川や飛鳥川の流路であったことが明らか<sup>38)</sup>となっている。つまり、現在の子部神社の位置は、古代まで溯りえないのである。

一方、吉備池廃寺では、金堂土壇の東方に「カウベ」「コヲベ」、北側の小丘陵に「高部」という小字名が残る<sup>39)</sup> (Fig. 32)。これらは、『大安寺縁起』や『日本三代実録』の記事から百済大寺近傍に想定される「子部社」「子部大神」との関連をうかがわせるに充分であろう。上記の地名は、かつてそこに子部神社が存在したことを強く示唆するものとみてよい。<sup>40)</sup>

子部社に關  
わる小字名

さらに、「第三章 1 遺跡の立地と地形」で述べたように、寺域の南寄りの部分は、現在の米川の旧河道にあたっており、吉備池廃寺が河川の北側に立地していたことは、事実として確かめられる。それが、『日本書紀』と『大安寺縁起』が百済大寺の所在を「百済川の側」と伝える「百済川」に相当することは間違いないだろう。

以上、「百済大寺=吉備池廃寺」説にとって支障となる要素はほとんどないことが確認できた<sup>41)</sup>と思う。吉備池廃寺は百済大寺と考えると誤りあるまい。

百済大寺は  
吉備池廃寺

## D 高市大寺の所在

**所在を示す史料** それでは、百済大寺を移建した高市大寺はどこにあったのだろうか。前述のように、明日香村小山の大官大寺は、文武朝の造営によるもので、その下層に前身寺院が存在した徴証はまったくない。高市大寺が別地に存在したことは確実である。

これに関して、『大安寺縁起』は、百済の地から高市の地へ移したと記すのみであるが、先の『日本三代実録』には、大安寺に返入された旧寺地として、高市郡夜部村の田10町7段250歩が見える。これは、返還の申し立てをおこなった大安寺三綱牒の「高市大官寺」の寺地にあたるもの<sup>42)</sup>と考えられる。

この「高市大官寺」という呼称を、高市大寺と大官大寺を兼ねた大安寺による創称とみて、それぞれの寺地が区別されていないのは、両者が隣接した位置関係にあったことを示すと<sup>43)</sup>する見解がある。その可能性は高いだろう。少なくとも、高市大寺と文武朝大官大寺はともに夜部村に含まれ、ごく近接した位置関係にあったと考えておきたい。

高市大寺は  
夜部村所在

なお、夜部村は、『和名類聚抄』の「高市郡遊部郷」に相当するとみられるが、範囲については明らかでない。ただ、『日本後紀』大同元年（806）4月庚子条には、「大宮<sup>ただ</sup>に直に向かへる野倍<sup>やべ</sup>（山辺）の坂」という歌が引かれている。同じ歌は『日本靈異記』下巻第38話にも見え、また『万葉集』にも、「屋部の坂の歌」と題された別の歌がある（巻3-269）。

この「屋部の坂」は、香具山から南に下る中ツ道の坂とする見解もあるが<sup>44)</sup>、「大宮に直に向か

へる」という表現から、藤原宮の南正面に位置する日高山丘陵の坂と解すべきだろう。<sup>45)</sup>「大宮」を平城宮とみる説もあるけれども、この歌意に該当する坂は平城京には存在せず、藤原京でも、日高山丘陵を下る朱雀大路の坂以外には求めがたいからである。

**木之本廃寺と奥山廃寺・小山廃寺** 以上のように、高市郡夜部村は、文武朝大官大寺から北西の日高山丘陵を含む範囲であって、高市大寺もそのなかに存したと推定される。以下、この周辺でそれに該当する可能性をもつ寺院について検討しよう (Fig. 102)。

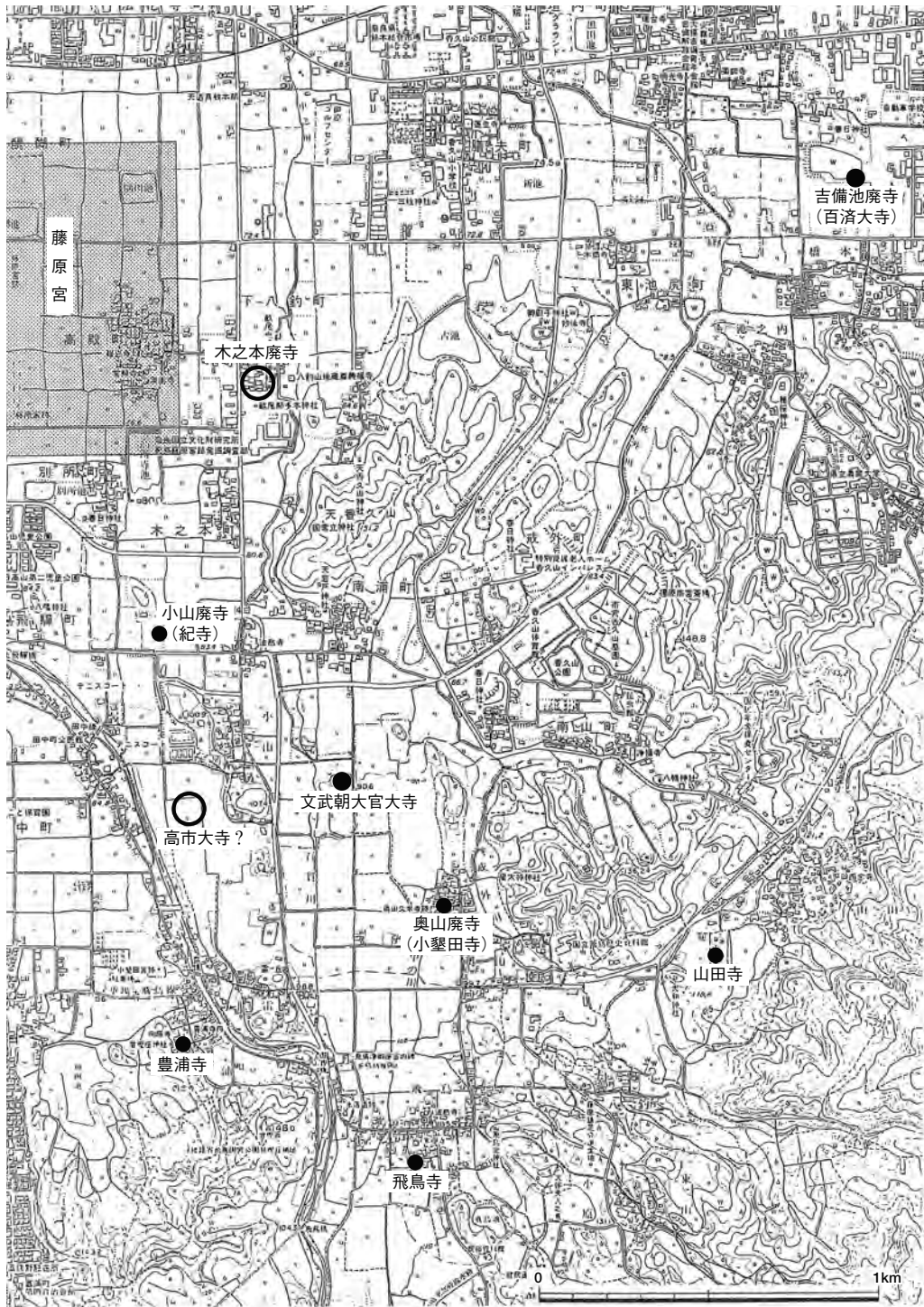


Fig. 102 吉備池廃寺・文武朝大官大寺と周辺の寺院 1:20000



まず、吉備池廃寺と同範の瓦を出土する木之本廃寺が、高市大寺の候補の一つであることは否定できない。ただし、寺院跡であることを示す遺構は、今のところ検出されていない。

また、木之本廃寺の周辺は、十市郡と高市郡の郡界が錯綜しており、古代にいずれに属したか即断できないものの、中世以降は確実に十市郡に属しており、この点が高市大寺にあてる場合の障害となる。そのうえ、『日本三代実録』の記事との関係では、先述の想定とは異なり、文武朝大官大寺との間が離れすぎてしまう。木之本廃寺の性格については未詳とせざるをえないが、これを高市大寺にあてるのは困難だろう。

このほか、高市大寺に関しては、奥山廃寺（奥山久米寺、明日香村奥山）に比定する見解や、小山廃寺（紀寺、明日香村小山）にあてる説が提示されている。<sup>46)</sup>しかし、奥山廃寺は、瓦の年代が高市大寺に合致せず、むしろ小墾田寺（小治田寺）に比定するのが妥当と思われる。<sup>47)</sup>また小山廃寺は、伽藍規模が小さいうえに、藤原京の条坊に合致することから、高市大寺とは考えがたい。<sup>48)</sup><sup>49)</sup>金堂基壇の面積でも、小山廃寺は吉備池廃寺の1/3に満たないのである。<sup>50)</sup>

**高市大寺の所在** 以上のように、上記の三寺院はいずれも高市大寺に該当する可能性は乏しいが、もう一つ、寺院の存在を想定できる場所がある。文武朝大官大寺の西方、飛鳥川との間の平坦地（明日香村雷）である。残念ながら発掘調査がほとんどおこなわれていないため、不明な部分が多いけれども、この周辺からは、大官大寺と同範の瓦のほかに、四重弧文軒平瓦、凸面に布目をもつ特徴的な平瓦などがみつがっている。<sup>51)</sup>

大官大寺西方の平坦地

注目されるのは、それらと共通する瓦が、平城京の大安寺でも出土するという事実である。つまり、ここから大安寺へ瓦を運んだ状況が復元され、前身にあたる寺院がこの地に存在したことをうかがわせる。<sup>52)</sup>とすれば、年代的に文武朝大官大寺に先行する瓦の存在とあわせて、それを高市大寺にあてることは十分に可能だろう。<sup>53)</sup>

高市大寺か

そこで、史料にもう一度目を向けると、文武朝大官大寺が中心伽藍以外にも別に寺地を有していたことについては、次のような史料的裏づけがある。

すなわち、『類聚三代格』巻15の神護景雲元年（767）12月1日太政官符には、大安寺に献入された6町の田のうち、「路東十一橋本田」と「路東十二岡本田」の計2町が、高市郡高市里の「専古寺地西辺」に存したと見える。<sup>54)</sup>これらは、大官大寺の西方、飛鳥川との間の平坦地である路東二十八条三里十一坪（字サコツメ）と十二坪（字フケノツボ）に比定することができる（Fig. 103）。したがって、寺地はそこまで広がっていたと考えてよい。<sup>55)</sup>

「専古寺地西辺」

また、『日本三代実録』が返入を記す夜部村の田の面積は、藤原京の条坊で6町を占めた文武朝大官大寺の中心伽藍の範囲に近いが、厳密にはそれより小さい。便宜的に、条坊制1町と条里制1町の一辺の比を5:4（375大尺:300大尺）とすると、両者の面積比は25:16となり、大官大寺の寺地6町は条里制の9町3段270歩に相当するが、旧寺地として返還された10町7段250歩には達しない。また、この場合の条坊制6町の面積は条坊計画線間の数値で、実際の寺地は、それから外周の道路部分を減じたものとなる。一方、条里制1町の面積は、畦畔や溝渠を含んで、より広くなることが確認されている（300大尺は、実長で約106mであるのに対し、条里制1町の一辺長は約109m）。したがって、文武朝大官大寺の寺地6町を正確に条里水田に換算すれば、その面積は、これよりもさらに小さくなる。両者の差が、中心伽藍以外の寺地の存在を示すことは確かだろう。

さらに、『大安寺縁起』には、大和国にあった5カ所の庄の一つが「高市郡古寺所に在り」と見える。『日本三代実録』の記事が、これや神護景雲元年（767）の献入地を除いた寺地の返還を示すものだとすれば、大官大寺の寺地は、さらに大きかったことになる。

以上のように、文武朝大官大寺は、中心伽藍の西方、飛鳥川との間にもかなりの寺地を有していた。路東二十八条三里十一坪と十二坪を含むこの一帯には、前述のごとく、文武朝大官大寺より年代的に先行する大安寺と共通の瓦が分布しており、前身である高市大寺の伽藍そのも

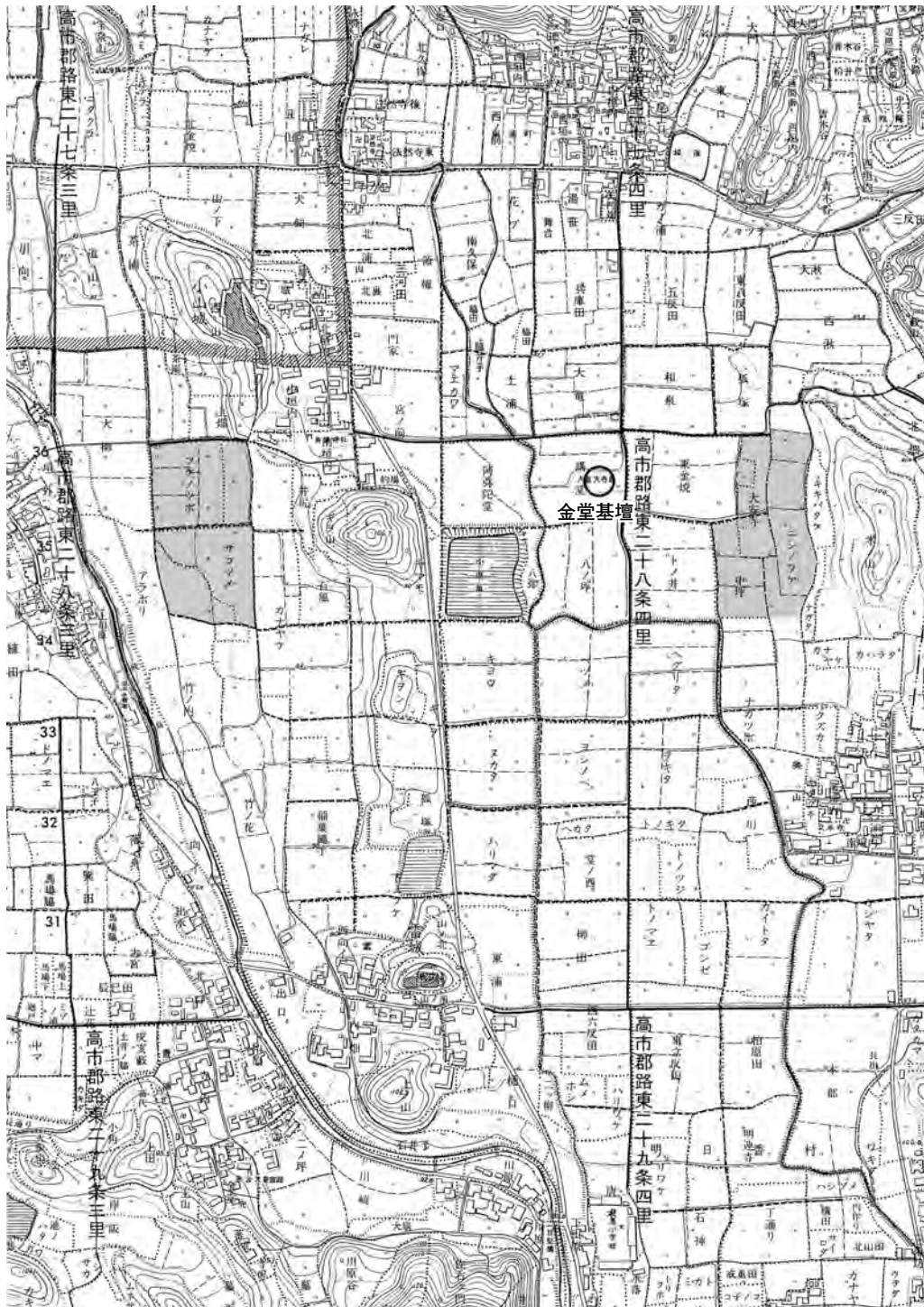


Fig. 103 文武朝大官大寺周辺の条里と小字 1:8000 (『大和国条里復原図』に加筆)

のが存在した可能性がきわめて高いと思う。<sup>56)</sup>

とくに注目したいのは、先の太政官符にみえる路東二十八条三里の「高市里」という里名で「高市里」がある。高市大寺という寺名が、郡名としての高市に基づくのではなく、百濟大寺と同様、狭域地名に由来することは確実とみられるが、その「高市」地名がここに存在する意義は大きいと言わざるをえない。高市大寺は、この路東二十八条三里「高市里」に求めるべきであろう。<sup>57)</sup>

もともと、現状で、この場所から吉備池廃寺と同範の瓦の出土は見られず、建物基壇の存在も未確認である。高市大寺の実態の解明は、吉備池廃寺の調査が百濟大寺への比定を可能にしたのと同様に、今後の発掘調査に俟つ部分が多い。

- 
- 1) 和田 萃『日本古代の儀礼と祭祀・信仰 上』塙書房、1995年、5～83頁（初出1969年）。和田 萃「百濟宮再考」『季刊明日香風』第12号、飛鳥保存財団、1984年。
  - 2) 山崎周二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』奈文研創立30周年記念論文集、同朋舎出版、1983年、註148。
  - 3) 大脇 潔『飛鳥の寺』日本の古寺美術 14、保育社、1989年、162～191頁。毛利光俊彦「仏教の開花」『新版古代の日本』第6巻 近畿Ⅱ、角川書店、1991年。花谷 浩「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究』第40巻第2号、考古学研究会、1993年。菱田哲郎「瓦当文様の創出と七世紀の仏教政策」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流 5、名著出版、1994年。上原真人『瓦を読む』歴史発掘 11、講談社、1997年、85～86頁。森 郁夫『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局、1998年、117～136頁（初出1994年）。岡本東三『古代寺院の成立と展開』日本史リブレット 17、山川出版社、2002年、44～52頁。
  - 4) 小澤 毅「吉備池廃寺の発掘調査」『仏教芸術』235号、毎日新聞社、1997年。
  - 5) 福山敏男『奈良朝寺院の研究』高桐書院、1948年、15～30頁。また、聖徳太子（厩戸皇子）が、わが子である山背大兄王をさしおいて田村皇子（舒明）に後事を託したというのは不自然であり、百濟大寺の造営開始が舒明即位11年後というのも、太子の委託によるものとすれば遅きにすぎる（黛弘道「聖徳太子と大安寺と日本書紀」『東アジアの古代文化』102号、大和書房、2000年）。
  - 6) 水野柳太郎『日本古代の寺院と史料』吉川弘文館、1993年、159～225頁。
  - 7) 塚口義信「百濟大寺に関する基礎的考察－『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』所載の焼失記事を中心として－」『日本書紀研究 第十八冊』塙書房、1992年。
  - 8) 森 郁夫「百濟大寺－吉備池廃寺をめぐる問題点－」『帝塚山大学考古学研究所研究報告 I』帝塚山大学考古学研究所、1998年。
  - 9) 大橋一章「百濟大寺造営考」『美術史研究』第19冊、早稲田大学美術史学会、1982年。ちなみに、皇極元年（642）7月庚辰条には、降雨祈願のため、蘇我蝦夷が「大寺」の南庭に仏像を安置し、衆僧を集めて法会を営んだという記事がある。この「大寺」を百濟大寺と解する見解がしばしば見受けられるが、法会の主宰者が蝦夷であることや、『日本書紀』における「大寺」の用例からみて、蘇我氏の氏寺であった飛鳥寺を指すと判断して誤りない（大橋一章「大寺考」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第41輯第3分冊、早稲田大学大学院文学研究科、1996年）。百濟大寺が、その時点で法会を営むことができる状況にまで、造営が進行していたことを示す史料とはなりえないのである。
  - 10) 発掘調査でも、金堂や塔の焼失をうかがわせる痕跡はまったくない。ただし、僧房SB340・SB400の柱掘形には明瞭な焼土の混入がみられるが、これらは寺院造営に先行する冶金関係の工房に関わる可能性が高い（146頁）。周辺部で火災がなかったとは断言できないけれども、『大安寺縁起』の記事を伽藍中枢部の焼失に結びつけるのは無理であろう。
  - 11) 星野良史「百濟大寺の創立に関する一考察」『法政大学大学院紀要』第16号、法政大学大学院、1986年。星野良史「大化改新後の百濟大寺」『古代国家の歴史と伝承』吉川弘文館、1992年。
  - 12) 大橋一章「百濟大寺造営考」前掲註9）。塚口義信「百濟大寺に関する基礎的考察」前掲註7）。
  - 13) 舒明死後の殯は百濟宮の北で挙行され、「百濟の大殯」と称された。このすぐ近辺で槌音高く工事がおこなわれるはずもなく、百濟大寺の造営が、その間中断していたことは疑いない。
  - 14) この年次は『扶桑略記』による。

- 15) 水野柳太郎『日本古代の寺院と史料』前掲註6)、159~225頁。星野良史「百済大寺の創立に関する一考察」前掲註11)。塚口義信「百済大寺に関する基礎的考察」前掲註7)。
- 16) 大橋一章「百済大寺造営考」前掲註9)。
- 17) 舒明の正宮であった飛鳥岡本宮は、舒明8年(636)に焼失する。その後、舒明は蘇我氏の本拠である飛鳥へ戻ろうとはせず、やがて百済大寺と百済宮の建設に着手する。こうした点からみると、蘇我蝦夷によって擁立された舒明ではあったが、治世の後半においては、蘇我氏との間に確執を生じていた可能性が高いと思う。
- 18) 水野柳太郎『日本古代の寺院と史料』前掲註6)、159~225頁。
- 19) 星野良史「高市大寺・大官大寺の造営過程」『法政考古学』第10集記念論文集、法政考古学会、1985年。
- 20) 大橋一章「勅願寺と国家官寺の造営組織」『仏教芸術』222号、毎日新聞社、1995年。大橋一章「大寺考」前掲註9)。
- 21) 上野邦一「大官大寺跡における最近の発掘調査」『仏教芸術』129号、毎日新聞社、1980年。
- 22) 井上和人「大官大寺の発掘調査」『日本歴史』第422号、吉川弘文館、1983年。
- 23) 小澤 毅「古代都市『藤原京』の成立」『考古学研究』第44巻第3号、考古学研究会、1997年。
- 24) 大脇 潔「飛鳥の寺」前掲註3)、162~191頁。大橋一章「勅願寺と国家官寺の造営組織」前掲註20)。なお、高市大寺の建築が、礎石や瓦を用いない程度のものだったとする見解がある(星野良史「高市大寺・大官大寺の造営過程」前掲註19))が、従えない。
- 25) 星野良史「百済大寺の創立に関する一考察」前掲註11)。
- 26) 平林章仁『七世紀の古代史—王宮・クラ・寺院—』白水社、2002年、11~56頁(初出1987年)。
- 27) 和田 萃『日本古代の儀礼と祭祀・信仰 上』5~83頁、和田 萃「百済宮再考」前掲註1)。
- 28) 平林章仁『七世紀の古代史』前掲註26)、11~56頁。
- 29) 上野 誠『古代日本の文芸空間—万葉挽歌と葬送儀礼—』雄山閣出版、1997年、170~180頁(初出1995年)。
- 30) 渡里恒信「城上宮について—その位置と性格—」『日本歴史』第598号、吉川弘文館、1998年。
- 31) 奈良県教育委員会『大和国条里復原図』1980年、No77。
- 32) 渡里恒信は、これらの歌を、慶雲2年(705)5月に死去した忍壁皇子の葬送に関わるものとみるが、3324番歌の「皇子の尊」を文学特有の修辞として、忍壁皇子にあてるのは無理があると思う(平林章仁『七世紀の古代史』前掲註26)、85~116頁(初出1999年))。この表現からも、通説どおり高市皇子への挽歌であって、歌中の「雲」は火葬とは関係しないと判断すべきだろう。
- 33) 第二章1の註3)参照(13頁)。
- 34) 大脇 潔「忘れられた寺—青木廃寺と高市皇子—」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集刊行会、1993年。
- 35) 寺崎保広『長屋王』人物叢書、吉川弘文館、1999年、179~188頁。
- 36) 吉備池廃寺は条坊が施工された藤原京域に含まれるので、それを「百済の原」と称したことに疑問がないわけではない。しかし、周辺部では条坊施工が遅れる例が知られており(竹田政敬「藤原京の京域」『古代文化』第52巻第2号、古代学協会、2000年)、持統10年(696)段階で、東京極に近いこの地域まで都市化が及んでいなかったことは充分考えられる。
- 37) 中井一夫・松田真一・寺沢 薫「国道24号線バイパス工事に伴う試掘調査概報—橿原市飯高・小槻地区—」『奈良県遺跡調査概報1978年度』奈良県教育委員会、1979年。
- 38) 井上和人『条里制研究の一視点—奈良盆地における条里地割の施工年代についての再検討—』静邨詩社(私家版)、1994年、13~18頁。
- 39) 奈良県教育委員会『大和国条里復原図』前掲註31)、No83。
- 40) ちなみに、猪熊兼勝は、金堂基壇の東と南に接する小字「カムリ石」を、『大安寺縁起』に見える百済大寺金堂の石鷗尾のこととし、その南の小字「冠名」も「冠石」の誤写とみる。
- 41) 一方、百済大寺と対になって造営された百済宮については、いまだその遺構を確認するにいたっていない。ただ、「西の民は宮を造り、東の民は寺を作る」という『日本書紀』舒明11年(639)7月条の記事が、両者の位置関係を示すものだとすれば、百済宮は百済大寺の西側に存在したことになる。地形的には、吉備池廃寺の寺域北半から西北西に向かって、現在の吉備の集落がのる高燥な微高地がのびており、それを中心とした地域が有力な候補となろう。また、『日本書紀』敏達元年(572)4月

- 条の百済大井宮も、前後の宮室の所在からみると、この近辺に存在した可能性が想定されるので、あるいは舒明の百済宮の下層に存在するのかもしれない。
- 42) これを寺院周辺の寺領とみる説もあるが(平林章仁『七世紀の古代史』前掲註26)、11~56頁)、大安寺三綱牒の文意を素直にとって、旧寺地(寺院地)と解するのが妥当だと思う。また、そこには「水湿之地」「高燥之处」があったとされるが、「高燥之处」は、基壇を含む比較的高い部分とみてよく、そこに百姓が居住したことが知られる。この2種類の地形は、百済大寺と「高市大官寺」のいずれの旧地にも存在したとして不都合はなく、とくに「水湿之地」だけを百済大寺に結びつける(星野良史「百済大寺の創立に関する一考察」前掲註11)必要はない。
- 43) 星野良史「高市大寺・大官大寺の造営過程」前掲註19)。
- 44) 岸 俊男『日本古代宮都の研究』岩波書店、1988年、67~101頁(初出1970年)。和田 萃「百済宮再考」前掲註1)。しかし、その根拠とされた「大和国東喜殿莊近傍図」(西岡虎之助編『日本莊園絵図集成(下)』東京堂出版、1977年、第25図)の比定には、誤りがあることが指摘されている(井上和人「飛鳥京域論の検証」『考古学雑誌』第71巻第2号、日本考古学会、1986年)。
- 45) 小澤 毅「吉備池廃寺の発掘調査」前掲註4)。
- 46) 田村吉永「百済大寺と高市大寺 一 大安寺成立に関する一見解」『南都仏教』第8号、南都仏教研究会編、1960年。
- 47) 猪熊兼勝「瓦と埴」『高松塚と藤原京』日本美術全集第3巻、学習研究社、1980年。森 郁夫『日本古代寺院造営の研究』前掲註3)、117~136頁。森 郁夫「百済大寺」前掲註8)。近江俊秀「吉備池廃寺は百済大寺か 一 百済大寺と高市大寺の所在地をめぐる」『シンポジウム 吉備池廃寺をめぐる 一 百済大寺はどこか』帝塚山大学考古学研究所、1998年。
- 48) 山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」前掲註2)、註114。佐川正敏・西川雄大「奥山廃寺の創建瓦」『古代瓦研究 I 一 飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで』奈文研、2000年。
- 49) 小澤 毅「小壘田宮・飛鳥宮・嶋宮 一 七世紀の飛鳥地域における宮都空間の形成」『文化財論叢 II』奈文研創立40周年記念論文集、同朋舎出版、1995年、註27。大脇 潔「蘇我氏の氏寺からみたその本拠」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社、1997年。
- 50) 井上和人「大官大寺の発掘調査」前掲註22)。
- 51) 大脇 潔「大安寺 1 一 百済大寺から大官大寺へ」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所、1995年。花谷 浩「京内廿四寺について」『研究論集 XI』奈文研学報第60冊、2000年。
- 52) 中井 公「大安寺 2 一 大官大寺から大安寺へ」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所、1995年。
- 53) 大脇 潔「大安寺 1」前掲註51)。中井 公「大安寺 2」前掲註52)。
- 54) 「専寺」は貴寺・当寺の意味。吉川真司の教示による。また、「路東十一」「路東十二」は、大和国の京南条里のうち、下ツ道の東に広がる路東条里の坪番付を示すが、条と里は省略されている。
- 55) 田村吉永は、これより1里東の路東二十八条四里十一坪・十二坪(字中坪、大安寺、ニシノフケ)に求めたが(田村吉永『飛鳥京藤原京考証』綜芸舎、1965年、12~21頁)、そこは文武朝大官大寺東方の丘陵西麓、田村が狂心渠に比定したフケ田に面した場所にあたり、寺地の東辺ではありえても西辺とはなりえない。それに対して、二十八条三里十一坪・十二坪は、まさに寺地西辺というにふさわしい。この場合、「岡本田」は正しく西山丘陵の南麓にあたる。また「橋本田」についても、付近に現在も橋が架かるように、飛鳥川にかけられた橋を想定して無理がない(小澤 毅「吉備池廃寺の発掘調査」前掲註4)。
- 56) ちなみに、『大安寺縁起』によれば、大安寺には斉明・天智・天武の歴代天皇が施入した百済大寺や高市大寺の仏像が伝わっていた。それらは、文武朝大官大寺の焼亡の時点で、隣接する高市大寺に安置されていたとすれば、無理なく説明できる。大脇 潔「大安寺 1」前掲註51)。大脇 潔『百済大寺』論争の行方をめぐって』『シンポジウム 吉備池廃寺をめぐる 一 百済大寺はどこか』帝塚山大学考古学研究所、1998年。中井 公「大安寺 2」前掲註52)。
- 57) 小澤 毅「藤原京の条坊と寺院占地」『古代』第110号、早稲田大学考古学会、2001年。

## 2 伽藍配置の復元

### A 伽藍の軸線と寺域

**基準方位の算出** 吉備池廃寺の調査成果に基づき、以下、伽藍配置の復元をおこないたい。まず、作業にあたって基準となる方位を算出しておこう。一連の遺構としてある程度長い距離を検出し、伽藍全体の基準方位を考えるうえで定点となるのは、南面回廊の南雨落溝と掘立柱僧房の柱痕跡である。それぞれの座標を1/20実測図で計測するとTab.8のようになり、その数値を用いて振れを算出すると、Tab.9の結果が得られる。

東で北に  
振れる

これから明らかなように、ほとんどが東で北に振れる方位を示すが、僧房SB340の北側柱列だけは東で南に振れる結果となった (Tab.9のJLとJK)。しかし、方眼方位に対するずれはわずか5~15cmであり、柱心の確定が困難な事例も存在することを考慮すれば、これを過大視する意味は乏しい。また、僧房SB340だけをとっても、計測部位により方位のばらつきがあることが判明している (Tab.9のJL~OP)。掘立柱建物ならではの造営時における施工誤差や、計測時の誤差を勘案すれば、大略の傾向を示すとみるにとどめるべきだろう。

一方、南面回廊南雨落溝も、直線的には施工されていない (PL.15・16, Fig.44)。事実、第95次調査区内だけでも、施工誤差もしくは施工後のひずみとみられる石列のうねりを観察できる。したがって、ここでも遺構の軸線については、大略の傾向しか知ることができない。ただ、一連の遺構として最も長大な距離を確認しているのは、この南面回廊南雨落溝であり、現状では、これ以上に方位の基準として適当な遺構はほかに存在しない<sup>1)</sup>。そこで、ひとまず南面回廊南雨落溝を検出した両端を結ぶ方位 (E 0° 53' 29" N, Tab.9のAD) を、吉備池廃寺の伽藍の振れと仮定することにしたい。

なお、このほかに、ひとつの遺構をある程度の距離にわたって検出し、方位の基準としうるものとしては、僧房SB400と僧房SB340の柱がある。それぞれの建物のなかで、より検出距離の長いSB400北側柱列 (E 1° 44' 32" N, Tab.9のFG) とSB340南側柱列 (E 0° 37' 14" N, Tab.9のOQ) を各建物の方位とし、これらを加えた三者の方位の単純平均を求めると、E 1° 05' 05" Nとなる。しかし、検出距離が短いものは、それだけ方位の信頼性に劣ると考えられることから、検出距離に応じた加重平均を算出するほうが有意義だろう。そこで、おのおのの方位に検出距離を乗じ、その和を検出距離の和で割って加重平均を算出すると、E 0° 55' 58" Nという数値を得ることができる。これは、先に伽藍の振れと仮定した南面回廊南雨落溝の方位 (E 0° 53' 29" N) にも近く、上記の想定<sup>1)</sup>の妥当性を示すものとみてよい。

伽藍の振れ

ちなみに、この南面回廊南雨落溝の振れは、100mで1.56mの振れに相当する (E 0° 55' 58" Nの場合は、同じく1.63m)。したがって、直線性を問題とする場合や、X座標、Y座標がともに大きく異なる場合には考慮する必要があるが、X座標とY座標のどちらかをほぼ等しくする2点間の距離の算出には、ほとんど影響を及ぼさない。

なお、南北距離 (X座標の差) で  $x$  m、東西距離 (Y座標の差) で  $y$  m離れた2点間の距離 (L) を、それぞれ上記の振れ ( $\alpha = 0^\circ 53' 29''$ ) を考慮した距離に換算する場合、南北距離は  $L =$

Tab. 8 検出遺構の位置(1)

点	遺 構	X座標	Y座標	調 査 区
A	南面回廊SC160 南雨落溝南側石	-166,276.50	-15,018.30	第89次調査東南トレンチ
B	南面回廊SC160 南雨落溝南側石	-166,276.55	-15,009.30	第95次調査南区
C	南面回廊SC160 南雨落溝南側石	-166,276.40	-14,994.00	第95次調査南区
D	南面回廊SC160 南雨落溝南側石	-166,275.75	-14,970.10	第111次調査南区
E	僧房SB260 北側柱列東から2基め	-166,117.45	-14,994.20	第105次調査中央区
F	僧房SB400 北側柱列東から6基め	-166,117.40	-14,941.65	桜井市第9次調査区
G	僧房SB400 北側柱列東北隅柱	-166,117.00	-14,928.50	桜井市第9次調査区
H	僧房SB260 南側柱列東から2基め	-166,123.30	-14,994.10	第105次調査中央区
I	僧房SB400 南側柱列東から4基め	-166,122.60	-14,936.40	桜井市第9次調査区
J	僧房SB340 北側柱列西北隅柱	-166,136.05	-14,952.10	第111次調査北区
K	僧房SB340 北側柱列西から6基め	-166,136.10	-14,939.45	第111次調査北区
L	僧房SB340 北側柱列東から3基め	-166,136.20	-14,929.35	第111次調査北区
M	僧房SB340 西妻柱	-166,138.60	-14,952.15	第111次調査北区
N	僧房SB340 東妻柱	-166,138.45	-14,924.25	第111次調査北区
O	僧房SB340 南側柱列西南隅柱	-166,141.45	-14,952.05	第111次調査北区
P	僧房SB340 南側柱列西から5基め	-166,141.20	-14,941.70	第111次調査北区
Q	僧房SB340 南側柱列東南隅柱	-166,141.15	-14,924.35	第111次調査北区

Tab. 9 遺構の方位の振れ 東で北に振れる。(マイナス)はその逆。

区間	遺 構	X座標の差	Y座標の差	方位の振れ
AD	南面回廊SC160南雨落溝	0.75	48.20	0° 53' 29"
BD	南面回廊SC160南雨落溝	0.80	39.20	1° 10' 09"
AC	南面回廊SC160南雨落溝	0.10	24.30	0° 14' 09"
CD	南面回廊SC160南雨落溝	0.65	23.90	1° 33' 28"
BC	南面回廊SC160南雨落溝	0.15	15.30	0° 33' 42"
EG	僧房SB260とSB400の北側柱列	0.45	65.70	0° 23' 33"
EF	僧房SB260とSB400の北側柱列	0.05	52.55	0° 03' 43"
FG	僧房SB400北側柱列	0.40	13.15	1° 44' 32"
HI	僧房SB260とSB400の南側柱列	0.70	57.70	0° 41' 42"
JL	僧房SB340北側柱列	-0.15	22.75	-0° 22' 40"
JK	僧房SB340北側柱列	-0.05	12.65	-0° 13' 35"
MN	僧房SB340妻柱	0.15	27.90	0° 18' 29"
OQ	僧房SB340南側柱列	0.30	27.70	0° 37' 14"
OP	僧房SB340南側柱列	0.25	10.35	1° 23' 01"
AD・FG・OQの平均(単純平均)				1° 05' 05"
AD・FG・OQの平均(検出距離に応じた加重平均)				0° 55' 58"

$x \cos \alpha \pm y \sin \alpha$ 、東西距離は $L = y \cos \alpha \pm x \sin \alpha$ として算出されることになる。<sup>2)</sup>

**寺域の復元** 吉備池廃寺の寺域は、周囲の遮蔽施設や区画溝を検出していないため、遺構からは明確に知ることができない。ただ、回廊で囲まれる伽藍中心部の北方および南方に位置する桜井市第9次・第12次調査区の当該時期の遺構を含むことは確実であろう。とすれば、現在確認できる南限の遺構は東西溝SD442、北限の遺構は南北溝SD422であるので、寺域の南北は260m以上におよぶことになる。同様に、東西については、遺構から確認できる東限が、第105次調査東区南トレンチの東面回廊西雨落溝の石組抜取溝SD305、西限は第95次調査西区で検出した西面回廊外にのびる斜行溝SD215であるから、180m以上となる。よって、寺域が南北260m以上×東西180m以上におよぶことは確実である。

寺域は260  
×180m以上

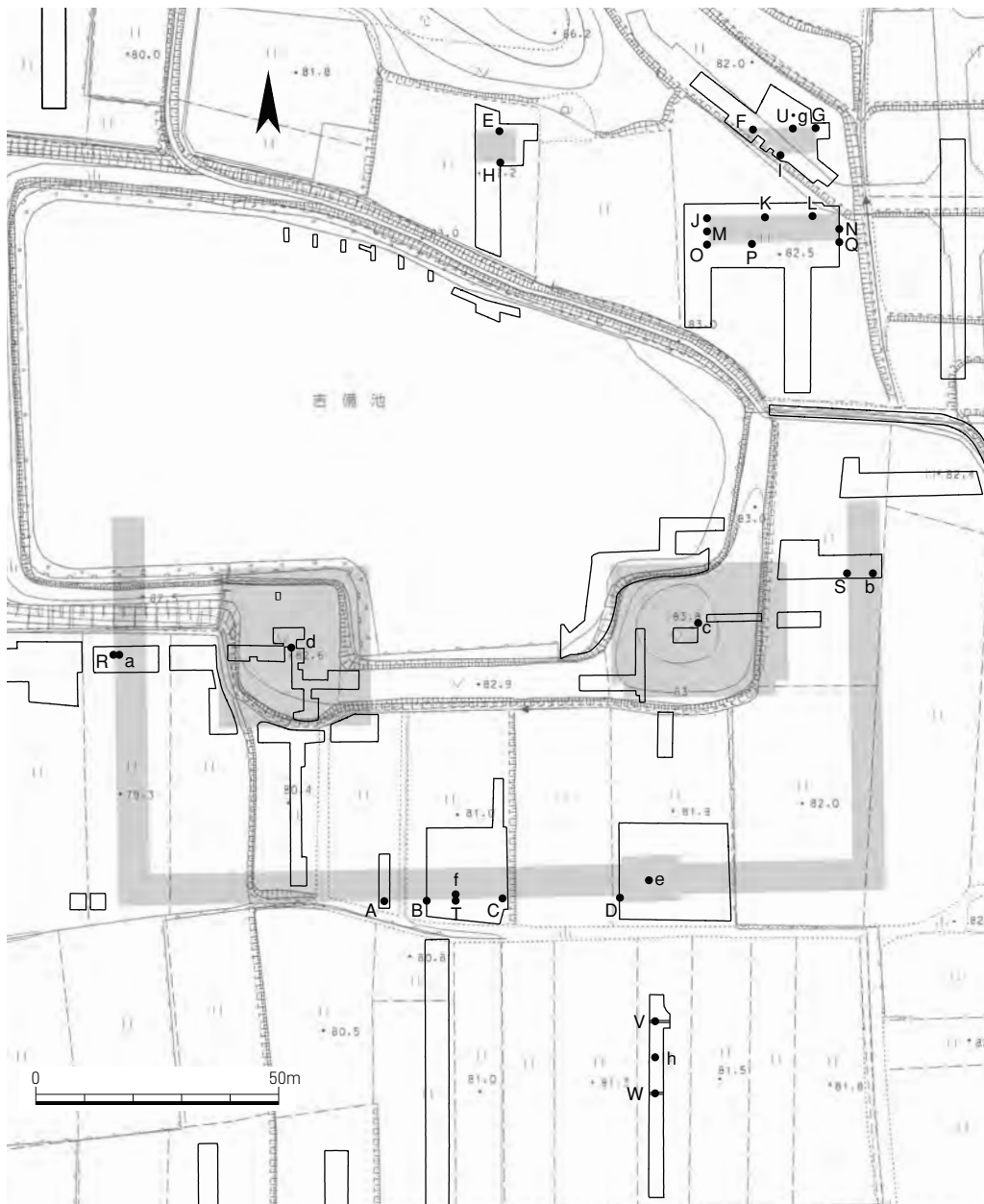


Fig. 104 検出遺構および堂塔の定点 1:1500



## B 伽藍中心部の復元

飛鳥時代の寺院の伽藍配置に関しては、これまでの研究により、位置の基準が回廊の外側柱筋におかれたことが指摘されている<sup>3)</sup>。本書でも、その可能性を想定して検討を加えることにしよう。したがって、基準線を定めるためには、まず回廊の復元をおこなう必要があるが、この点は次節で詳述することとし、ここではその成果から、回廊の梁行寸法を3.3m（11尺）、雨落溝の出を1.5m（5尺）として考察を進めたい。

伽藍中心部の復元をおこなううえで定点となる遺構の座標は、Tab. 10のとおりである。また、それらをはじめとする遺構から中心堂塔の座標を推定すると、Tab. 11のようになる。

**回廊の東西規模** 西面回廊西雨落溝心（Tab. 10のR）と東面回廊西雨落溝心（Tab. 10のS）の距離は、前記の振れを考慮して換算すると、152.9mとなる。これは、回廊棟通り間の距離（回廊心々間距離）に等しい。上述のごとく、回廊の梁行寸法を3.3m、雨落溝心々間距離を6.3mとすれば、回廊外側柱筋間の距離は156.2mと算出される（Tab. 12の④）。

東西回廊間  
は156.2m

一方、飛鳥寺（明日香村飛鳥）や法隆寺西院伽藍（生駒郡斑鳩町）では、伽藍配置に高麗尺（大宝<sup>4)</sup>令大尺。以下、大尺と記す）を使用したことが指摘されている<sup>5)</sup>。東西回廊外側柱筋間156.2mは440大尺に相当し、その場合、1大尺の長さは0.355mとなる。これは上記の飛鳥時代寺院や藤原京などの都城の造営尺にくらべても妥当な値で、以下、この数値を吉備池廃寺の堂塔間距離の算出に用いることにする。また、次節で述べるように、建物造営に使用した基準尺は1尺＝

Tab. 10 検出遺構の位置（2）

点	遺 構	X座標	Y座標	調 査 区
R	西面回廊SC200 西雨落溝SD201心	-166,226.0	-15,074.6	第95次調査西区
S	東面回廊SC300 西雨落溝SD305心	-166,209.0	-14,921.9	第105次調査東区
T	南面回廊SC160 南雨落溝SD161心	-166,276.1	-15,003.0	第95次調査南区
U	僧房SB400 北側柱列東から3基め柱心	-166,117.2	-14,933.8	桜井市第9次調査区
V	南外周部 東西石組溝SD441心	-166,301.8	-14,962.0	桜井市第12次調査区
W	南外周部 東西石組溝SD442心	-166,317.0	-14,962.6	桜井市第12次調査区

Tab. 11 堂塔の推定座標

点	遺 構	X座標	Y座標	調査区	備 考
a	西面回廊SC200外側柱筋	-166,226.0	-15,073.1	第95次西区	Rの1.5m東
b	東面回廊SC300外側柱筋	-166,209.0	-14,917.1	第105次東区	Sの4.8m東
c	金堂SB100心	-166,220.3	-14,953.4	第81-14次	基壇規模37×25m
d	塔SB150心	-166,224.0	-15,037.4	第89次	第三章2参照
e	中門SB320心	-166,272.2	-14,963.4	第111次	基壇規模12.0×9.8m
f	南面回廊SC160外側柱筋	-166,274.6	-15,003.0	第95次南区	Tの1.5m北
g	僧房SB400北側柱列	-166,117.2	-14,933.8	桜井市第9次	Uに同じ
h	東西溝SD441とSD442の midpoint	-166,309.4	-14,962.3	桜井市第12次	VとWの midpoint

0.300mほどとみられ、さらに7世紀中葉に造営された前期難波宮（大阪市）では、造営尺が1尺=0.292mと推定されていることから、それらの妥当性についてもあわせて検討した。

**堂塔間の距離** Tab.11に基づき、前項の計算式にしたがって各堂塔間の距離を算出したのが、Tab.12である。これから明らかなように、伽藍配置の基準となったのはやはり回廊外側柱筋大尺で計画であって、しかも大尺で計画されているとみて間違いない<sup>6)</sup>。

金堂心-東面回廊外側柱筋間が102.7大尺と、100大尺よりやや大きくなる（Tab.12の②）のは、金堂西面の掘込地業外にのびる水平版築層を基壇土と認めたためかもしれない。しかし、北面についても同様に解釈しているにもかかわらず、金堂心-南面回廊外側柱筋間は150.7大尺と、150大尺に近い完好な数値を示す。「第三章2 遺構各説」で詳述したように、金堂基壇の規模は確定しがたいので、計画値としては金堂-東面回廊間を100大尺とみてよいだろう。

また、塔心-西面回廊間外側柱筋間は100.6大尺と、100大尺に近い（Tab.12の③）。調査時点

Tab.12 堂塔間の距離

番号	区 間	備考	実長	令大尺	唐大尺A	唐大尺B
			単位m	1尺=0.355m	1尺=0.300m	1尺=0.292m
	東西回廊の西雨落溝間	R S	152.9	430.7	509.8	523.8
①	東西回廊外側柱筋間	a b	156.2	440.0	520.8	535.1
②	金堂心-東面回廊外側柱筋	b c	36.5	102.7	121.6	124.9
③	塔心-西面回廊外側柱筋	a d	35.7	100.6	119.1	122.3
④	金堂心-南面回廊外側柱筋	c f	53.5	150.7	178.4	183.3
⑤	塔心-南面回廊外側柱筋	d f	51.1	144.0	170.4	175.1
⑥	中門心-東面回廊外側柱筋	b e	47.3	133.1	157.6	161.9
⑦	南面回廊外側柱筋-僧房SB400北側柱列	f g	156.3	440.2	521.0	535.3
⑧	南面回廊外側柱筋-SD441・442の midpoint	f h	35.4	99.8	118.1	121.3
⑨	金堂心-中門心の東西距離	c e	10.8	30.4	36.0	37.0
⑩	僧房SB400北側柱列-僧房SB340南側柱列		24.3	68.4	81.0	83.2
⑪	僧房SB400北側柱列-僧房SB340棟通り		21.6	60.8	72.0	74.0
⑫	僧房SB400北側柱列-僧房SB340北側柱列		18.9	53.2	63.0	64.7
⑬	僧房SB400南側柱列-僧房SB340北側柱列		13.5	38.0	45.0	46.2
①'	東西回廊内側柱筋間	R S-3.3m	149.6	421.4	498.8	512.5
②'	金堂心-東面回廊内側柱筋	b c-3.3m	33.2	93.4	110.6	113.6
③'	塔心-西面回廊内側柱筋	a d-3.3m	32.4	91.3	108.1	111.0
④'	金堂心-南面回廊内側柱筋	c f-3.3m	50.2	141.4	167.4	172.0
⑤'	塔心-南面回廊内側柱筋	d f-3.3m	47.8	134.7	159.4	163.8
⑥'	中門心-東面回廊内側柱筋	b e-3.3m	44.0	123.9	146.6	150.6
⑦'	南面回廊内側柱筋-僧房SB400北側柱列	f g-3.3m	153.0	430.9	510.0	524.0
⑧'	南面回廊内側柱筋-SD441・442の midpoint	f h+3.3m	38.7	109.1	129.1	132.6
①''	東西回廊棟通り間	R S	152.9	430.7	509.8	523.8
②''	金堂心-東面回廊棟通り	b c-1.65m	34.8	98.1	116.1	119.2
③''	塔心-西面回廊棟通り	a d-1.65m	34.1	95.9	113.6	116.7
④''	金堂心-南面回廊棟通り	c f-1.65m	51.9	146.1	172.9	177.6
⑤''	塔心-南面回廊棟通り	d f-1.65m	49.5	139.3	164.9	169.4
⑥''	中門心-東面回廊棟通り	b e-1.65m	45.6	128.5	152.1	156.3
⑦''	南面回廊棟通り-僧房SB400北側柱列	f g-1.65m	154.7	435.5	515.5	529.6
⑧''	南面回廊棟通り-SD441・442の midpoint	f h+1.65m	37.1	104.4	123.6	127.0

では、西面回廊雨落溝の石組抜取溝SD201を東雨落溝にともなう遺構と解釈したが（『年報1999-II』）、遺構の検討に加え、伽藍配置のうえからも西雨落溝の蓋然性が高いと言えよう。

以上のように、吉備池廃寺の伽藍配置計画は、東西の回廊外側柱筋間を440大尺とし、東西それぞれの回廊外側柱筋からいずれも100大尺の位置に金堂心と塔心をおくものであったと復元される。したがって、金堂-塔間は心々間距離で240大尺となる。さらに、南面回廊外側柱筋-金堂心間は150大尺（実長150.7大尺、Tab. 12の④）、南面回廊外側柱筋-僧房SB400北側柱列間は東西回廊間と同じく440大尺（実長440.2大尺、Tab. 12の⑦）、南面回廊外側柱筋-南方の東西溝SD441・442の midpoint間が100大尺となる（実長99.8大尺、Tab. 12の⑧）（Fig. 105）。

金堂心と  
塔心の位置

**塔の南北位置** ここで問題となるのが、塔の南北位置と中門の東西位置である。まず、塔の南北位置について検討してみよう。塔-南面回廊間は144.0大尺と10大尺単位の完数にならないが、塔心が、金堂心と同様に南面回廊から150大尺北の位置におかれたとすると、現在の想定心より約2.1m北方に塔心を求めなければならない。この場合、確認している心礎抜取穴のかなり北寄りに塔心が位置することになり、塔の土壇南辺に残る版築土を基壇内と考える必要があることから、基壇規模は35m以上となる。しかし、第三章2で検討したように、心礎抜取穴の規模から、塔心の位置が大きく動くとは考えがたいので、この想定は成り立ちにくい。

次に、金堂基壇北辺と塔基壇北辺をそろえている可能性を検討したい。金堂北辺の座標を  $X=-166,207.8$ 、 $Y=-14,953.4$  とし、振れを考慮して西へ延伸すると、塔の位置における座標は、 $X=-166,209.1$ 、 $Y=-15,037.4$  となる。これと推定塔心（Tab. 11のd）との距離は14.9mとなり、塔基壇の一辺は29.8mと算出される。けれども、その場合、塔土壇南辺で確認した版築土が基壇外となってしまう、不適切である。

なお、遺構自体からは、塔基壇の一辺は32m程度と想定され（50頁）、この場合、塔基壇の北辺は、金堂の北辺よりも1.1m北に位置することになる。いずれにしても、現状では、塔心の位置や基壇規模を確定できるだけの資料がなく、加えて金堂の基壇規模も明確ではないため、塔の厳密な南北位置については不明とせざるをえない。ただ、遺構の状況からみて、配置計画としては、金堂基壇と塔基壇の北辺をあわせる意図があったと推測しておきたい。

金堂と北辺  
を合わせる

ちなみに、金堂南辺の張り出し部を基壇に含めてその中心を金堂心とした場合には、金堂と塔の中心をあわせている可能性があるが、この場合、金堂心が南方に寄り、金堂-南面回廊間の150大尺という数値との整合性は失われる。建物心が通常、棟位置を基準とし、南辺の張り出し部を基壇内に含めると、孫廂や向拝ではない本格的な建物の上部構造を考えなくてはならなくなる点とあわせて、成立しがたいだろう。

**中門の位置** 中門の心は、東面回廊外側柱筋から133.1大尺の位置にある（Tab. 12の⑥）。したがって、金堂や塔のように、東西の回廊から10大尺単位の完数値で配置する計画とは異なっていたとみられる。しかし、中門心は金堂の南北中軸線より10.8m西方に寄っており、金堂と西辺を合わせているわけでもない。金堂や東面回廊との関係だけからは、中門をこの位置におく明快な理由を見出すことは困難である。

ただし、中門心-東面回廊内側柱筋間の44.0m（Tab. 12の⑥'）という数値に着目すると、この距離は、東西回廊内側柱筋間の距離149.6mの  $2/7 = 42.7\text{m}$  に近似することに気づく。すなわち、東西の回廊と重なる隅部分を除いた南面回廊を5:2に内分する位置に近いのである。

そこで、検出した中門の位置を、伽藍全体の南北中軸線で西に折り返すと、わずかに第89次調査の東南トレンチにかかるものの、土壇南トレンチと東南トレンチにはさまれた未調査区に、そのほとんどが納まってしまふことが判明する。したがって、施工上の誤差などを考慮すれば、塔の南方のやや東に偏した位置にも、ほぼ同規模の中門が存在した可能性は十分に想定できるだろう。すなわち、南面回廊を2:3:2に分ける位置に、金堂と塔それぞれに対応して二つの中門が建つ、という異例の伽藍配置が復元されるのである。

この場合、位置の基準を回廊の外側柱筋ではなく、内側柱筋におく点に若干疑問があるが、今のところ、これ以外に、中門が金堂心から西へずれる理由を合理的に解釈できる案は見出せない。また、そうした位置に中門をおいた理由も不明だが、後述するように、金堂と塔の間

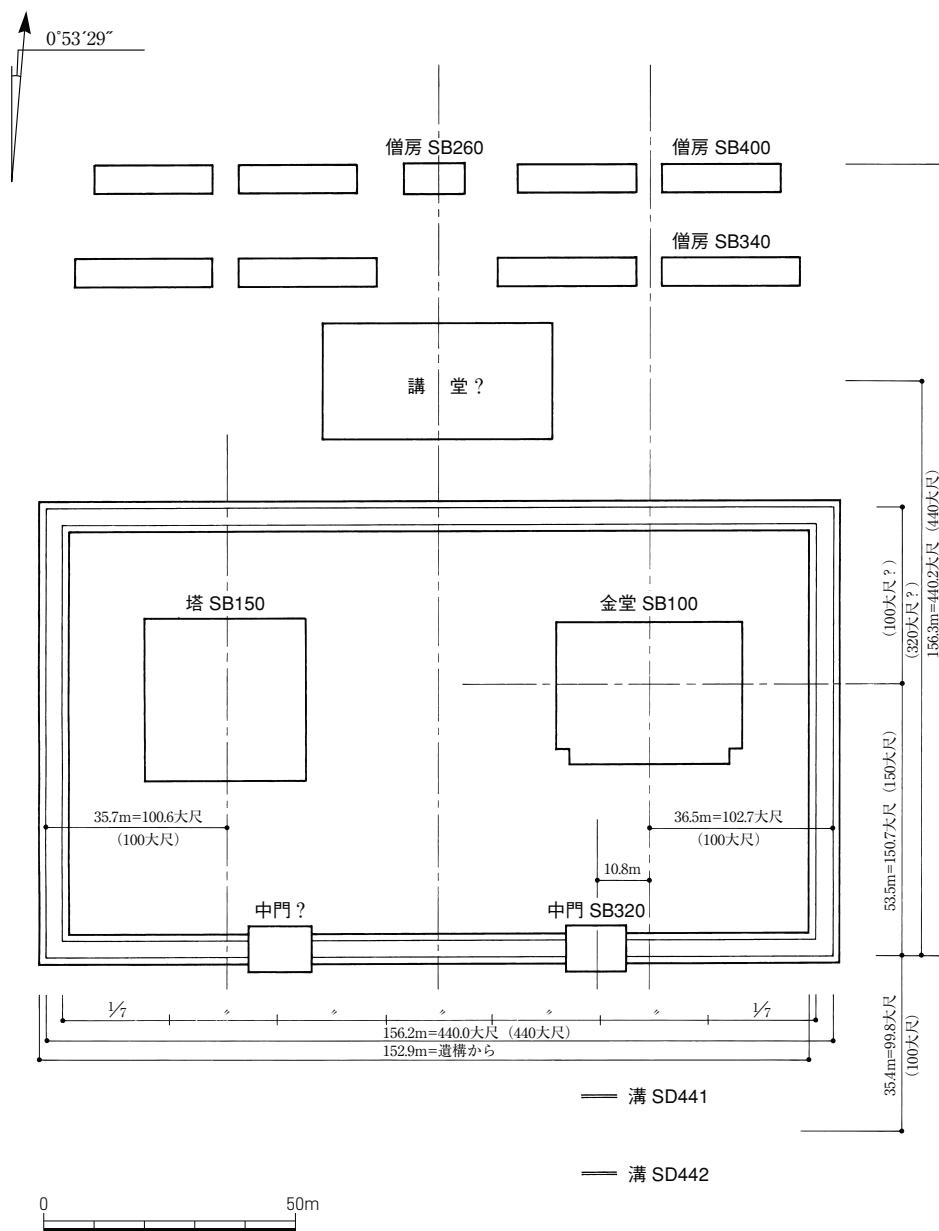


Fig. 105 伽藍配置復元図 (括弧内は復元値) 1:1500

隔がひじょうに離れていることや、南門との位置関係によるのだろうか。

**僧房の配置** 上述のごとく、南面回廊から僧房SB400までの距離は、東西回廊間と同じく440大尺と復元され、僧房についても高い計画性のもとに配置されていることが明らかとなった。

僧房SB400とその南にある僧房SB340との関係は、配置の基準になったとみられるSB400北側柱列からSB340棟通りまでが60.8大尺であることから (Tab. 12の⑩)、60大尺として計画された可能性があるけれども、判然としない。次節で述べる、建物の造営尺である唐大尺 (大宝令小尺、1尺≒0.300m) が、僧房一郭の配置にも適用されていると想定できなくもないが、SB400とSB340の柱間寸法や全長が合わないなど、不審な点が残る。むしろ、SB400南側柱列とSB340北側柱列間を38大尺としたとみたほうがよいかもしれない。なお、SB400と僧房SB260との関係は、SB260がわずかに北に寄る感はあるものの、おおむね配置の基準となる北側柱筋を合わせていると解釈するのが自然だろう。

一方、金堂中軸線を、振れを考慮して北方へ延伸すると、僧房SB340西妻柱位置 (Tab. 8のM) の約2.5m西を通る。SB400とSB340は西妻の位置をほぼあわせているとみられることから (65頁)、SB400の西にも同様に金堂中軸線が通ることになる。したがって、この2棟の僧房は金堂中軸線と密接な関係にあり、金堂中軸線をはさんで西側に折り返した未調査区にも、同様の僧房が存在した可能性が想定される。

金堂中軸と  
密接な関係

さらに、回廊の南北中軸線つまり伽藍全体の中軸線<sup>7)</sup>を北方にのばすと、僧房SB260の東から2基めの柱位置 (Tab. 8のEもしくはH) の西2.3~2.4mの位置を通る。これからSB260の桁行柱間を特定することはできないけれども、SB260の位置がおおむね伽藍中軸線に合致していることは疑いなく、ここにも中軸線と僧房との有機的な関係をうかがうことができる。

また、塔の北方にあたる第105次調査中央区と西区の間の地域は発掘調査がおよんでいないが、この地域にも、塔の中軸線に合わせるかたちで僧房が展開していたとみるのも、あながち無理な想定とは思われぬ。すなわち、地盤のよい小丘陵南側の平坦面に、多数の僧房が展開していた状況を復元しうるのである。

多数の僧房  
を想定

## C 伽藍配置の特質

**伽藍の規模** 前節および後述の各節での検討から、吉備池廃寺が舒明11年 (639) 創建の百濟大寺にあたることは確実である。次節で詳述するように、この金堂と塔は同時代の遺構に比べて格段に大きく、それにともない、回廊に囲まれた中心伽藍もきわめて大規模であったことがわかる (Fig. 106)。

吉備池廃寺の回廊東西規模は、575~645年にかけて造営された新羅皇龍寺 (慶尚北道慶州市) 第2次伽藍の東西回廊棟通り間の距離555.39尺=168.3m<sup>8)</sup>より若干小さい程度であり、当時の中国における仏教寺院については明確でないものの、東アジアでも突出した伽藍規模をもつ寺院の一つだったと推定される。南北規模に関しては不明だが、金堂-南面回廊間よりも金堂-北面回廊間が大きいとは考えにくく、東西に細長い形態をとることは間違いなからう。

突出した  
伽藍規模

**「法隆寺式伽藍配置」** 金堂を回廊内の東に南面させ、その西に塔を並立させる形態は、一般に、法隆寺西院伽藍を代表例とする「法隆寺式伽藍配置」と呼ばれている。法隆寺式もしくはその金堂と塔の位置を逆転させた「法起寺式伽藍配置」の古例は、650年代頃の法輪寺 (生駒郡斑鳩

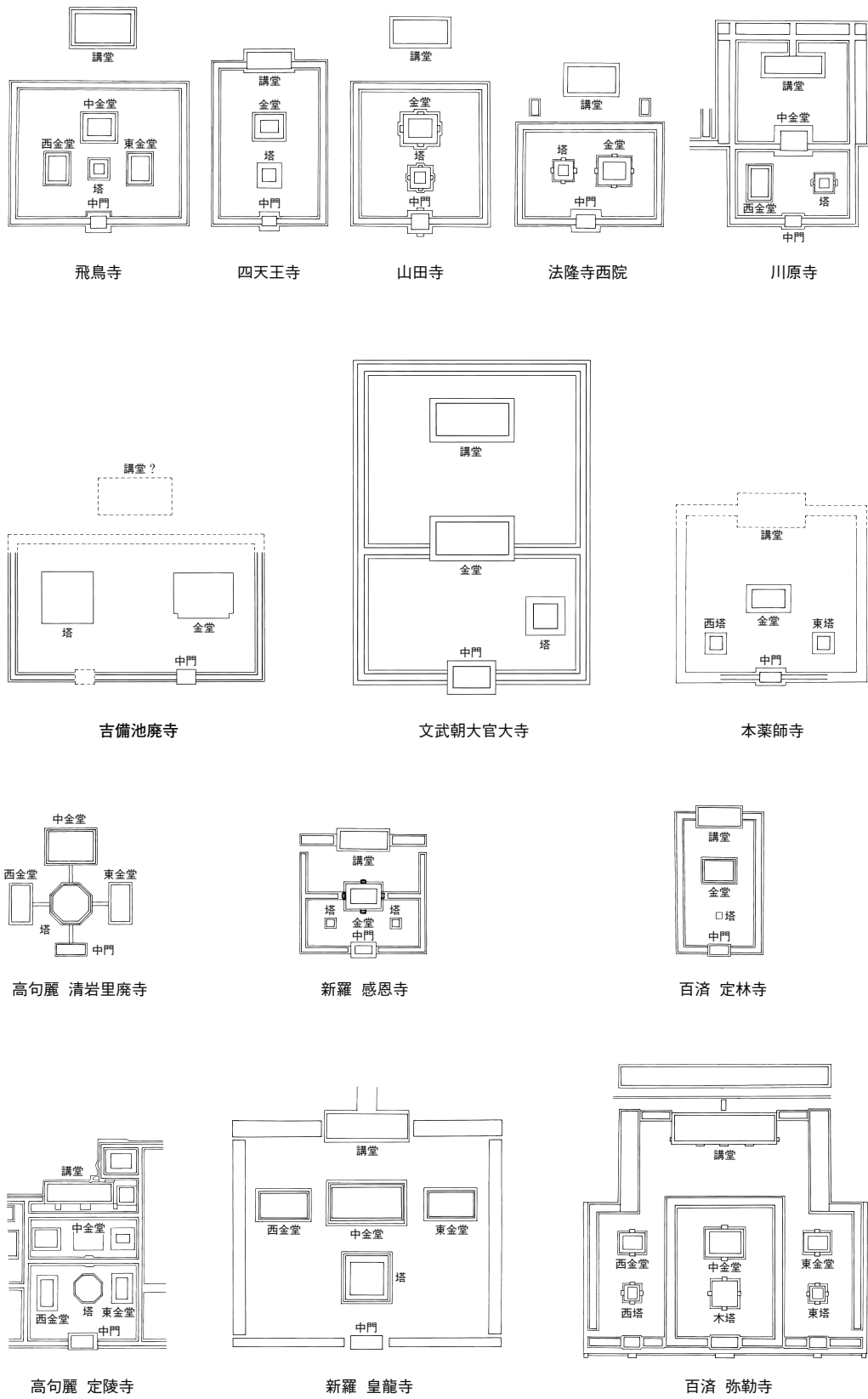


Fig. 106 日本および朝鮮半島の伽藍配置の比較 1:4000

町)や安倍寺(桜井市阿部)、海会寺(大阪府泉南市)などにみることができるが、吉備池廃寺(=百済大寺)は、それらより年代的に先行すると考えられる。もっとも、吉備池廃寺の場合は、北面回廊の状況が不明なうえ、中門の位置が伽藍全体の中軸線上にないため、典型的なタイプとは言えないけれども、金堂と塔を横に並置した、いわゆる法隆寺式伽藍配置としては最古の寺院となる。

「法隆寺式」  
の最古の例

百済大寺の創建にあたって、このような伽藍配置が採用された理由は定かではない。法隆寺式もしくは法起寺式の伽藍配置は、朝鮮半島(韓半島)や中国にその例が見られないことから日本独自のものとされ、金堂と塔を同時に礼拝できる特徴が指摘されてきた。そして、7世紀後半の地方寺院にしばしばそれが見出されるのは、山麓や山腹に立地することが多い地方寺院に縦長の四天王寺式は適さず、横置き<sup>10)</sup>の法隆寺式が好まれたためと解されている。

ところで、法隆寺式や法起寺式にもっとも特徴的なのは、金堂や塔を並置することによって、それぞれが独自の前庭部(南庭)をもつことである。これは、伽藍の造営が継続している段階において、きわめて有効に機能した要素であったと考えられる。すなわち、古代寺院は、造営に長い年月を要したものが多く、確認できる事例については、まず金堂の建立が先行するケースが多いことが明らかになっている。そのさいに、金堂と塔を並置する伽藍配置であれば、金堂の完成後、ただちに金堂を中心とした寺院活動を開始することが可能となる。塔やそのほかの堂宇の建立は、これと並行するかたちで、しかも金堂南庭における法会の妨げを最小限にして進めることができるからである。また、塔の建立が金堂に先行したとしても、塔を中心とする法会と他の堂宇の建立を並行しうる状況に変わりはない。

したがって、建立が比較的急がれた場合や、すでに僧侶が寺院活動を開始しており、伽藍の完成を待つばかりの場合などに、金堂と塔を横に並べる配置を採用した可能性を想定できるのではなかろうか。もちろん、こうした配置は、中央の官寺としては、金堂の中心性が確立していくまでの過渡的な形態であったことも事実だが、それが地方寺院に普及していくのは、天皇(大王)家の寺院として創設された百済大寺(=吉備池廃寺)が採用した配置であったという理由に加えて、このような実用性が考慮されたことも一因であったと推定する。

実用性への  
配 慮

もっとも、いわゆる法隆寺式伽藍配置の嚆矢となった百済大寺がこの配置をとるにいたった理由が、上記のようなものであったという確証はない。だが、舒明朝には、大陸に派遣されていた留学生や僧侶の帰国があいついでおり、これが百済大寺の創建に深くかかわっていたとすれば、彼らの止住寺院としても、伽藍の建造は急がれたであろう<sup>11)</sup>。比較的多数存在したと想定される吉備池廃寺の僧房はそれを示すものかもしれない。

**金堂と塔の間隔** 吉備池廃寺の伽藍配置を法隆寺西院伽藍(以下、法隆寺と略す)と比較すると、金堂から塔までの距離がひじょうに広いことがわかる。法隆寺では、吉備池廃寺と同じく、金堂心と塔心を東西回廊の外側柱筋から等距離にとっているが、金堂と塔の心々間距離も、それとほぼ同じ87大尺とする。すなわち、東西回廊外側柱筋間をほぼ3等分する点に、金堂と塔を配置している<sup>12)</sup>のである。一方、吉備池廃寺では、金堂と塔の心々間距離は84.0mで、240大尺とみてよいが、この距離は、回廊東西規模(440大尺)の約55%にあたる。ここから金堂と塔の基壇分を差し引いた、構築物のない空間は東西49.5mとなり、それが東西回廊基壇間の内法(144.2m)のほぼ1/3に相当する。つまり、金堂と塔のあいだの空間が占める割合やその実長

金堂と塔の間は広大

は、法隆寺にくらべて格段に大きい。

こうした特徴が何に由来するのかは明確でない。伊東忠太は、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』の百済大寺に関する記事「失火烧破九重塔並金堂石鷗尾」を、九重塔が焼け落ちるとき、その九輪が金堂の上に倒れかかり、金堂の鷗尾を破壊したと解釈して、塔の高さから金堂と塔の距離を推測することが可能と考えた。<sup>13)</sup> 前節で述べたように、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』の当該記事の信憑性は疑わしく、伊東の解釈自体にも問題があるが、塔の高さと金堂と塔の心々間距離の関係については検討する必要があるだろう。

塔の高さとの関係

法隆寺の金堂と塔の心々間距離は<sup>14)</sup>31.5m、

基壇上からの五重塔の高さは<sup>15)</sup>32.6m (107.44尺)である。五重塔が後代の修理による改変を受けていることを勘案すると、両者はごく近似した数値を示すことになる。<sup>16)</sup> こうした状況は、正確な数値は不明ながら、法輪寺や法起寺(生駒郡斑鳩町)でも同様であるらしい。<sup>17)</sup> また、平城京薬師寺(奈良市)では、東塔心から金堂の南北中軸線(伽藍全体の中軸線)までの距離が塔の高さと近似した値を示す。<sup>18)</sup> 以上、なお検討の余地はあるが、塔の高さが何らかのかたちで平面に現れている可能性は否定できない。

次節で検討するように、吉備池廃寺の塔基壇は、新羅皇龍寺の木塔(九重塔)とほぼ同規模と考えられる。皇龍寺木塔の高さは、『三国遺事』が引く「刹柱記」によれば225尺であり、金東賢はこれを「東魏尺」(=高麗尺)とみて、皇龍寺伽藍の平面、立面の造営計画を考察している。<sup>19)</sup> この値(曲尺の264.6尺=80.2m)は吉備池廃寺の金堂と塔の心々間距離にも比較的近く、金堂と塔の間隔が大きいのは、九重塔の高さを反映しているため、と解釈することが可能かもしれない。<sup>20)</sup> とすれば、百済大寺における九重塔の存在は、塔基壇の規模だけではなく、金堂と塔の間隔の点からも想定できることになる。<sup>22)</sup>

**伽藍配置の特徴** 上記の分析も含めて、吉備池廃寺の伽藍配置の特徴をまとめると、次のようになるだろう。

まず、堂塔の配置計画には大尺を使用し、原則として回廊外側柱筋を基準とした10尺単位の完数とする。回廊で囲まれた伽藍中心部は東西に細長く、日本における同時代の寺院をはるかにしのぐ規模を有しており、新羅皇龍寺に匹敵する。また、回廊内の金堂と塔の間隔もひじょうに広いが、これは塔の高さに由来する可能性がある。伽藍配置は、南面する金堂を東に、塔を西においた、いわゆる法隆寺式の伽藍配置であり、創建年代からみて、国内では最古の例となる。ただし、中門は伽藍全体の中軸線上になく、金堂南方のやや西に寄った特異な位置にある。この位置は、東西の回廊内側柱間を5:2に内分する点に近く、伽藍全体の中軸線で折り返した塔の南方やや東寄りの位置にも、もう一つの中門をおく配置を想定することができる。つ

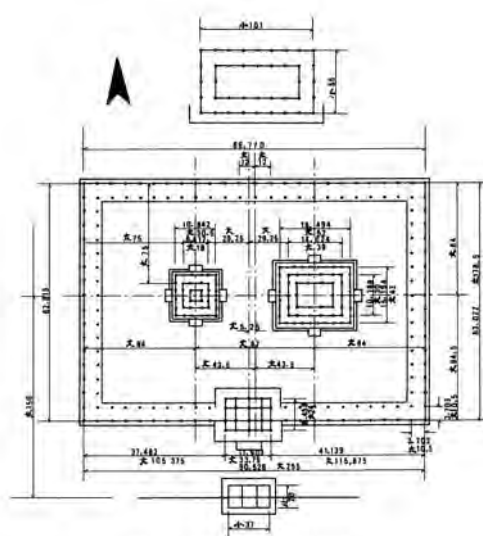


Fig. 107 法隆寺西院の伽藍配置計画 1:2000  
(註3)岡田英男論文より転載)



まり、南面回廊を2:3:2に分ける位置に、金堂と塔それぞれに対応して二つの中門が建つ伽藍配置が復元される。さらに、僧房の配置も伽藍中心部と密接な関係にあり、多数の僧房が建ちならんでいた可能性がある。

#### D 残された課題

以上、吉備池廃寺の伽藍配置を復元し、その特質について述べてきた。以下、伽藍配置をめぐる残された課題を挙げておくことにしたい。

**北面回廊の位置** 北面回廊と講堂に関しては、発掘調査による直接的な資料がまったくない。まず、北面回廊について検討しよう。

比較資料として法隆寺 (Fig. 107) をみると、そこでは、金堂心と塔心の中点を通る南北線を伽藍全体の中軸線とし、金堂心と塔心を結ぶ東西線から、北側の北面回廊外側柱筋までを84大尺とする。一方、南側は、南面回廊の外側柱筋ではなく、内側柱筋までを84大尺にとる。すなわち、回廊の梁行分だけ南面のほうを広くしている。また、東面回廊外側柱筋から金堂心、西面回廊外側柱筋から塔心までの距離も84大尺である。したがって、法隆寺では、南面をやや広くする以外は、建物心と各面の回廊外側柱筋までの距離を統一しているといえよう。

吉備池廃寺では、東面回廊外側柱筋—金堂心、西面回廊外側柱筋—塔心の距離がともに100大尺であるのに対し、南面回廊外側柱筋—金堂心を150大尺としており、やはり南面を広くとっていることは間違いない。したがって、法隆寺に倣えば、北面回廊外側柱筋の位置は、金堂心から100大尺北に想定することが可能である。<sup>23)</sup> この場合、北面回廊の大半は既調査区からはずれた吉備池内に含まれるが、回廊の東北隅は、第105次調査東区北トレンチ付近となり、中世の東西溝SD307が、ほぼ北面回廊内側の雨落溝の位置に相当することになる。

金堂・塔の南面が広い

**講堂の位置** 次に、講堂の位置と北面回廊との接続のしかたが問題となる。その前に、そもそも講堂は存在したのか、という疑問もあるだろう。この点に関して、遺構のうえからは講堂の存在を示す積極的な証拠はないが、一般に、寺院遺跡における講堂や回廊は、金堂や塔に比べて基壇が低いと、遺構として残りにくいことが知られている。

また、吉備池廃寺の場合、講堂が想定される伽藍全体の中軸線後方は、「第三章 1 遺跡の立地と地形」で述べたように、旧地形が最も低い谷地形の底部、もしくは北側の小丘陵から谷へ向かって落ちる斜面部分にあたる。そこでは、第105次池内調査区で、吉備池廃寺創建時の大規模な整地を確認しており、講堂もしくはそれに類する堂宇の存在をうかがわせる。一方、小丘陵上の高燥な立地を示す第111次調査北区の南方では、素掘小溝さえ検出されず、近世以降に大きく削平を受けている可能性が高い。

第105次調査中央区や第111次調査北区で確認した僧房は、掘立柱建物であることから、瓦葺建物とは考えがたい。しかし、それにもかかわらず、この周辺からは比較的多量の瓦が出土している。これらは、近辺に瓦葺建物が存在したことを示すものにほかならないだろう。講堂もしくは食堂のような施設を想定するのが妥当である。さらに、僧房が数的にも比較的多量に存在したとすれば、僧侶の数も多く、伽藍自体の完成度も高かったものと思われる。前節でも考察したように、史料のうえからも百濟大寺の造営は比較的順調に進展したとみられる点とあわせて、講堂が存在したことは確実と考える。<sup>24)</sup>

講堂は存在

講堂と北面回廊との関係については、講堂に回廊が接続する形態、もしくは回廊外に講堂をおく形態の二案が想定できる。前者の例には四天王寺と橋寺<sup>25)</sup>(明日香村橋)がある。いずれも講堂は金堂や塔などに遅れて7世紀後半～8世紀の建立とされるが、7世紀前半の寺院創建当初から、配置計画自体は存在したと考えられる。また、四天王寺式伽藍配置の源流とみられる百済の寺院にも、回廊が講堂に接続する定林寺(忠清南道扶余郡)のような例がある。吉備池廃寺の場合、伽藍配置を異にしているが、講堂に回廊がとりつくとなれば、金堂と塔のあいだの広い空間を、講堂の前庭部として利用したと考えることができるかもしれない。

一方、飛鳥寺をはじめ、山田寺(桜井市山田)や法隆寺では、講堂は北面回廊の外側におかれている。いわゆる法隆寺式伽藍配置の古例である安倍寺や法輪寺も、講堂を回廊外におく。

安倍寺との  
共通点

安倍寺は、金堂と塔の距離が大きいことでも吉備池廃寺と似るが、ほかにも、中門が金堂と塔の midpoint を通る伽藍中軸線上にない可能性があること、金堂周囲に溝をめぐるらしいことなど、いくつかの共通点が認められる。安倍寺は、百済大寺の「造此寺司」(『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』)に任じられた阿倍倉橋麻呂の造立といわれ、後述する本章4の出土瓦の検討によっても、百済大寺や山田寺の年代に近接した7世紀中葉の創建とみてよい。とすれば、安倍寺と百済大寺(=吉備池廃寺)<sup>26)</sup>の共通点は、両者の創建にかかわった阿倍倉橋麻呂に関連するものと考えべきだろう。安倍寺が、吉備池廃寺の南東約500mの至近距離に位置する事実とあわせて、両者が密接な関係を有していたことは間違いないと思う。この場合、安倍寺の金堂と塔の間隔が広いのは、先述のような塔の高さと金堂-塔の心々間距離を合わせる設計によるのではなく、たんに百済大寺の平面を縮小したためと考えたい。

講堂は回廊  
の外に想定

以上のように推定すると、安倍寺の配置は、吉備池廃寺の伽藍を復元するうえでも有効な材料となりうる。よって、ここでは、安倍寺に倣い、講堂を北面回廊の外側におく復元案(Fig. 105)をひとまず提示しておくことにしよう。

ただし、講堂の規模や正確な位置に関しては、まったく根拠がない。そこで、規模については、飛鳥寺や山田寺の講堂が桁行柱間を偶数間とすること、ほかの寺院の例からみて、平面が金堂や塔より大きい可能性があること、次節で考察するように、金堂の柱間寸法は13尺もしくは14尺を基調とすること(この場合の1尺は約0.300m)などから、山田寺講堂や薬師寺講堂などの柱間寸法を参考に、桁行10間(124尺=10尺+13尺×8+10尺)×梁行4間(48尺=10尺+14尺×2+10尺)の入母屋造を想定した。基壇に関しては、基壇の出を14尺として、東西152尺×南北76尺と考えておく。

また、伽藍内での位置については、南面回廊外側柱筋から320大尺北に講堂心をおき、多数の僧房との併存を推定した<sup>30)</sup>。講堂の前庭部がやや狭い印象を与えるけれども、回廊基壇との間は実長で約12.4mある。これは、法隆寺西院伽藍(14m前後)より若干狭い程度である。ともあれ、北面回廊以北の様相については不確定要素が多く、上記の復元はあくまで一案にすぎないことを強調しておきたい。

**南門の問題** 桜井市第12次調査では、中門の南方で2条の東西溝SD441・442を検出し、中ほどにあるベースの高まりSX443とあわせて、調査概報はこの間に吉備池廃寺の南門を想定する<sup>31)</sup>。前述のように、これらの溝の midpoint は、南面回廊外側柱筋から100大尺南にあるとみてよいので(Tab. 12の⑧)、少なくとも伽藍配置上、重要な位置を占めていたことは確かだろう。

しかしながら、その約45m西方でおこなった橋本冠名遺跡の調査（第1トレンチ）では、これらの延長にあたる溝は確認されていない<sup>32)</sup>。ただ、それより15m西方の第2トレンチでは、トレンチ北端から2.5～8.5m間で、道路の一部ともみられる硬い遺構面を検出している。また、第1トレンチでも、この南にあたる部分で、硬く踏みしめられたような遺構面（生活面）の存在を認めている。

上記の硬質の遺構面は、南門前方を走る東西道路となる可能性もあるが、いずれも桜井市第12次調査の東西溝SD441・442からは南へかなり隔たっており、性格を特定できない。現状では、桜井市第12次調査区で検出した2条の溝と、その間のベース土の高まりSX443のみが、南門ないし寺域南限に関係づけられる材料であり、門の内外にのびていたはずの道路やそれにとまう溝、遮蔽施設などについては不明とせざるをえないだろう。

一方、SD441・442やSX443についても、調査範囲がきわめて限定されたこともあって、南門の南北の雨落溝や基壇と確定できるわけではない（72～73頁）。SD441とSD442の心々間距離は約15.2mに達するので、南北雨落溝間心々間距離で約10.4mを測る中門をはるかにしのぐものとなってしまふ。ところが、これらの溝に用いられた石は中門や回廊の雨落溝よりも小さく、溝の規模も貧弱な感が否めない。また、この一帯は、旧流路にあたる地盤がよくない場所だが、このような状況下で、ベース土を基壇土として残しつつ、周囲を削りこんで基壇をつくる方法がありうるのか、という遺構自体の解釈も問題となろう。

遺構解釈  
の問題点

加えて、SD441とSD442の間に南門を想定した場合に問題となるのは、伽藍配置全体における南門の位置である。ここに南門を推定すると、金堂・塔それぞれに対応して二つの南門・中門を設けたと考えるか、南門・中門ともに一つずつで、伽藍の軸線が東へ寄せられたと理解するか、どちらかとなろうが、先に中門について検討したのと同様に、なぜ金堂の正面ではなく、西へ寄った位置におかれたのか、その理由を追究しなければならない。けれども、後者の想定では、門の中軸線が金堂中軸線からずれる理由は説明困難である。一方、前者も、東西それぞれの南門・中門が、後方の金堂や塔の中軸線と合致しない理由の説明にはならないだろう。

南門位置  
の問題点

むしろ、中門の位置が伽藍全体の中軸線寄りに偏している事実を重視すれば、南門は伽藍中軸線上に存在したと考えることも不可能ではない。この場合、吉備池廃寺の金堂と塔は東西に大きく離れている関係もあって、それぞれの中軸線寄りの位置に二つの中門がおかれたとみることができるからである。

もちろん、SD441とSD442の間に南門を想定しないとしても、この2条の溝の性格と、両者の中点が南面回廊外側柱筋から100大尺に位置するという事実をどう解釈するかは問われることになる。その状況から、寺域の南限にかかわる蓋然性は高いと考えるが、この間を道路とみるのも一案であり、柱穴は検出されていないものの、何らかの遮蔽施設の存在を推定することもできよう。けれども、今のところ、それを検証する手だてはない。

いずれにしても、以上のように情報が限られた現況にあっては、2条の溝の性格および南門の位置を確定するのは時期尚早といわざるをえない。中門より南方における遺構の実態とその位置づけについては、資料の増加を待つてあらためて検討すべきであろう。その意味でも、今後、周囲の遺構を含めた遺跡全体に対する厳重な保護と、学術的視点に立った綿密な発掘調査の実施を望みたい。

- 1) このほか、僧房SB260とSB400は、建物の北側柱筋を揃えているとみられるけれども、方位の振れのとりかたによっては、棟通りや北側柱筋、南側柱筋が揃う可能性も否定できない。いずれにしても、この2つの僧房が配置上密接な関連をもつことは確実だが、SB260とSB400の北側柱を結んだ方位 (Tab. 9のEG・EF) は、計測した2カ所でも振れが異なる。柱筋が揃うという前提が不確定要素を含む点とあわせて、これを伽藍方位の基準とするのは適当ではないだろう。
- 2) 南北方向では、2点の関係が、一方からもう一方をみたとき第1象限もしくは第4象限にある場合に－(減法)、第2象限もしくは第3象限にある場合が＋(加法)となる。東西方向では、同様に、一方からもう一方をみたとき、第1象限もしくは第4象限にある場合は＋(加法)、第2象限もしくは第3象限にある場合が－(減法)となる。
- 3) 岡田英男「飛鳥時代寺院の造営計画」『研究論集Ⅷ』奈文研学報第47冊、1989年。
- 4) 第Ⅲ章2の註34) (75頁) 参照。
- 5) 岡田英男「飛鳥時代寺院の造営計画」前掲註3)。井上和人「飛鳥京城論の検証」『考古学雑誌』第71巻第2号、日本考古学会、1986年。
- 6) たとえば、回廊内側柱筋間の実長149.6mを420大尺、回廊棟通りの実長152.9mを430大尺とみると、ともに1大尺=0.356mとなる。これを用いてTab. 12のような計算をおこなったが、回廊外側柱筋を基準とした場合のような完好な数値とはならない。また、唐大尺 (=大宝令小尺) にあたる尺についても、1尺=0.291~0.299mを仮定して同様な計算を試みたが、完好な数値を得られなかった。
- 7) 回廊の南北中軸線 (伽藍全体の中軸線) は、西面回廊外側柱筋 (Tab. 11のa) と東面回廊外側柱筋 (Tab. 11のb) の中点 (X=-166,217.5 Y=-14,995.1) を通り、北で0° 53' 29" 西に振れる直線とする。
- 8) 金 東賢「皇龍寺跡の発掘」(『仏教芸術』207号、毎日新聞社、1993年)によれば、東西回廊の棟通り間の距離は、南端で558.03尺、北端で552.75尺を測り、平均555.39尺という。
- 9) 森 郁夫『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局、1998年、77~115頁 (初出1991年)。
- 10) 宮本長二郎「飛鳥時代の建築と仏教伽藍」『日本美術全集』第2巻、講談社、1990年。澤村 仁「白鳳・天平の寺院建立」『日本古寺美術全集』第3巻、集英社、1979年など。
- 11) 金堂と塔を東西に並置する伽藍配置が、帰朝した留学生や僧侶によってもたらされた可能性も否定できない。とりわけ、後述するように、吉備池廃寺の回廊の東西規模や塔基壇の大きさが新羅皇龍寺に近似するのは、その計画や、建造中の皇龍寺伽藍の姿が日本に伝えられていたことを示唆するものではなかろうか。
- 12) 岡田英男によれば、金堂心と塔心の距離は300大尺の1/4にあたる75大尺にとるのが古制らしく、飛鳥寺、若草伽藍 (生駒郡斑鳩町) のほか、川原寺 (明日香村川原) がこれを踏襲している。一方、山田寺 (桜井市山田) と四天王寺 (大阪市) は84大尺ほどにとる。岡田英男「飛鳥時代寺院の造営計画」前掲註3)。
- 13) 伊東忠太『日本建築の研究・上』伊東忠太著作集第1巻、竜吟社、1937年 (1982年に原書房により復刻)、227頁。
- 14) 岡田英男「西院伽藍と若草伽藍の造営計画」『法隆寺発掘調査概報Ⅱ - 昭和57年度防災工事に伴う発掘調査-』法隆寺、1983年、第86図。
- 15) 法隆寺国宝保存委員会『国宝法隆寺五重塔修理工事報告 附図』1955年。
- 16) 現在の塔は元禄9年 (1696) の修理で五重部分が2.6尺 (0.8m) 高められた状態を保っており、当初の高さは105尺 (31.8m) 程度である。すると、塔の高さと金堂-塔心々間距離はほとんど一致することになる。なお、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』によれば、五重塔は現状よりはるかに高い16丈 (48.5m) と記されているが、昭和大修理によって、四重以下が創建以来一度も改修を受けていない事実が判明し、資財帳の記録は誤りであることが確定している。文献の記載と遺跡だけから、塔の高さと金堂との距離を検討するのは、やや危険がともなうだろう。
- 17) 法輪寺の場合は、金堂-塔の心々間距離の方が若干長いようだが、法起寺 (生駒郡斑鳩町) ではほぼ一致するとみてよい。法輪寺、法起寺については、以下の掲載図により略測した。観光資源保護財団『法輪寺三重塔調査報告書』1972年。村上詔一「法起寺旧境内の発掘」『年報 1970』。
- 18) 東西両塔の心々間距離は71.71mで、伽藍中軸線から東塔心までは35.81mを測る。また、東西両塔の心を結んだ線から金堂心までの南北距離は29.2mである (奈文研『薬師寺発掘調査報告』奈文研学

- 報第45冊、1987年)。基壇上面からの現薬師寺東塔の高さは112.65現尺=34.13m、当初の復元高は114.04尺=34.55mである(浅野清『薬師寺東塔に関する調査報告書』薬師寺、1981年)。したがって、おおむね伽藍中軸線から東塔までの距離が、東塔の高さに等しいとみることができる。
- 19) ここでいう「東魏尺」は、同書に通常、曲尺の1.176倍と記された、いわゆる高麗尺(=大宝令大尺)である。「東魏尺」は、『隋書』律歴志の「東後魏尺」(東後魏尺)を指し、『隋書』原文では、晋前尺の「一尺五寸八毫」にあたとされている。この数値をそのまま用いると、実長は0.348mと算出され、そこから高麗尺ないしその源流とみる説が生まれた。しかし、『宋史』律歴志に引くところでは、「東後魏尺」の晋前尺に対する比率は「一尺三寸八毫」と記されており、この場合の実長は0.300mとなる(藪田嘉一郎編訳注『中国古尺集説』綜芸舎、1969年、27頁ほか)。前後の時代の尺の実長から考えても、『宋史』の記述に信をおくべきであって、これが現在の中国および日本を通じた定説となっている。したがって、「東魏尺」を「高麗尺」と同一視することはできない。なお、高麗尺については、第Ⅲ章2の註34(75頁)を参照されたい。
- 20) 金 東賢「皇龍寺跡の発掘」前掲註8)。
- 21) 同様に金堂-塔間の間隔が広い寺院として、安倍寺を挙げることができる。ここでは、塔基壇の一辺が12.1mほどであるにもかかわらず、塔-金堂の基壇間の距離は約38mもあり、想定される塔の高さよりも明らかに大きい(桜井市『安倍寺跡環境整備事業報告-発掘調査報告書-』1970年)。この解釈については後述する。
- 22) 法隆寺五重塔と法起寺三重塔の初層平面がほぼ同規模(方6.4m)であり、室生寺五重塔(宇陀郡室生村)がそれらよりはるかに小さい(方2.4m)という事実が示すように、塔の初層平面や基壇規模と塔の層数とは必ずしも関連しない。ただし、高層の塔になるほど、塔の通減によって上層の平面は小さくなるので、高い塔を建てるために巨大な基壇がつくられた、と解釈するのは不可能でないだろう。
- 23) 法隆寺ほかの事例では、回廊の縦横比を1:√2とするものもあるが(岡田英男「飛鳥時代寺院の造営計画」前掲註3)、それを吉備池廃寺に適用すると、南北の回廊外側柱筋間の距離が110.5m(311大尺)あまりとなり、金堂北側の空間が南側よりも大きくなってしまふ。そのため、ここでは、金堂と東面回廊の距離から北面回廊の位置を推定することとした。
- 24) 『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』には、「袁智天皇」(皇祖母尊=皇極)により施入された繡仏1帳の記載がある。これは、『日本書紀』白雉元年(650)10月条、同2年(651)3月条の記事とも対応しており、百済大寺に安置されたものであることは疑いない。一方、『薬師寺縁起』などによると、薬師寺の場合、繡仏は講堂に置かれていたらしい。そもそも繡仏は、礼拝の対象としての本尊的な意味とは異なり、本尊の補足的な性格をもつものと想定されており(守田公夫『刺繡』日本の美術 59、至文堂、1971年)、『七大寺巡礼私記』によれば、薬師寺講堂の繡仏は、平安時代末には最勝会の時のみ懸けられるだけであった。繡仏が、そうした法会の荘厳具のような性格をもつとすれば、百済大寺の場合も、講堂におかれたとみるのが自然ではなかろうか。
- 25) 奈良県立橿原考古学研究所『橘寺』奈良県文化財調査報告書第80集、1999年。
- 26) 桜井市『安倍寺跡環境整備事業報告』前掲註21)。
- 27) 福山敏男『奈良朝寺院の研究』高桐書店、1948年、290~293頁。
- 28) 直木孝次郎「百済大寺の建立と阿倍氏」『相愛大学研究論集』第15(1)巻、1998年。
- 29) 一般に、講堂には簡素な組物を使うため、基壇の出は小さいが、平城京の薬師寺講堂では、検出した礎石位置と雨落溝の距離から、三手先組物を使用したことが判明している(箱崎和久「薬師寺講堂について」『日本建築学会大会(関東)学術講演梗概集』F-2 建築歴史・意匠、1997年)。平城京薬師寺は本薬師寺と堂塔の規模がほとんど一致し、本薬師寺の規模を踏襲しているとみられる。このほか、現存するものでは、京都の東寺講堂(1490年再建)が、それまでの基壇規模を踏襲して三手先組物を用いている。以上の例から、主要官寺の講堂には三手先組物が使用された可能性が大きいといえよう。
- 30) 伽藍中軸線上の北方には僧房SB260が独立するが、この南にはSB400に対するSB340のような僧房が並ばないことから、SB260の南に講堂や食堂などの礎石建物を想定することも可能だろう。
- 31) 桜井市教育委員会『平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』2002年、13~16頁。
- 32) 前園実知雄「橋本冠名遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1984年度(第2分冊)』奈良県立橿原考古学研究所、1985年。

### 3 堂塔の建築的考察

#### A 建物造営尺の検討

この節では、吉備池廃寺の個々の建物について検討してみたい。前節の考察により、堂塔の配置には、大宝令大尺に相当するいわゆる高麗尺（大尺）が用いられていることが判明した。一方、堂塔の柱間寸法には、これとは別の尺度が使用されたことが想定できる。そうした建物の造営尺については、金堂や塔、中門、回廊では、礎石位置が明確でないため検討できないが、3棟の僧房SB260・340・400から推定が可能である。ただし、これらの僧房は、掘立柱建物という性格上、礎石建物のように、礎石位置から柱心を定め、造営尺を求めるという精密な手法をとることができない。したがって、厳密な寸法を追究することは不可能であり、算出される数値はあくまで概略を示すものであることを断わっておきたい。

「第三章 2 遺構各説」で述べたように、SB260の柱間寸法は桁行・梁行ともに3.0m、SB340では桁行が2.5mほどで、梁行は2.7mである。SB400は、梁行を2間分とみれば、桁行・梁行ともに柱間寸法の単位は2.7mとなる。柱が抜き取られているため、個々の柱間についてこれ以上正確に把握するのは困難だが、SB340は桁行11間の全長が約28.0mと計測され、遺構の観察から、等間と判断できた。よって、SB340の桁行柱間寸法は、平均2.55mと算出される。

以上から、僧房の柱間寸法は、SB260が3.0m、SB340が2.55mと2.7m、SB400が2.7mであり、これらをほぼ完数値とする造営尺は、1尺=0.300mの長さとなる。すなわち、SB260が桁行・梁行ともに10尺、SB340が桁行8.5尺・梁行9尺、SB400が桁行・梁行とも9尺に相当する。この数値は前述のように厳密なものではなく、誤差を含んでいるが、おおむね、これを建物の造営尺と考えて誤りないだろう。

なお、上記の造営尺が、唐大尺すなわち大宝令小尺にあたることは間違いない。大宝令の雑令は、土地を測る場合には小尺の1.2倍にあたる大尺、それ以外は小尺を使用するよう定めており、吉備池廃寺は、その規定どおりの状況で造営された様相がうかがえる。

ちなみに、前節で算出した1大尺=0.355mを1.2で除して1小尺の長さを求めると、0.296mという値となる。これを造営尺とみることももちろん可能だが、その場合、SB340の桁行柱間8.5尺を11倍すると27.7mとなって、計測値との間に0.3mの差を生じてしまう。ここでは、遺構との整合性を重視して、1尺=0.300mを吉備池廃寺の建物造営尺と考えることにしよう。また、これは、643年に金堂の造営を開始した山田寺（桜井市山田）の伽藍中心部の造営尺（1尺=0.3024m<sup>1)</sup>）にごく近い数値でもある。

#### B 金 堂

**基壇規模** 上部構造に関わる金堂基壇の規模は、東西約37m×南北約25mと推定される（41頁）。これを、さしあたり桁行124尺×梁行84尺と考える。この規模は、飛鳥時代の金堂としては格段に大きく、百濟大寺の後身である文武朝大官大寺金堂（明日香村小山）には及ばないものの、面積では、同時代に造営された山田寺の2.8倍、本薬師寺金堂（橿原市城殿町）の1.7倍に達

建物造営尺  
は0.300m



する (Fig.108)。巨大な金堂が建っていたことは間違いない。

ところで、村田健一は、現存する古代建築に使用されている継手のない部材の長さは、最長で10m台前半であることをつきとめ、これが当時入手可能な材寸の限界で、建物規模を規定する要因のひとつと推定した<sup>3)</sup>。そして、軸部や組物に継手をつくらない塔や校倉などは、とくに材料の長さによる制約が大きいと考え、飛鳥時代や奈良時代前半における塔の初重平面が、原則的に一辺8m以下である理由を、一本材として得られる材料の長さの限界に結びつけている。また、8世紀後半に8mを超える塔が多くみられることから、軒桁(丸桁)などの長材に継手をつくるなどの構造技法が発達し、平面規模が拡大した可能性を指摘した。

吉備池廃寺の金堂は、基壇規模からみて、継手のない部材で組み上げることは不可能であり、1丁10mを限度とすれば、桁行材で3丁、梁行材で2丁程度が必要になると考えられる。したがって、村田の見解に従うならば、構造技法の発展は、7世紀中期にはすでにその萌芽があったとしなければならない。それにもかかわらず、飛鳥時代の寺院遺跡で、吉備池廃寺金堂に匹敵する規模の遺構をほかに認めることができないのは、その技術が一般的なものではなく、当時、それを動員できる寺院がきわめて限られていたことを示唆するものであろう。つまり、吉備池廃寺金堂の基壇は、たんに巨大な規模だけが問題なのではなく、その上部に建つ建築の構造技法自体が先進的なものであり、それを導入できた発願者の権力や財力がひじょうに大きかったことを物語っているのである。

上部構造  
は先進的

ともあれ、当時の有力豪族の発願による寺院や、大陸から新技術をもたらしたと推定される渡来系氏族の寺院に、吉備池廃寺金堂に匹敵するものは存在せず、これをしのぐ規模の金堂は、藤原京および平城京の官寺でようやく現れるにすぎない。吉備池廃寺の寺名を文献史料から導くとすれば、やはり百濟大寺以外にはありえないだろう。

**平面復元的前提** 基壇規模から金堂の平面を推定するにあたり、前提となる条件をいくつか確認しておきたい。

まず、基壇の出すなわち軒の出と、それにとまなう組物や屋根形式について検討するが、7世紀～8世紀前半の金堂建築では、側柱(この場合、裳階柱は含まない)からの基壇の出が12～17尺と比較的大きいことが知られている (Fig.108)。これは軒の出の大きさを示すものであり、吉備池廃寺金堂に関して、軒の出の大きい三手先程度の組物を想定するのがもっとも自然だろう。また、ほかの金堂の例からみて、屋根形式は寄棟造もしくは入母屋造、すなわち側柱からの基壇の出が四周とも等しい形態と考えられる。この場合、基壇の出を13～17尺程度とすれば、建物本体は桁行90～98尺×梁行50～58尺と想定できる。

三手先組物  
を想定

つぎに、山田寺金堂のような、身舎と廂の柱間を同数とする柱配置をもつ可能性について検討してみよう。山田寺金堂の柱間寸法は、身舎が桁行中央間16尺、端間6.5尺、梁行9.5尺等間、廂が桁行16尺等間、梁行19尺等間であり、身舎柱からの廂の出は9.5尺である (Fig.108)。山田寺金堂式<sup>4)</sup>の柱配置で特徴的なのは、身舎と廂の桁行中央間をそろえ、廂の桁行端間=身舎の桁行端間+廂の出とすることであり、梁行も同様に、廂梁行柱間=身舎梁行柱間+廂の出とする。このため、身舎の桁行端間は、廂の桁行端間より廂の出の分だけ小さくなるが、そのかわりに、内部空間の広さは確保される。

こうした柱配置を吉備池廃寺に適用する場合、平面を桁行・梁行方向ともに大幅に拡大にす



る必要がある。その際に、建物の隅部分における上記の原理には変化がないと仮定し、たとえば外観が桁行・梁行とも14尺等間、廂の出を8尺とする桁行7間×梁行4間の金堂を想定すると、身舎の隅の間は6尺、梁行は6尺+14尺+14尺+6尺=40尺となる。つまり、身舎内部の空間が大きく、建物の外周に近い部分にだけ柱が密集する構造となってしまう。この場合、内部にもうひとまわり柱をめぐらすことが必要だろう。しかし、それならば、山田寺金堂式の柱配置とするより、単純な四面廂建物とするほうが合理的である。山田寺金堂式の柱配置は、本来、比較的小さな仏堂で、身舎内部空間を広くしようとする場合に最大の効果を発揮するものであ<sup>5)</sup>て、規模の大きな仏堂にとっては合理的とはいえない。吉備池廃寺金堂の平面には想定しがたいと考える。

次に、法隆寺西院伽藍（生駒郡斑鳩町）の建築に見えるような隅一組物を用いた可能性について検討してみたい。隅一組物の場合、軒桁（丸桁）を壁面から持ち出すと、隅部分で軒桁の支持点間の距離が広くなることから、隅の間（=廂の出）をその他の柱間よりも小さくすることが求められる。すると、梁行の大きな建物では、結果的に山田寺金堂式の柱配置と大差なく、身舎梁行柱間が過大となって、建物の外周に近い部分にだけ柱が密集することとなる。やはり、

Tab. 13 金堂等の基壇規模と縦横比 単位：m

堂 宇 名	年 代	桁 行 間数	全 長	梁 行 間数	全 長	全長の比 桁行/梁行	備 考	文献
飛鳥寺中金堂	6世紀末	—	21.2	—	17.6	1.21		1
若草伽藍金堂	7世紀前半	—	22.0	—	19.5	1.13		2
奥山廃寺金堂	7世紀前半	—	22.9	—	19.1	1.20		3
山田寺金堂	7世紀中葉	3	21.6	2	18.5	1.17	放射状組物	4
川原寺中金堂	7世紀後半	5	23.6	4	19.4	1.22		5
小山廃寺金堂	7世紀後半	—	18.5	—	16.0	1.16		6
法隆寺金堂	7世紀後半	5	22.4	4	19.1	1.17	裳階付・二重基壇	7
本薬師寺金堂	7世紀末	7	29.5	4	18.2	1.62	裳階付	8
文武朝大官大寺金堂	8世紀初	9	54.6	4	30.1	1.81		9
興福寺中金堂	8世紀前半	7	40.3	4	27.1	1.49	裳階付	10
平城京薬師寺金堂	8世紀前半	7	29.4	4	18.3	1.61	裳階付	11
平城京薬師寺講堂	8世紀前半	9	43.3	4	22.2	1.95	裳階付	12
唐招提寺金堂	8世紀後半	7	35.2	4	21.8	1.62	現存	13
吉備池廃寺金堂		7?	37	4?	25	1.48	裳階付?	

#### 文献

- 1 奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』奈文研学報第5冊、1958年
- 2 文化庁文化財保護部記念物課『法隆寺若草伽藍跡昭和44年度発掘調査概報』1969年
- 3 『藤原概報 26』1996年
- 4 奈文研『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年
- 5 奈文研『川原寺発掘調査報告』奈文研学報第9冊、1960年
- 6 奈良県立橿原考古学研究所『明日香村紀寺跡発掘調査概報』奈良県遺跡調査概報1977年度、1978年
- 7 法隆寺国宝保存委員会『国宝法隆寺金堂修理工事報告』法隆寺国宝保存工事報告書第14冊、1956年
- 8 『藤原概報 23』1993年
- 9 小澤 毅「平城宮中央区大極殿地域の建築平面について」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会、1993年
- 10 奈文研『興福寺一第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報 III-1』興福寺、2002年
- 11 奈文研『薬師寺発掘調査報告』奈文研学報第45冊、1987年
- 12 寺崎保広「薬師寺講堂の調査」『1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈文研、1996年
- 13 太田博太郎編『日本建築史基礎資料集成 第4巻 仏堂 I』中央公論美術出版、1971年

これも、吉備池廃寺のような基壇規模をもつ建物に適用するのは困難であろう。

もっとも、柱間寸法を比較的小さくとり、廂を二重にめぐらす梁行6間の平面を想定すれば、ありえない構造ではないかもしれない。ただし、隅一組物とする要因が、村田健一が指摘するような部材の組み上げ方法<sup>7)</sup>によれば、そうした形式をとらない薬師寺東塔(奈良市)以後の建物に一般的な構法を、吉備池廃寺の時点まで遡らせることができるかが問題となる。

以上、当然のことではあるが、ほかの金堂と比較して格段に大きい吉備池廃寺金堂の平面に、同時代の比較的小さな仏堂の構造をそのまま適用することはできない。むしろ、先述したように、この巨大な基壇をもつ建築に用いられた構造技法は、当時先進的なものであった可能性が高く、8世紀の遺構を視野に入れて検討する必要があるだろう。

**金堂の平面復元** Tab. 13は、大和の主要寺院の金堂を中心に、基壇規模と縦横比を比較したものである。Fig. 108とあわせて通観すると、7世紀末以降の金堂は、桁行が7間ないし9間と大きくなる関係上、梁行に対する桁行の比率が増し、平面がやや細長い形状となる。吉備池廃寺金堂も同様の特徴をもち、基壇の縦横比(1.48)は、桁行7間×梁行4間の興福寺中金堂(1.49、奈良市)や薬師寺金堂(1.61)と近似することがわかる。したがって、吉備池廃寺金堂についても、基壇の実長および縦横比から、桁行7間×梁行4間とみるのが妥当だろう。

ただ、興福寺中金堂や薬師寺金堂には外側に裳階がつくけれども、吉備池廃寺金堂が裳階をそなえていたかどうかは明らかでない。現在のところ、裳階用と考えられる小型瓦は出土していないが<sup>8)</sup>、裳階の屋根には法隆寺金堂や五重塔のような板葺も想定できるため、ここでは裳階がつく可能性を含めて推定した。なお、基壇南面の張り出しについては、建物本体の上部構造とは関係のないものとみたので、張り出し位置を柱位置ととくに関連づけることはしていない。しかし、正面における基壇上面の面積を確保するためのものという観点から(41頁)、側柱からの基壇の出が大きくなる復元案では、裳階をつけることにした(Fig. 109)。

金堂平面は  
7間×4間

復元案

復元案Aは、薬師寺講堂のように、廂の出をやや小さくし、身舎の梁行を大きくとった案である。基壇の出が16尺となることから、薬師寺金堂や講堂の例に倣い、裳階の出は少し小さめの7尺と想定した。この場合、屋根は入母屋造<sup>9)</sup>となる。

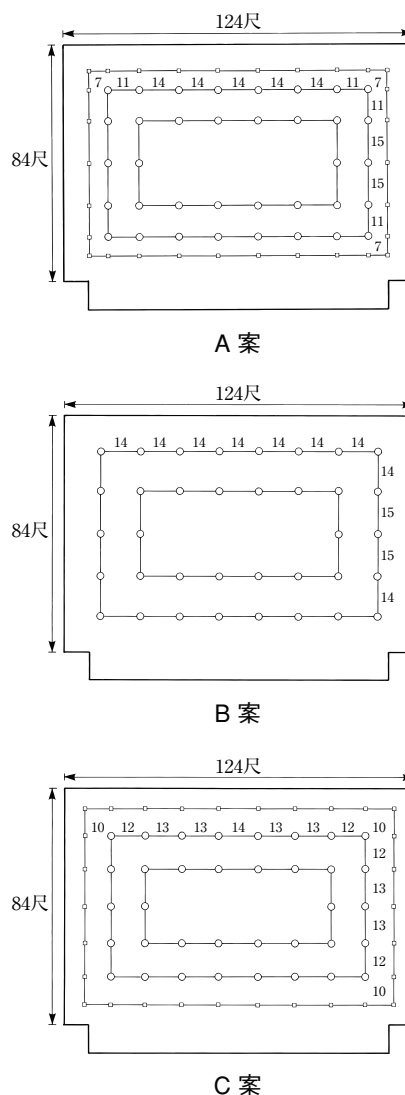


Fig. 109 金堂の平面復元案 1:800

復元案Bは、大官大寺金堂に倣い、桁行柱間をすべて同寸とする案である。基壇の出は、他の案よりやや小さい。ただし、薬師寺講堂では基壇の出10.5尺でも裳階（6.5尺の出）をつけているので、この案でも裳階をつけることは可能だが、他との区別を出すために、裳階をつけない案とした。屋根は入母屋造となる。

復元案Cは、屋根を寄棟造とする案で、興福寺中金堂や唐招提寺金堂（奈良市）のように、わずかではあるが桁行中央間に向けて柱間を広くした。この場合、基壇の出が17尺にもなることから、興福寺中金堂に倣って、裳階の出を比較的大きな10尺にとった。

## C 塔

**心礎の特徴** 吉備池廃寺の塔心礎抜取穴は、南北6.7m以上×東西5.4m以上、現存する版築土上面からの深さ20～50cmを測る、ひじょうに大きなものである（48頁）。これは、心礎自体が巨大であったことを示すものだろう。

一方、文武朝大官大寺の塔心礎抜取穴は、南北5.6m×東西5.4mで、現存する基壇版築土上面から1mほどの深さがあった。<sup>10)</sup> 明治初年に調査したという岡本桃里の礎石配置図<sup>11)</sup>によれば、この塔心礎は南北12尺（3.6m）×東西10尺（3.0m）の大きさとされている。

吉備池廃寺の場合、塔心礎抜取穴の全容は不明だが、現在確認できる抜取穴の平面規模は、すでに文武朝大官大寺のそれを上まわっており、3m四方以上の心礎をもつことは確実とみられる。こうした巨大な塔心礎の例としては、ほかに尼寺廃寺（香芝市）の心礎が約3.8m四方、<sup>12)</sup> 久米寺（橿原市久米町）の心礎が4.1×2.9mの規模<sup>13)</sup>をもち、いずれも日本最大級である。吉備池廃寺の塔心礎も、これらに匹敵する巨石であったと推定される。

日本最大級の心礎

ところで、吉備池廃寺の心礎には据付穴が認められず、基壇版築の途中で据えたものと考えられる。現存する基壇高は最大2.3mを測るので、厚さ1.2mの尼寺廃寺塔心礎を参考に、その頂部付近まで基壇を積み上げていたとすれば、基壇高は約2.8mとなる（50頁）。この場合、心礎上面が基壇上に出た地上式心礎となるが、たとえば約1.2mほど心礎を地下に埋める尼寺廃寺塔のような地下式心礎<sup>14)</sup>を想定すると、基壇高は3mを大幅に超える異常な高さに復元せざるをえない。したがって、地上式心礎を想定するのが妥当だろう。現在確認できるもっとも古い地上式心礎は、若草伽藍の塔（生駒郡斑鳩町、7世紀前半）であり、吉備池廃寺（=百済大寺）の塔は、それに次ぐ古例とみられる。

地上式心礎

上記のような規模の心礎を、上面が地上に出るように据え付けると、心柱を囲む四天柱の礎石を据える余地はほとんどなく、心柱を囲む四天柱は省略するか、心礎上に立てるかのいずれかであったと考えざるをえない。ちなみに、文武朝大官大寺の塔は、方5間の平面で柱間寸法は10尺等間だが、四天柱礎石の据付・抜取痕跡がなく、四天柱の礎石は存在しなかった可能性が高いとされている<sup>15)</sup>。しかし、四天柱自体を省略した場合、内部の横架材を3間分架けわたす必要があり、文武朝大官大寺のように柱間10尺とすると、30尺（=約9m）以上の横架材が必要となって、構造的な問題を生じるおそれ大きい。したがって、心礎上に四天柱を立てたとみるのが妥当だろう。

四天柱は心礎上か

**基壇規模** 現存する塔基壇と心礎抜取穴から、基壇は一辺32m程度と推定される（50頁）。これは、飛鳥時代の他の塔基壇はもちろんのこと、国内では、一辺23.8mの基壇をもつ東大寺七重

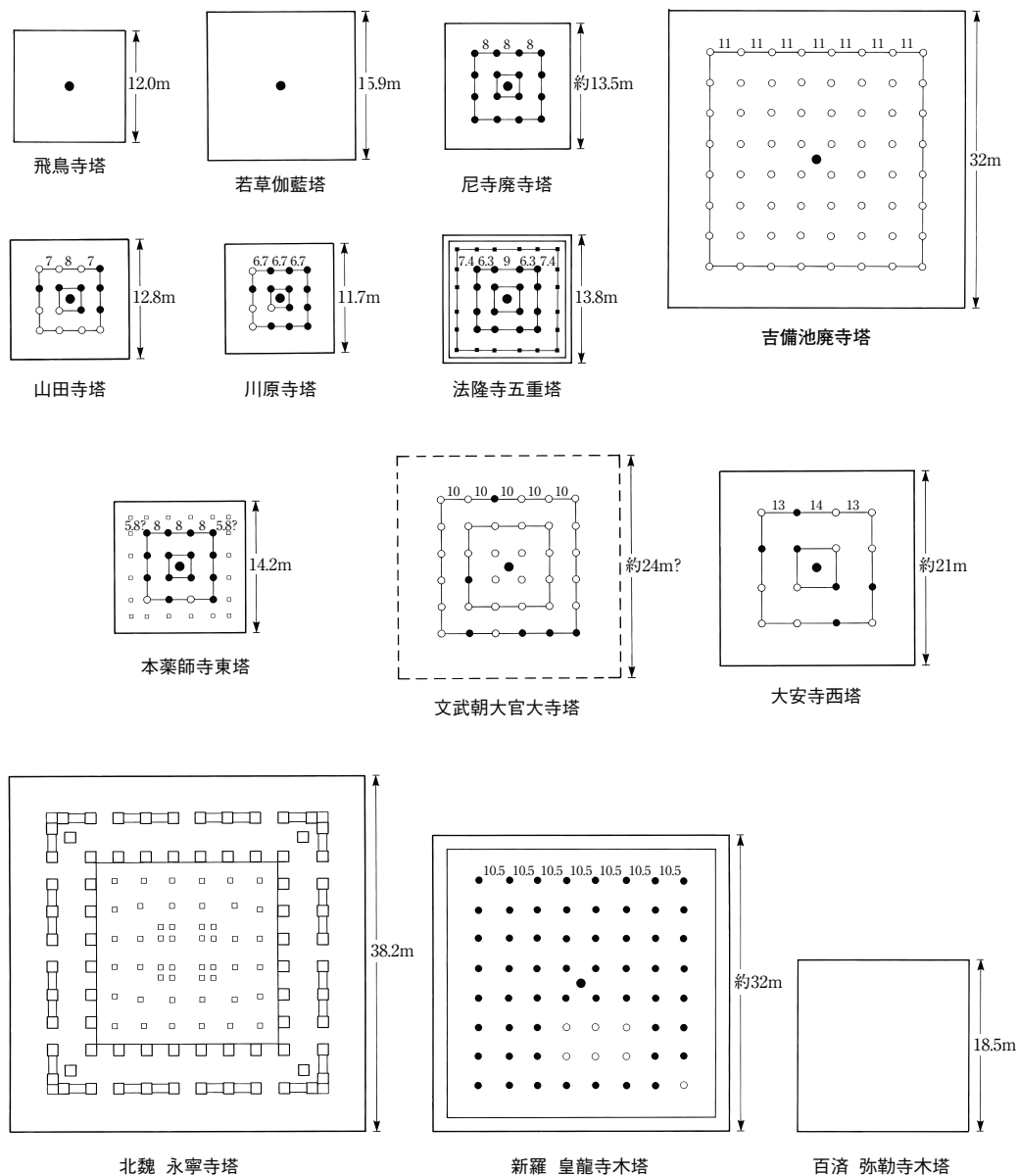


Fig. 110 古代の塔の平面比較 1:800

基壇規模の単位はm、柱間寸法は唐大尺（令小尺；1尺=0.294~0.303m）で統一

<sup>16)</sup> 塔（奈良市）をもし、<sup>17)</sup> 文武朝大官大寺に比肩する規模となる（Fig. 110）。

また、東アジアに目を向ければ、中国北魏の首都洛陽において、516年に靈太后胡氏の発願で造営された永寧寺九重塔（河南省洛陽市）の一辺<sup>18)</sup>38.2mにはおよばないが、百濟の武王が益山の地に7世紀前半に完成させた弥勒寺木塔（九重塔、全羅北道益山郡）の一辺<sup>19)</sup>18.5mを上まわり、新羅の善徳女王が645年に完成させたと記される皇龍寺木塔（九重塔、慶尚北道慶州市）の一辺<sup>20)</sup>32m程度とほぼ同じ規模を示す。したがって、当時の東アジアでも屈指の規模をもつ塔だったことは疑いない。

東アジア  
屈指の塔

こうした中国および朝鮮半島（韓半島）の九重塔は、いずれも皇帝や王が関与して建設されたものに限られる。永寧寺九重塔は534年に焼失してしまうものの、吉備池麁寺（=百濟大寺）の造営にあたって、舒明天皇の意識にそれらが影響を与えた可能性は十分に考えられよう。巨大

な塔基壇の上には、やはり巨大な平面と高さをもった九重塔が建っていた蓋然性がきわめて高いといえる。<sup>21)</sup>

この場合、前項で引用したような、部材長と建物規模に関する分析は適用できなくなる。すなわち、部材長が10m台前半を限度とするならば、一丁材で塔の軸部を組み上げるのは到底不可能であり、3丁程度の継手をもつ塔を想定せざるをえない。したがって、現存する塔からはいかがえない何らかの構造技法的な工夫があった可能性は大きいだろう。ただし、一方で、歴史上にあらわれる九重塔は、百済大寺や大官大寺のほか、平安後期の法勝寺八角九重塔など、ごくわずかしかない。奈良時代の大安寺や東大寺でさえ七重塔であることを勘案すると、百済大寺から大官大寺に至る九重塔には、建物自体の構造的欠陥もしくは建設時の技術的問題が存在した可能性も否定できない。

**塔の平面復元** 吉備池廃寺の塔基壇では、心礎抜取穴以外に礎石の痕跡を確認していないため、柱配置を復元する材料がない。ここでは、百済大寺の後身にあたる文武朝大官大寺と、新羅皇龍寺の発掘調査例を参照しながら、平面を推定することにした。<sup>22)</sup>

文武朝大官大寺の塔は、1904年に礎石抜取穴を実測した本澤清三郎の記録によれば、方5間で柱間は11尺とされている。その後、1978～1979年の発掘調査では、柱間寸法を10尺とみる方が遺構に合致するとした。<sup>23)</sup>一方、新羅の皇龍寺木塔は、方7間の礎石が残り、柱間寸法はすべて3.1～3.2m<sup>24)</sup>である。これらの10～11尺という柱間寸法は、7世紀の塔と比較すると格段に大きく、8世紀後半の各地の国分寺クラスに等しい。<sup>25)</sup>塔についても、金堂と同様に、8世紀の建築も視野に入れて考える必要があるだろう。

そこで、まず、吉備池廃寺の塔基壇一辺約32mを107尺とみる。そして、金堂で想定したように、軒の出を13～17尺とすれば、塔の初重平面は一辺73～81尺と算出される。柱間については、現存する建築や遺跡でも中央間を広くとる例は多いけれども、皇龍寺に倣って等間と推定しよう。すると、それに合致するのは、方7間、11尺等間（一辺77尺）の平面となる。この場合、軒の出は15尺となる。

方 7 間  
11 尺 等 間

なお、上記の平面で、法隆寺金堂や五重塔のような隅一組物の形式をとると、隅の軒桁（丸桁）の支点間が15尺以上あくことになり、法隆寺と同様、隅部分の軒の垂下は免れないと思われる。したがって、隅一組物以外の構法を想定するべきだろう。

## D 中門と回廊

**中門の平面復元** 中門の基壇規模は、東西12.0m×南北9.8mほどと推定される（52頁）。ここから復元できる中門は、桁行3間×梁行2間の規模である。柱間寸法については不明だが、東南隅柱位置付近にある土質の違いSX335を、礎石の据え付けもしくは抜き取りの痕跡とみると、桁行中央間3.6m、両端間2.7m、梁行3.4m、軒の出1.8m程度となり、切妻造八脚門を想定することができよう。階段の痕跡は認められず、雨落溝の張り出しもないことから、礎石程度の高さをもつ基壇とすれば、基壇内に切り込み階段を設けた可能性が高い。

中門は切妻  
造 八 脚 門

**回廊の平面復元** 前節で述べたように、回廊の梁行寸法は伽藍配置を考察するうえでも重要なため、最初に類例を検討してみたい。Tab. 14は、おもに発掘調査で確認した回廊の梁行寸法と、柱心からの基壇および雨落溝の出を比較したものである。

まず基壇の出について、実寸法では、四天王寺（大阪市）が1mを切る（0.76m）一方、文武朝大官大寺や本薬師寺は1.5mを越えているが（それぞれ2.1m、1.7m）、1～1.5m程度が標準と考えられる。梁行寸法に対する基壇の出の割合は、ややばらつきがあるけれども、3割前半～4割前後を標準とみるのが妥当だろう。

次に、柱心からの雨落溝の出を比較すると、文武朝大官大寺や本薬師寺では実寸法も大きく（それぞれ2.4m、2.0m）、梁行寸法に対する比率も5割を上まわっている。これは、法隆寺西院回廊とは異なり、地垂木と飛檐垂木からなる二軒とするためだろう。なお、8世紀後半の坂田寺（明日香村阪田）も、梁行寸法に対する雨落溝の出の割合が大きいが（0.523）、実寸法からは一軒とみてよい。坂田寺回廊は檜皮葺だったことが判明しており、屋根材が軽いため軒の出の割合を大きくすることができたものと推定される。以上、雨落溝の出については、梁行の45%前後で、実寸法1.5～1.8mを標準とみるのが妥当と考える。

吉備池廃寺の場合、もっとも検出状況のよい南面回廊で、南北の雨落溝の心々間距離は6.2～6.6mであり、片側で20cm程度ばらつく。まず、雨落溝の出がもっとも小さくなる6.2mの場合の回廊梁行寸法を検討しよう。なお、吉備池廃寺回廊の基壇規模は5.4mと想定でき、単廊とみ

Tab. 14 回廊の梁行寸法と基壇・雨落溝の関係 単位：m

	梁行寸法	基壇幅	基壇の出	雨落溝の出	基壇の出 梁行	雨落溝の出 梁行	備 考
飛鳥寺	3.64	6.12	1.24	1.58	0.342	0.433	文献1
四天王寺	3.94	5.45	0.76	—	0.192	—	文献2
橘寺	2.73	5.76	1.52	—	0.556	—	文献3
山田寺	3.78	6.35	1.29	1.59	0.340	0.419	文献4
川原寺	3.82	6.43	1.30	1.83	0.341	0.480	文献5
法隆寺西院	3.7	6.1	1.29	1.59	0.348	0.430	文献6
本薬師寺	3.7	7.1	1.7	2.0	0.459	0.541	文献7
文武朝大官大寺	4.2	8.4	2.1	2.4	0.500	0.571	文献8
坂田寺	3.03	5.4	1.19	1.59	0.391	0.523	文献9
吉備池廃寺 案1	3.3	5.4	1.05	1.45	0.318	0.439	雨落溝心々6.2m
吉備池廃寺 案2	3.15	5.4	1.125	1.6	0.357	0.508	雨落溝心々6.2m
吉備池廃寺 案3	3.0	5.4	1.2	1.75	0.400	0.583	雨落溝心々6.2m
吉備池廃寺 案4	3.3	5.4	1.05	1.65	0.318	0.500	雨落溝心々6.6m
吉備池廃寺 案5	3.35	5.4	1.03	1.625	0.306	0.485	雨落溝心々6.6m
吉備池廃寺 案6	3.4	5.4	1.00	1.6	0.294	0.471	雨落溝心々6.6m
吉備池廃寺 案7	3.3	5.4	1.05	1.5	0.318	0.455	雨落溝心々6.3m
吉備池廃寺 案8	3.3	5.4	1.05	1.55	0.318	0.470	雨落溝心々6.4m
吉備池廃寺 案9	3.3	5.4	1.05	1.6	0.318	0.485	雨落溝心々6.5m

文献 1 奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』奈文研学報第5冊、1958年  
 2 文化財保護委員会『四天王寺』埋蔵文化財発掘調査報告第6、1967年  
 3 奈良県立橿原考古学研究所『橘寺』奈良県文化財調査報告書第80集、1999年  
 石田茂作「橘寺・定林寺の発掘」『飛鳥』近畿日本叢書第3冊、近畿日本鉄道株式会社、1964年  
 4 奈文研『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年  
 5 奈文研『川原寺発掘調査報告』奈文研学報第9冊、1960年  
 6 奈良県教育委員会『国宝法隆寺廻廊他五棟修理工事報告書』、1983年  
 7 『藤原概報 24』1994年  
 8 『藤原概報 9』1979年  
 9 『藤原概報 22』1992年

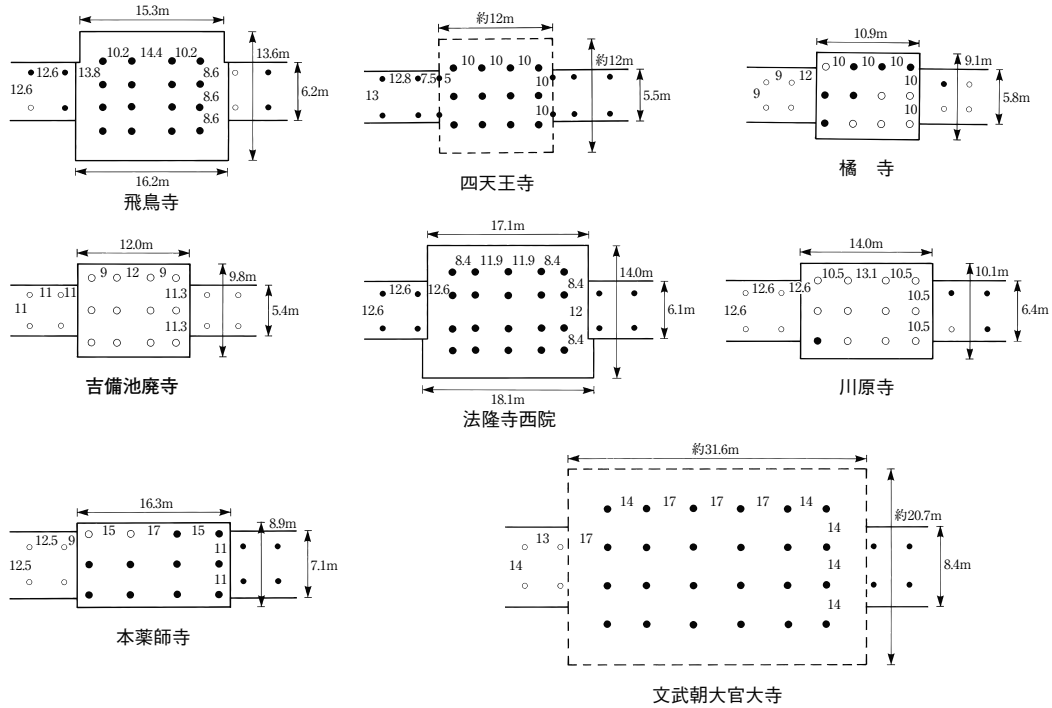


Fig. 111 飛鳥時代の中門と回廊の比較 1:800

基壇規模の単位はm、柱間寸法は唐大尺（令小尺；1尺=0.294~0.303m）で統一

て間違いない（54頁）。このとき、回廊の梁行寸法として適当な値は、3.3m（11尺）、3.15m（10.5尺）、3.0m（10尺）の3案に絞られる（Tab. 14の案1~3）。

3.3mの場合は、基壇および雨落溝の出の実寸法がそれぞれ1.05m、1.45mで、若干小さい感があるが、先に推定した標準値に近く、不自然な数値ではない。これに対して、3.15mとすると、梁行に対する雨落溝の出の比率がやや大きくなってしま（0.508）。3.0mの場合は、さらにその比率が増し、実寸法では一軒と考えると充分なのにもかかわらず、坂田寺を大きく越える数値（0.583）となる。吉備池廃寺の回廊の屋根は瓦葺とみてよいので、こうした寸法は考えがたいだろう。雨落溝の出が、これより20cmほど大きくなる可能性があることを考慮すれば、回廊の梁行寸法は3.3mと復元するのが妥当である。

次に、雨落溝の出が最も大きくなる6.6mの場合は、回廊の梁行寸法として適当な値は、3.3~3.4mとなる（Tab. 14の案4~6）。しかし、梁行を3.35mや3.4mにとると、梁行寸法に対する基壇の出の比率が、標準を下まわってしまう（それぞれ0.306、0.294）。梁行に対して雨落溝の出の割合がやや大きい傾向はあるものの（0.500）、やはり3.3mが適当な寸法といえる。以上、回廊の梁行寸法は3.3mと考えてよいだろう。

回廊梁行  
は 3.3 m

なお、遺構自体にばらつきがあるため、柱心からの雨落溝の出は必ずしも一定しないが、伽藍配置を検討するうえでは、回廊の柱位置と雨落溝の出をかりに定めておく必要がある。そこで、雨落溝心々間距離を6.3m、6.4m、6.5mにとった場合についても、それぞれ検討をおこなった（Tab. 14の案7~9）。雨落溝の出と梁行寸法に対するその割合（括弧内）は、順に1.5m（0.455）、1.55m（0.470）、1.6m（0.485）となる。いずれもとくに無理な数値ではないが、伽藍配置の検討では小数点以下第1位までとしたことを勘案し、雨落溝の出と梁行寸法に対する比

率を、山田寺回廊（1.59m、0.419）や法隆寺西院回廊（1.59m、0.430）に近い数値に求めるとすれば、雨落溝の出を1.5m（0.455）と考えるのが妥当だろう。この場合、雨落溝心々間距離は6.3mと復元できる。

一方、回廊の桁行寸法については、検討する材料がないけれども、山田寺回廊や法隆寺西院回廊などの例から、梁行寸法と同程度と推定しておく。

**中門と回廊の規模** 金堂と塔の巨大さに比べると、中門・回廊は意外に小規模である。とくに中門は、飛鳥寺（明日香村飛鳥）や法隆寺西院、文武朝大官大寺など、飛鳥時代から藤原宮期の寺院の中門が、しばしば梁行を3間にとるのと比較しても、小さい感は否めない（Fig.111）。

回廊は、7世紀までの寺院に一般的な単廊である。復元される梁行寸法は、ほかの寺院にくらべて実寸法ではやや小さく、柱心からの雨落溝の出も、大官大寺や本薬師寺ほど大きくない。飛鳥寺や山田寺、法隆寺などの系譜に連なる、飛檐垂木のない一軒の構造と考えられる。

中門と回廊のバランスは適当

しかしながら、以上のような規模は、中門と回廊の組み合わせだけを見れば、Fig. 111からも明らかなように、バランスのとれたものと言える。しかし、やはり金堂や塔の規模に対しては、ややバランスを欠くといわざるをえない。これは、前節で想定したように、吉備池廃寺が二つの中門をそなえた形式であったことに関わるのだろうか。

## E 僧 房

**僧房の平面** 現存する最古の僧房建築は、法隆寺西院伽藍の東室（747年以前に建立）であり、発掘調査で確認された最古の僧房遺構は、川原寺（665年頃創建、明日香村川原）の西僧房<sup>26)</sup>である（ただし、僧房の創建年代は不明）。吉備池廃寺の僧房SB340・400・260は、百済大寺（639年創建、673年移建）の僧房と考えられるから、現時点では最古の僧房遺構となる。したがって、同時代の僧房の実態が不明なため、以後の僧房と比較してみることにしよう（Fig. 112, Tab. 15）。

最古の僧房

まず、8世紀における官寺の僧房は、桁行総長がさらに長いことがわかる。しかも、その内部を2間もしくは3間ごとに仕切って一つの房をつくり、建物の中央部に馬道とよぶ通路を設けるのが一般的である。

しかし、SB340・400・260では、間仕切りの柱や床束の痕跡は発見できなかった。また、SB340の桁行は11間で、この程度ならば馬道を設ける必要は乏しいが、2間または3間の同規模の房を連ねることができず、変則的な組み合わせとしなければならない。たとえば、建物の中央に馬道を想定すると、馬道をはさんだ両側に2間と3間の房を想定することになる。この場合、川原寺の僧房に似たものになるが、全長が短すぎる感がある。一方、2間一房×5房という形態を考えると、馬道を建物の中央に設定できないことになる。

SB340は、遺構のうえから、土間か床張りかを特定することはできないけれども、建物の周囲に雨落溝が遺存するため、大きな削平を受けているとは考えがたい。しかし、床面にあたるような硬質の面は認められず、また、土間で礎石上に間仕切りの柱をおくのであれば、何らかの痕跡が残るそうだが、そうしたものもない。建物内部を掘りくほめて柱を立て、その後やや軟質の整地土を積むという建設工程も考えあわせると、痕跡を残しにくい転ばし根太程度で床を張った建物を想定するのが妥当だろう。そして、床上に間仕切りの柱を立てたと推定しておきたい。細長い建物の内部を一室の空間として、僧侶が雑居しているという姿は、やはり想

床張りか



Tab. 15 文献史料にみえる僧房の規模

寺名	大房				中房				小房				備考
	数	長	広	高	数	長	広	高	数	長	広	高	
大安寺	2	274.5尺	39尺	10.5尺	2	274.5尺			1	100尺	12尺	9尺	東西房南列 東西房北列 北房
	2	245尺	39尺	10.5尺	2	291尺	30尺	11尺	1	291尺			
	2	125尺	39尺	10.5尺	1	270尺	30尺	11尺					
興福寺	2	209尺	45尺	16.6尺					2	209尺	15尺	12尺	東・西僧房 北僧房
	1	408尺	45尺	16.6尺					1	408尺	15尺	12尺	
元興寺	2	12房							2	12房			東室南階・北階 西南行・西北行 新房
	2	10房							2	10房			
									1	18間			
法隆寺	1	175尺	38尺										
	1	181尺	38尺										
	1	155尺	32尺										
	1	106尺	38尺										
西大寺	2	70尺	40尺						1	45尺	16尺		十一面堂院
									1	30尺	16尺		
	2	90尺	40尺						1	56.5尺	16尺		四王院
	1	57尺	36.07尺						1	56.5尺	14尺		
	1	90尺	27尺						1	90尺	12尺		

文献史料

- 『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』：房名は一部推定
- 『興福寺流記』
- 「東南院文書・長元8年(1035)検損色帳」『平安遺文』551
- 『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』
- 『西大寺資財流記帳』：一部を大房・小房に分類

- \*大安寺東西大房は、資財帳には「広二丈九尺」とあるが、発掘調査の結果、三丈九尺の誤記であることが判明している。奈良市教育委員会『史跡大安寺旧境内 I』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第1冊、1997年。
- \*東南院文書の検損色帳は、『平安遺文』では東大寺のものとするが、鈴木嘉吉により元興寺に関する記事であることが証明された(『奈良時代僧房の研究』奈文研学報第4冊、1957年)。

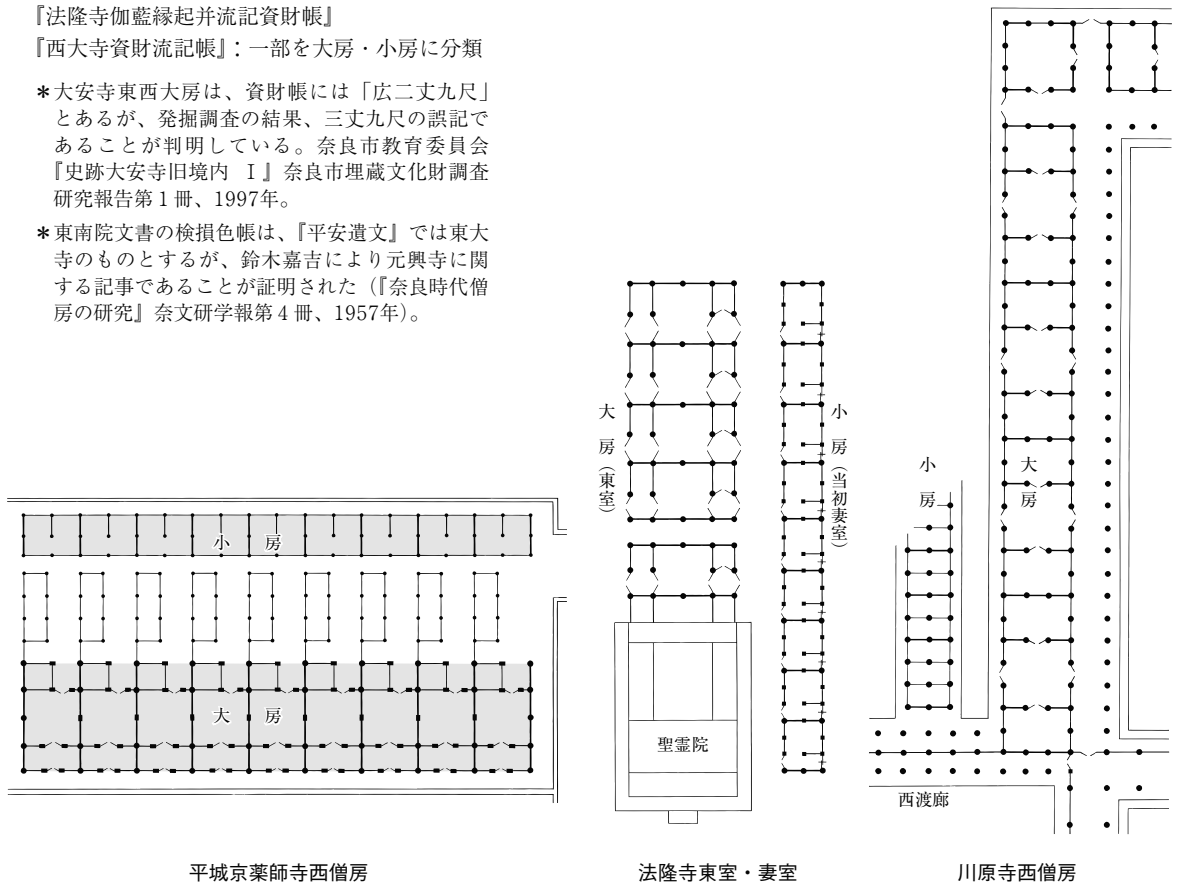


Fig. 112 大房・小房の類例 1:800

像しにくいと思う。

**SB340とSB400の関係** SB340とSB400は南北に並立し、大型の柱掘形をもつ東西に長い建物という点で共通するが、柱掘形の形状や掘削方法が異なっており、梁行の柱間数や桁行の柱間寸法にも差が認められる。この柱間寸法はSB260とも一致せず、すべてを同時造営とみるには疑問がある。ただ、これらの配置には計画性が認められることから、先に全体の配置計画があり、それに基づいて順次建設が進められたと考えるのが妥当だろう。

ところで、8世紀の官寺における僧房は、講堂の東・西・北を取り囲むように配され、三面僧房を構成するのが基本形と推定されている。そして、平城京薬師寺西僧房の発掘例<sup>27)</sup>のように、梁行の大きな二面廂をもつ大房と、梁行の小さな身舎だけの小房（小子房）の柱間をそろえて並立させ、一体として使ったようである。法隆寺東室と妻室も、そうした大房と小房の関係にあるとみてよい<sup>28)</sup>。また、文献史料でも、大房・中房・小房の桁行全長を同一とする例が多いことが判明している（Tab.15）。

大房と小房  
ではない

一方、SB340とSB400はいずれも身舎だけの建物で、梁行規模に差がなく、そのうえ桁行は全長のほか、個々の柱間寸法も異にしている。したがって、両者の間に、8世紀の大房と小房の関係を想定することはできない。

以上、吉備池廃寺の僧房は、いくつかの点で8世紀の寺院の僧房の特徴とは異なる点が認められる。これらが、7世紀中頃まで遡る一般的な様相なのか、吉備池廃寺（=百済大寺）独自のものなのかは、類例の増加を待って判断する必要があるが、僧房の建物形式やその発展過程を究明するうえで、貴重な遺構であることは間違いなさだろう。

- 1) 奈文研『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年。
- 2) ここでは、推古天皇が豊浦宮に即位した592年から、694年の藤原遷都までを飛鳥時代と呼ぶこととする。以下同じ。
- 3) 村田健一「古代建築における建物規模・構造と部材長」『年報1999-I』。
- 4) 山田寺金堂と同様の柱配置をもつものに、夏見廃寺金堂（三重県名張市、7世紀末）、穴太廃寺再建金堂（滋賀県大津市、7世紀後半）がある。このほか、組物を放射状に配したと推定される正家廃寺金堂（岐阜県恵那市、8世紀前半）の例もあるが、柱間を広くすると軒桁を受ける支点間の距離も広くなり、大建築には向かない構造と考えられる。
- 5) 村田健一は、山田寺金堂式の柱配置を生み出した要因を、安置仏の大きさに求めている。村田健一「山田寺金堂式平面建物の上部構造と柱配置の意味」『紀要2001』。
- 6) 「隅一組物」とは上野邦一が提案した造語で、隅柱上の組物を隅行き方向にしか出さない形態の組物をいう。上野邦一「隅一組物の建物について」『建築史学』第8号、建築史学会、1987年。
- 7) 力のかかる力肘木の断面欠損を極力少なくするために、その位置を壁付きのものより高くすることから、隅柱位置では物理的に隅行一方向にしか組物を出せない、という。村田健一「山田寺金堂式平面建物の上部構造と柱配置の意味」前掲註5）。
- 8) 裳階用の小型瓦を用いた例として本薬師寺（橿原市城殿町）および平城京薬師寺があるが、それ以外に裳階用の小型瓦の存在を確認できる明確な事例はない。よって、裳階をもつ場合であっても、裳階用の瓦が別につくられたとは断言できない。
- 9) 寄棟造では、隅木が大棟の位置までのびるため、隅木尻（頂点）を支持する束が必要となり、隅木尻の位置に梁が架からなければならない。隅木は45°方向に納まるから、梁行の柱間寸法は桁行の柱間寸法にほぼ反映されることになる。一方、入母屋造では隅木が棟までのびないため、せいぜい廂の間を正方形として、隅木が納まればよい。屋根と柱配置の関係については、村田健一「奈良時代仏堂建築の平面（柱配置）と屋根形式－寄棟造と入母屋造について－」（『年報2000-I』）参照。
- 10) 『藤原概報9』（1979年）では、「現基壇面から1mほど」の深さがあると記すが（44頁）、実測図

で確認すると、これは現存する基壇版築土上面からの深さを意味している。

- 11) 保井芳太郎『大和上代寺院志』大和史学会、1932年、第59図。
- 12) 香芝市教育委員会『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 5』1996年。山下隆次「尼寺廃寺の発掘調査」『仏教芸術』235号、毎日新聞社、1997年。なお、尼寺廃寺の塔基壇は、最大でも一辺13.8mであり、山田寺の塔心礎は1.8m四方程度で、塔基壇の一辺は約12.8mである。ここから、心礎の大きさは、塔自体の規模とは必ずしも関係しないことがわかる。
- 13) 奈良県教育委員会『重要文化財久米寺多宝塔修理工事報告書』1986年、4頁。
- 14) 尼寺廃寺の塔では、基壇周囲の礎敷や基壇上の12基の礎石が遺存し、基壇上面は礎石上面より若干下に想定されている。この場合、基壇高は約1.4mとなり、心礎上面は基壇上面から1.2mの深さに位置することになる。香芝市教育委員会『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 5』前掲註12)。
- 15) 『藤原概報 9』1979年、45頁。
- 16) 小島俊次・岡田英男・泉森 皎「東大寺西塔院の緊急調査」『奈良県文化財調査報告書』第8集、奈良県教育委員会、1965年。西塔基壇の大きさは確認されたが、東塔については不明である。ちなみに、天沼俊一は、東西両塔の柱間寸法を復元したうえで、基壇を一辺89尺と想定していた（天沼俊一「東大寺東塔院及西塔院址」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第5回、奈良県、1918年）。
- 17) 文武朝大官大寺の塔は、基壇外装の施工前に焼亡したことが発掘調査で確かめられており、本来の基壇規模については不明である。基壇上では、心礎抜取穴のほか、方5間に復元できる礎石の据付穴や抜取穴を6箇所検出した。基壇は版築によって築かれているが、掘込地業はともなわない。版築土の縁辺部は約25°の傾斜面をなし、東辺と南辺は、後世の攪乱によって幅5～7mのテラス状となる。確認できる版築層の広がり、東西36.3m×南北37.3mにおよぶ。また、平面では検出していないが、版築の縁辺部には、基壇築成後に掘られ、短期間で埋没したと考えられる幅約80cm、深さ20～40cmの素掘溝がある。溝上には礎敷が残り、この上面から現存基壇上面までの高さは1.2mを測る。そして、基壇周囲の溝の内側に基壇縁を想定し、一辺35m、高さ2m近い基壇を復元する。塔の初重平面は一辺50尺、柱間10尺等間とみる（『藤原概報 9』1979年、43～52頁）。しかし、基壇規模が方5間の塔に対して過大であることから、その後、佐川正敏は、基壇が小さくなる可能性も指摘したうえで、方7間説を提示した（『年報1998-II』65頁）。

一般の基壇構築例からみても、亀腹状に版築した端部をカットして基壇外装を施すのはごく自然な工法である。大官大寺塔の場合も、基壇縁が25°の傾斜をもつ状態で完成とされたわけではない。基壇外周の溝が、吉備池廃寺の金堂基壇外周の溝SD104・105・250と類似した性格の遺構となる可能性を含めて、基壇規模は35mより小さいと考えるべきだろう。ちなみに、概報の想定する基壇縁を起点に、版築土縁辺部における傾斜を、高さ約2mと推定される基壇上面まで延長し、そこで垂直にカットしたとすれば、基壇の一辺長は26.5m程度におさまることになる。

ただし、佐川がいうように平面を方7間とすると、塔の側まわりの礎石据付穴や抜取穴はすべて削平されたと思えばならなくなる。けれども、礎石がほぼ完存していた時期に岡本桃里が描いた礎石配置図（前掲註11）所収）は、やや信憑性を欠く部分もあるものの、方5間の塔跡を描いているとみてよい。最も荷重のかかる隅柱の礎石を、他の礎石の「五尺四方」より大きい「六尺四方」と記すのも、方5間とする想定を補強するものといえる。橿原神宮造営のため1889年に礎石が抜き取られたのち、1904年にこの遺跡を実測した本澤清三郎が、やはり方5間の礎石抜取穴の図を示している（本澤清三郎「廃大官大寺」『考古界』第4篇第2号、考古学会、1904年）点とあわせて、文武朝大官大寺の塔は方5間であった蓋然性が高いと考える。

- 18) 奈文研『北魏洛陽永寧寺』奈文研史料第47冊、1998年。
- 19) 張 慶浩「弥勒寺跡の発掘」『仏教芸術』207号、毎日新聞社、1993年。
- 20) 金 東賢「皇龍寺跡の発掘」『仏教芸術』207号、毎日新聞社、1993年。文化財管理局・文化財研究所『皇龍寺一遺跡発掘調査報告書 I-1』1984年。皇龍寺木塔は石列を三重にめぐらす基壇をそなえており、側柱から羽目石・葛石をもつ基壇（ここでは、かりに上成基壇と呼ぶ）までが3.4m、犬走り状にめぐらしたその外側の石列（同じく、中成基壇と呼ぶ）までが側柱から4.9m、さらにその外側の石列（下成基壇と呼ぶ）までが側柱から6.0mを測る。したがって、基壇規模は、下成基壇までが34.5m程度、中成基壇までで32m程度、上成基壇までで29m程度である。雨落溝がなく、軒の出は不明だが、階段は中成基壇縁付近まで出る。さらに下成基壇までを含むと軒の出がやや長すぎる感があるため、ひとまず中成基壇までを、われわれの概念に合致する基壇と考えておきたい。

21) 吉備池廃寺とほぼ同規模の基壇をもつ新羅皇龍寺の九重塔の高さが、『三国遺事』などに伝える225尺で、これを「東魏尺」(高麗尺)とみる金東賢の見解(金東賢「皇龍寺跡の発掘」前掲註20)が正鵠を射ているとすると、その高さは80.2mとなる(172頁)。吉備池廃寺についても、前節で述べたように、金堂と塔の間隔(心々間距離約84.0m)が塔の高さを反映しているとみれば、これに近い高さを想定することができる。なお、古代の九重塔や七重塔の立面を知るための資料としては、慶州南山の塔谷第2寺址の石刻(慶尚北道慶州市)がきわめて有効であろう(Fig. 113)。小場恒吉『慶州南山の仏蹟』朝鮮宝物古蹟図録 第二、朝鮮総督府、1940年、65~67頁、図版第82~84。国立慶州文化財研究所『慶州南山』2002年、63頁、図版406・407。

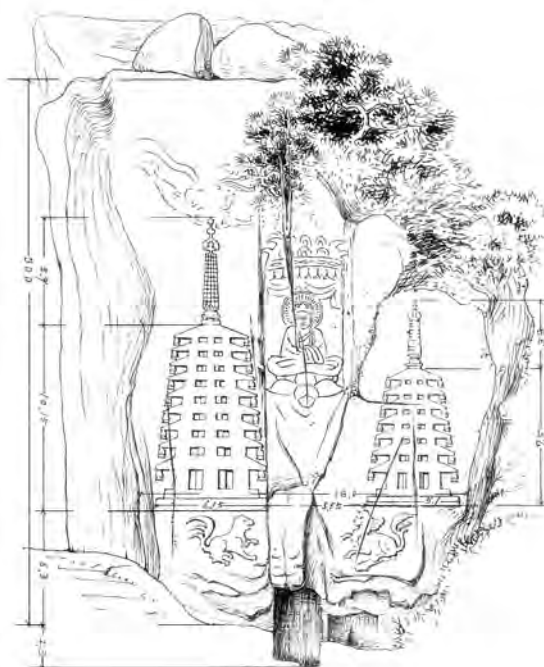


Fig. 113 慶州南山・塔谷第2寺址にある塔の石刻

(註21)小場恒吉『慶州南山の仏蹟』より転載

22) 巨大な塔の事例としては、ほかに東

大寺の両塔があり、天沼俊一は、東大寺東塔を方3間、柱間寸法17尺+21尺+17尺=55尺と報告している(天沼俊一「創立当時に於ける東大寺南大門、東西両塔院及び其沿革」『建築雑誌』283号、建築学会、1910年。天沼俊一「東大寺東塔院及西塔院址」前掲註16)。しかし、国分寺を含めた塔の一般的な柱間寸法はせいぜい12尺程度であり(宮本長二郎「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」『日本古寺美術全集』第2巻、集英社、1979年所載の一覧表参照)、東大寺東塔の柱間寸法は破格であって、一般的とは思われない。

また、天沼の東塔跡の実測は、礎石の失われた状況でその跡を測ったものであり、江戸初期の「東大寺寺中寺外惣絵図并山林」には、東塔が方3間、西塔が方5間に描かれている。この点、「杜撰を極め」と天沼も評したように、東塔と西塔で柱間が違うことは考えにくい、その後、西塔の基壇は一辺23.8mであることが発掘調査で確認されている(小島俊次・岡田英男・泉森 皎「東大寺西塔院の緊急調査」前掲註16)。とすれば、東西両塔ともに、基壇の出を13尺前後、柱間寸法を11尺前後とする、方5間の塔を考えるほうが自然ではなからうか。天沼が実測した塔跡や階段跡などは鎌倉再建時のもので、創建時とは平面を異にする可能性も否定できない。ちなみに、天沼の復元案は、各重の軒の出が25尺以上となるなど、奈良時代の建築としてやや想定しにくい寸法をとる部分がある。

23) 本澤清三郎「廢大官大寺」、『藤原概報 9』43~52頁(前掲註17)。しかし、発掘調査時点での礎石据付穴や抜取穴の遺存状況がかなり劣悪であったことを勘案すると、本澤が曲尺で54尺(柱間11尺)とした塔の初重平面を、50尺(柱間10尺)と断じてよいかは問題が残る。金堂に関して本澤の示した数値(桁行142尺×梁行59尺)が、その後の調査で判明した実寸(桁行153尺、梁行70尺)にくらべてかなり控えめであることを考えあわせれば、文武朝大官大寺の塔が、一辺55尺、柱間11尺等間であった可能性も十分に想定できるのではないか。

24) 金東賢「皇龍寺跡の発掘」、文化財管理局・文化財研究所『皇龍寺一遺跡発掘調査報告書 I-』前掲註20)。

25) 宮本長二郎「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」前掲註22)所載の一覧表による。

26) 奈文研『川原寺発掘調査報告』奈文研学報第9冊、1960年。

27) 奈文研『薬師寺発掘調査報告』奈文研学報第45冊、1987年。

28) 奈良県教育委員会『重要文化財法隆寺東室修理工事報告書』1961年。奈良県教育委員会『重要文化財法隆寺妻室修理工事報告書』1963年。

## 4 出土瓦をめぐる諸問題

吉備池廃寺からは、さほど大量の瓦が出土したわけではないが、その瓦はこの遺跡の年代や性格を考えるにあたってきわめて重要だ。以下、創建瓦を中心として、関連遺跡にも検討をおよぼしながら、吉備池廃寺の瓦がもつ意味を解き明かし、その歴史的意義に言及したい。

### A 創建瓦の系譜と年代

第IV章1で報告したように、吉備池廃寺の創建瓦は、軒丸瓦 I A・I B、軒平瓦 I A・I B (Fig. 114)、丸瓦 1 類、平瓦 1 類・2 類で構成され、ほかに若干の切り鬘斗瓦や面戸瓦がある。鴟尾や鬼瓦は、その出土を確認していない<sup>1)</sup>。吉備池廃寺の調査が始まって以来、その創建瓦については、各年度の『年報』および『紀要』で論じたほか、数多くの論考がある<sup>2)</sup>。

吉備池廃寺創建軒丸瓦の様式的・年代的な位置づけを明確に述べたのは、大脇潔だった。大脇は、吉備池廃寺創建軒丸瓦 2 種について、つぎの 3 つの特徴を捉えて山田寺金堂の創建軒丸瓦よりも先行すると認められる、と述べた。

1. 中房の断面形が低い半球形をしている
2. 蓮弁が長い
3. 外縁の重圏文は中央の 1 本が太く、両側の 2 本は細い

1 の特徴は、石神遺跡(明日香村飛鳥)で出土した素弁十弁蓮華文軒丸瓦(最末期の「花組」)から、いわゆる角端点珠型式の素弁八弁蓮華文軒丸瓦(奥山廃寺式)に登場し、瓦当径が大きい素弁八弁蓮華文軒丸瓦(船橋廃寺式)を経て、山田寺創建軒丸瓦に移行する最終段階の様相と評価した。2 の特徴は、船橋廃寺式軒丸瓦を受け継いだ大型の瓦当に対応する。そして、3 の特徴は山田寺創建軒丸瓦各種に受け継がれていく、と評価した<sup>3)</sup>。この位置づけはその後継承されていき、今のところ異論をはさむ余地がない。

また、軒平瓦の押し型(施文型)は、斑鳩寺(法隆寺若草伽藍、生駒郡斑鳩町)軒平瓦 213B と同じものながら、後にくわしく述べるように、型の傷が相当増えていて、明らかに後出する。はじめに型が製作された斑鳩寺では、213B を次のような軒瓦変遷のなかで理解した<sup>4)</sup>。

斑鳩寺創建期の軒平瓦には、手彫り忍冬唐草文軒平瓦と型押し忍冬唐草文軒平瓦の 2 種がある。手彫り忍冬唐草文軒平瓦は、施文の下描き線を入れるための型板を使用する「手彫り A」と、型板を使用しない「手彫り B」に分類できる。「手彫り A」は、型板を瓦当面にピンで留めて文様を下描きし、それに合わせて文様を彫る。忍冬唐草文は 7 葉構成をとる。「手彫り B」は、下描きなしに文様を彫っており、文様が大振りかつ比較的整っている「手彫り B I」と、瓦も文様もやや小ぶりで文様の粗雑な「手彫り B II」に細分できる。「手彫り B I」の忍冬唐草文は 7 葉構成が基本だが、「手彫り B II」のそれは 5 葉構成をとる。製作技法の違いなどからみても、斑鳩寺の手彫り忍冬唐草文軒平瓦が、A→B I→B II と変化したことは疑いない。型押し忍冬唐草文軒平瓦は、これら手彫り忍冬唐草文軒平瓦に遅れ、施文手法をさらにいっそう簡略化した型式と考えている。

斑鳩寺創建期の軒丸瓦は、弁端に点珠を配置する「星組」で始まる。飛鳥寺 VIII a・VIII b や豊

創建軒丸瓦  
の系譜

軒平瓦の型  
は斑鳩から

斑鳩寺軒瓦  
の変遷

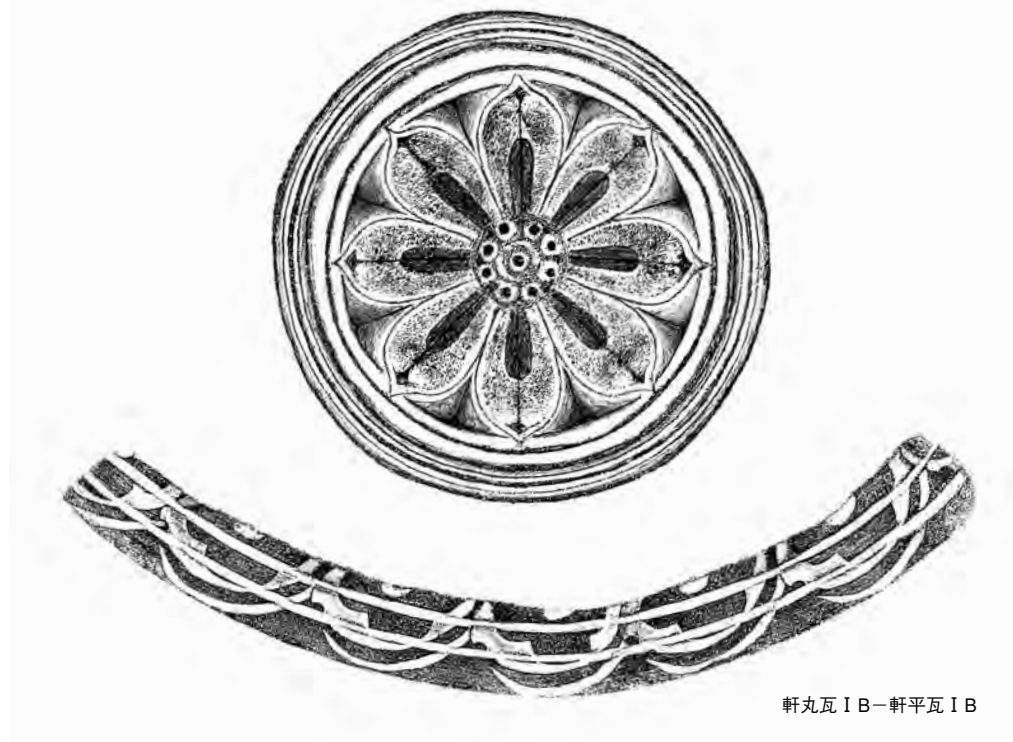
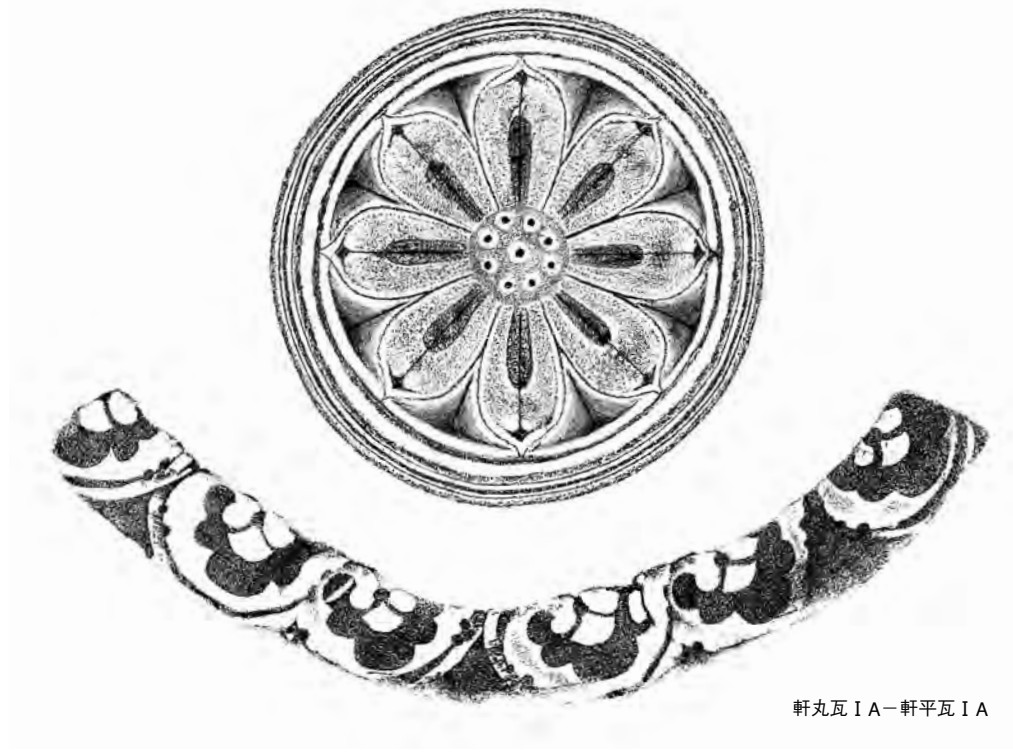


Fig. 114 吉備池廃寺創建軒瓦拓影 1:3

浦寺Ⅱ Ba・Ⅱ Bbと同範の素弁九弁蓮華文軒丸瓦（斑鳩寺3 Bb）および四天王寺同範の素弁八弁蓮華文軒丸瓦（斑鳩寺4 A）がそれだ。ついで、弁が大きく盛り上がる素弁八弁蓮華文軒丸瓦（斑鳩寺6 C・6 D）が登場し、この段階で丸瓦筒部先端を片ほぞ形に加工して接合する手法から、筒部先端凹面を斜めに削って接合する手法に遷移する。その次の段階で、弁端が幅広い素弁八弁蓮華文軒丸瓦（斑鳩寺7 A）が製作された。

斑鳩寺では、金堂の掘込地業を塔のそれが破壊していたことを確認しており、おのおのの整地土層等に含まれる軒瓦の型式を斟酌しつつ、①軒丸瓦3 Bb・4 A－「手彫りA」「手彫りBⅠ」（金堂創建軒瓦）、②軒丸瓦6 C・6 D－「手彫りBⅡ」（塔創建軒瓦）、③軒丸瓦7 A－型押し（213A・213B、講堂北方建物）の3組の軒瓦セットを復元した。そして、考証の詳細は略すが、①を法隆寺瓦編年飛鳥時代前期（592～622）、②・③を同・中期（622～643）に編年した。したがって、吉備池廃寺と同じ押し型を使う型押し忍冬唐草文軒平瓦（斑鳩寺213B）の年代は、630年代を前後する時期、といちおう考定することができる。

以上のように、軒丸瓦と軒平瓦の両者について、文様と製作技法および関連する軒瓦や遺跡との関係を勘案すれば、吉備池廃寺創建軒瓦は、おおむね630年代から640年代初頭に位置づける様式的特徴を備えていると判断してよいだろう。

創建軒瓦の  
年代観

## B 同範瓦出土寺院

次に、吉備池廃寺同範瓦および出土遺跡をとりあげて、吉備池廃寺の性格を考えることとしたい。吉備池廃寺創建軒丸瓦と同範の瓦を出土した遺跡には、木之本廃寺（橿原市木之本町）、四天王寺（大阪市）、楠葉平野山瓦窯（京都府八幡市・大阪府枚方市）、海会寺（大阪府泉南市）などがあり（Fig. 116）、軒平瓦の型は斑鳩寺からの転用だった。これらの寺との関係を同範・同型瓦を軸に考える。はじめに、軒丸瓦、軒平瓦、丸・平瓦にいたるまで同範および同型式の瓦がみつかった木之本廃寺をとりあげる。

同 範 瓦  
同 型 瓦

### i 木之本廃寺と出土瓦

木之本廃寺は、香具山の西麓にある式内社・<sup>うねおつたもと</sup>畝尾都多本神社近辺に位置する。このあたりから瓦が出土して寺院跡と推定されだしたのは、60年あまり昔のことだった。1937年、岩井孝次が都多本神社西側の水田から採集された軒丸瓦（吉備池廃寺軒丸瓦ⅠB）と軒平瓦（吉備池廃寺軒平瓦ⅠA）を紹介した。<sup>5)</sup>岩井は、これらの瓦について「飛鳥時代末期」とみなし、「寺名不明なるも紀寺址の北方三丁餘りの地点にして、瓦の出土量極めて少なきも多分当期の創立にかゝる寺址ならん」と推定した。また、同型とまでは判断していないが、法隆寺の型押し忍冬唐草文軒平瓦と大官大寺跡から出土したという同型品<sup>6)</sup>を類品としてあげた。

1970年に刊行された『飛鳥白鳳の古瓦』<sup>7)</sup>において稲垣晋也は、岩井が紹介した軒丸瓦を参考資料として再録し（同書293頁）、四天王寺同範品の「類型」とした。この時、稲垣は出土遺跡を「木之本廃寺」と命名しており、これがこの遺跡名の初見だろう。ただし、同書の「古瓦の分布形態」（280～290頁）には木之本廃寺は登場しない。

1983年、山崎信二は、「木之本廃寺」の名称こそ使っていないが、畝尾都多本神社西側から「吉備寺」にかけての一带を、舒明朝の百濟大寺の年代に合致する瓦が出土する地域として注目した。<sup>8)</sup>それを裏づけるかのように、同年におこなわれた畝尾都多本神社西側での家屋建築にと

もなう発掘調査（藤原宮第37-7次調査）では、南北方向の自然流路から吉備池廃寺創建軒平瓦と同型品が出土した（『藤原概報 14』1984年、30頁）。1983年のこの調査によって、岩井が想定したごとく、畝尾都多本神社付近に古代寺院跡が存在した可能性が高まった。

木之本廃寺  
の本格調査

1985年から1987年にかけて、畝尾都多本神社の南側で奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部庁舎建設にともなう事前調査がおこなわれた。その結果、藤原宮期前後から奈良時代あるいは中世にいたる各種遺構が発見されたが、木之本廃寺の存在を直接的に証明するような伽藍遺構はみつからなかった（『藤原概報 16』1986年、5～28頁、『同 17』1987年、8～29頁、『同 18』1988年、23～27頁）。しかしながら、瓦の出土量は、藤原京内としてはかなり多い<sup>9)</sup>。

木之本廃寺  
出土軒瓦

この調査では、吉備池廃寺の創建軒丸瓦（I A・I B）と創建軒平瓦（I A・I B）が総計63点（1983年調査分を含む）出土した。軒丸瓦 I Aが11点、軒丸瓦 I Bが14点、種別不明6点。軒平瓦は、重弧文のない I Aが25点、重弧文を重ねる I Bが4点、種別不明は3点だった。

調査地が藤原京内でも宮に近いので、出土した瓦すべてが木之本廃寺所用か問題はありますが、軒丸瓦はほかに、奥山廃寺ⅧAと同範の山田寺式、小山廃寺同範の紀寺式（雷文縁複弁八弁蓮華文）および6233Bb（藤原宮とも同範）、長林寺（北葛城郡河合町）同範の法隆寺式、藤原宮同範の6273B、6274Aa、6276C・G、文武朝大官大寺同範の6231A・Cがある。

軒平瓦は、四重弧文が数種あるほか、法輪寺同範の均整忍冬唐草文（「池上」刻印付き）、同範例のない均整忍冬唐草文、久米寺および藤原宮同範の6561A、藤原宮同範の6641C、6643C、6647A、文武朝大官大寺同範の6661Bがある。このほか、夏見廃寺と同型の磚仏が出土した。

吉備池廃寺同範の軒丸瓦2種は、丸瓦部が瓦当裏面の高い位置にあり、凹面を大きく削って楔形に加工して接合する。削っただけのものと、そこに斜めあるいはタテのキザミを入れるものがある。瓦当裏面は平坦な個体と中高にふくらむ個体とがあり、吉備池廃寺 I B同範品に後者の例が目立つ。なかには回転ナデの痕跡を残す個体もある。木之本廃寺出土例と吉備池廃寺出土例を比較すると、両者は範傷が一致するばかりか、範傷の大小あるいは多寡でも区別できず、胎土や焼成の具合もまったくかわらない。ことは軒平瓦でも同じだ。

吉備池廃寺  
の瓦と同一

丸瓦は、吉備池廃寺で設定した丸瓦1類A・Bが両者ある。平瓦も1類と2類A・B・Cが揃って出土した。平瓦1類の完形に近い資料の法量は、全長45.5cm、狭端幅33cm、広端幅35～36cm（推定）、厚さ2.9cm、重量約8kg（推定）ある。

このように、二つの遺跡から出土する共通の瓦は、一つの瓦窯から同時に二カ所に供給されたか、一方から他方へと移送されたかのどちらかの状況を考えざるをえない。

なお、藤原京内では、香具山北西麓一帯以外にも、吉備池廃寺と同じ型押し忍冬唐草文軒平瓦が見つかる地域がある。それは、藤原宮跡南方の日高山（橿原市上飛驒町）周辺だ。1975年、日高山北麓での調査（藤原宮第17次調査）で、型押し忍冬唐草文軒平瓦が2点出土した（『藤原概報 6』1976年、10～15頁）。忍冬唐草文はすべて下向きに施文し、重弧文は重ねない（吉備池廃寺軒平瓦 I A）。その後、1988年におこなった日高山西南麓の調査（藤原宮第54-19次調査）でも1点が出土している（『藤原概報 19』1989年、33～40頁）。軒丸瓦は出土していない。

日高山周辺  
にも同型瓦

## ii 軒丸瓦の同範例

木之本廃寺以外で、吉備池廃寺創建軒丸瓦と同範品を出土した遺跡としては、四天王寺とその瓦窯・楠葉平野山瓦窯、そして海会寺が知られている（PL.35）。



**四天王寺** 吉備池廃寺創建軒丸瓦と同範の瓦は、四天王寺第Ⅱ期（7世紀第2四半期末から7世紀後半）に編年されるNMⅡa1とNMⅡa2の2種<sup>10)</sup>。四天王寺NMⅡa1が吉備池廃寺軒丸瓦ⅠAと、四天王寺NMⅡa2が吉備池廃寺軒丸瓦ⅠBと同範だ（PL.35-1・3）。

現在、四天王寺宝物館にはNMⅡa1が3点、NMⅡa2が1点所蔵されている。いずれも瓦当文様はシャープで、外縁や中房蓮子などには瓦範の彫り直し痕跡は認められない。ただし、吉備池廃寺ⅠAと四天王寺NMⅡa1を比較すると、明らかな範傷の拡大は認めがたいものの、木目の浮き上がりが多くなっていることから、四天王寺例が後出すると判断できる。一方、四天王寺NMⅡa2については、範傷や瓦範の状況から先後は判別できなかった（PL.35-7・11）。瓦当厚はそれぞれ2cm前後しかなく、吉備池廃寺例より薄い。

四天王寺の  
同範軒丸瓦

NMⅡa1は製作技法と胎土が微妙に違う2種がある。瓦当面をほぼ完全に残す2点（『聚成』10・11・67頁の47・49、PL.35-1は67頁47）は、丸瓦先端凹面寄りを軽く斜めに削り、削った面に斜めやX字状のキザミ目を付けて接合する。その際、支持ナデつけはおこなわない。瓦当裏面は、全体を入念な不定方向のナデで平坦に仕上げ、下半周縁は軽くつまみあげるようにナデる。外縁は剥離している部分が多いが、残存部では圏線が明瞭に残る。ただし、外縁幅を吉備池廃寺や木之本廃寺例より5mmほど狭く仕上げているため、外側の圏線は充分に表出されていない。この2点はきわめて精緻な胎土に雲母の微粒子を含むのが特徴的で、これは楠葉平野山瓦窯出土例と共通する。もう1点（『聚成』67頁48）は、丸瓦接合時に支持ナデつけをおこなう。こちらの胎土には雲母の微粒子が含まれていない。

NMⅡa2は、瓦当下半部のみが残存する資料（PL.35-3、『聚成』67頁46）のため、丸瓦接合手法はわからない。瓦当裏面には丸瓦接合前に板状工具で回転ナデをおこなった痕跡が確認でき、わずかながら裏面中央が高くなる。下半周縁はNMⅡa1同様、軽くつまみあげるようにナデる。胎土には雲母の微粒子<sup>11)</sup>を含んでいない。

四天王寺NMⅡa1とNMⅡa2には、粘土板桶巻四枚作りの三重弧文軒平瓦がともなう。

**海会寺** 海会寺創建軒丸瓦ⅠAが、吉備池廃寺軒丸瓦ⅠBおよび四天王寺NMⅡa2と同範<sup>12)</sup>（PL.35-2・8・12）。海会寺ⅠAを瞥見したところ、大きくわけて、瓦範に彫り加え（改範）をおこなうものと、それ以前のものが存在することを確認した。改範以前のものも、中房面の同心円状のくぼみが吉備池廃寺および四天王寺と共通しているが、外縁に新たな範傷が認められるので、3遺跡のなかでは最も後出することは明らかだ。

海会寺では  
改範あり

改範後の製品は、中房蓮子を深く彫り加え、それ以前より中房蓮子が3mmほど高くなる。このため、瓦当面全体に同時に粘土を詰め込むのではなく、まず、蓮子の一つ一つに小片の粘土を詰めて、蓮子をよりよく表出させようという工夫のあとが見られる（PL.35-8）。

瓦当厚は、改範前のもので2.7cm前後、改範後のものは2.0～4.0cmある。後者は、薄手と厚手にわけることができる。

丸瓦部は、広端を凹凸両面から削って接合する。接合時には支持ナデつけをおこなうものと、おこなわないものがある。前者は改範後の厚手のものに多くみられ、後者は改範前のものや改範後の薄手のものに多い。

瓦当裏面は、ユビまたは板状工具によって入念にナデ仕上げするものがほとんどだが、なかには、丸瓦接合前に、裏面全体を板状工具を使って回転ナデ調整して平滑にするものもある。



面)が破損し、三角形の傷となる。また、傷Bが拡大し、太くかつ深くなる。傷Cに大きな変化はない。

このほかに、時計回りに巻き込む蔓の頂部には斜めに走る傷があり、傷Bの右側にも木目と直交する傷がある。また、傷A・Bと平行する木目のような小さな傷が、蔓右側の結節の上下や忍冬唐草文先端などにみえる。しかし、これらの傷は、第1段階と第2段階の間で顕著に拡大する様子を見せない。

**吉備池廃寺と木之本廃寺** 吉備池廃寺あるいは木之本廃寺から出土する軒平瓦の型にも、傷A・Bを確認できる。よって、両者同一は間違いはない。しかし、こちらには斑鳩寺例にはない大きな傷がある。

大きな傷が  
発 生

もっとも目につくのは、蔓の左右にある結節外側に現われる傷だ。傷が蔓の文様と同じ深さに達しているため、結節の外側の輪郭線が失われてしまっている。忍冬唐草文から右に延びて蔓にとどく傷は、斑鳩寺例ではかすかな木目状にしかみえなかったものが、明瞭な幅をもった傷として存在する。さらに、型の右下隅を削って外周を丸くする。

以上のように、吉備池廃寺軒平瓦I A・I Bの忍冬唐草文の型は、斑鳩寺213Bの型を転用したとみて間違いはない。しかしながら、両者を比較すると、施文手法と軒平瓦の製作手法に大きな違いがある。いずれもこれまでも指摘されていることだが、再度、まとめておこう。

施文手法の違いは、型を上下反転させるか否かにある。斑鳩寺例では、粘土板桶巻作りの粘土円筒を分割する前に、瓦当面を上に向け、型を上下反転させながら施文する。型は瓦当面を反時計回り方向に動く。この施文手法は、同文の斑鳩寺213Aでも同じだ。これに対して、吉備池廃寺・木之本廃寺例では、型は上下に反転せず、忍冬唐草文は常に下向きに表現される。施文時に型が動く方向は、斑鳩寺例と同じ反時計回り方向をとる。

施文手法に  
大きな違い

軒平瓦の形状を比較すると、斑鳩寺213A・Bでは型の大きさに合わせた瓦当厚(6.5cm前後)としているが、吉備池廃寺・木之本廃寺例では4.0cm前後しかないため、文様の上下が表現されない。また、吉備池廃寺軒平瓦I Bに特徴的な、型押し以前に重弧文を施文する手法は、斑鳩寺にはない。

製作技法の点でも、斑鳩寺例と吉備池廃寺例とでは違いがある。粘土板桶巻作りという点では共通するものの、瓦の縦断面形を比較すると異なる点がある。斑鳩寺例は、瓦当厚を大きくするために瓦当面近くの凸面が曲線顎風に湾曲するものがあり、それらは顎面を削って仕上げる。これは、とくに斑鳩寺213Aに多くみられるが、瓦当厚の小さな吉備池廃寺例では、このような仕事は必要ない。さらに、凹面の調整を比較すると、吉備池廃寺・木之本廃寺例のほうがはるかに丁寧な調整をおこなうし、焼きの具合にも違いがある。斑鳩寺例と比較した時、製作技法細部の違いは大きく、軒平瓦の型(斑鳩寺213Bの型)は吉備池廃寺創建にあたって斑鳩から移動してきたが、それに斑鳩の瓦工が付き添ったとは考えがたい。

斑鳩の瓦工  
は来たらず

#### iv 同範・同型瓦出土遺跡間の関係

吉備池廃寺の軒丸瓦と軒平瓦は、おのおの同範・同型瓦を出土する遺跡があり、相互の範傷や型の傷によって、吉備池廃寺→四天王寺(楠葉平野山瓦窯)→海会寺:軒丸瓦瓦範の移動、斑鳩寺→吉備池廃寺:軒平瓦文様型の移動、と理解した。いずれの場合も、瓦範あるいは押し型の移動はあったが、瓦工がこれに付き従うことはなかった。

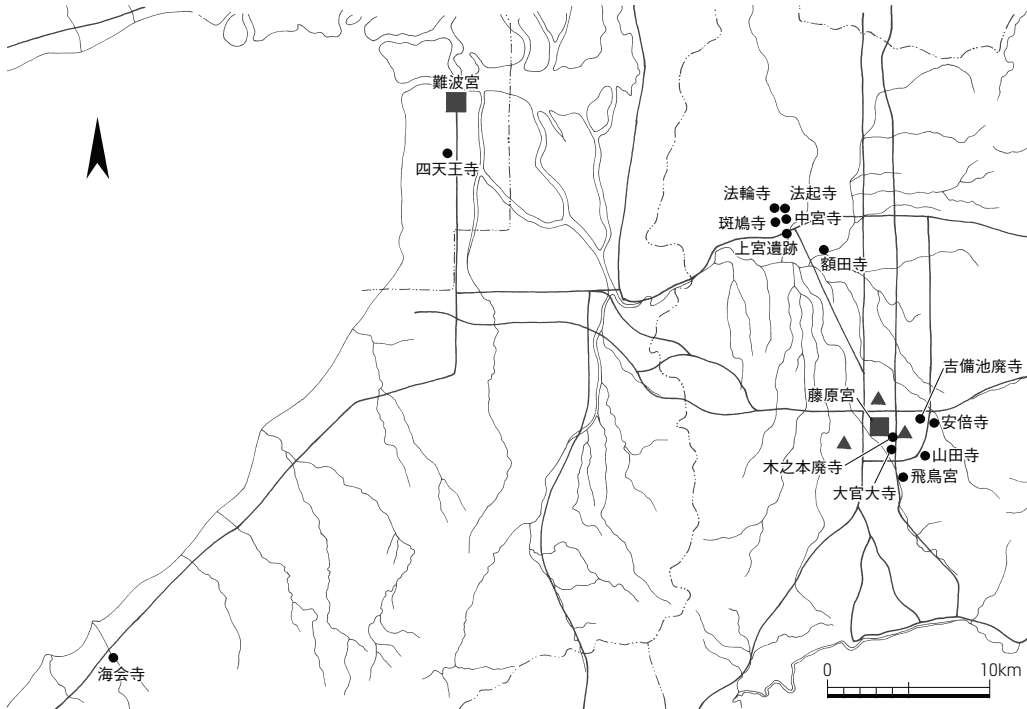


Fig. 116 関連遺跡地図

同範・同型  
関係の時期

吉備池廃寺の創建軒丸瓦の同範関係と、軒平瓦の同型瓦の関係は、まず、その関係が発生した時期に差がある。つまり、軒平瓦にみる斑鳩寺との関係は、吉備池廃寺創建直前ないし当初に発生した関係だが、軒丸瓦の同範関係は、吉備池廃寺造営が大略進んだか、完成後に発生しただろう。

吉備池廃寺創建軒平瓦の押し型が斑鳩寺から移動したことは、当然、斑鳩寺檀越の上宮王家との関連を考えないわけにはいかない。『日本書紀』舒明即位前紀には、推古天皇の崩御後、その後嗣が、田村皇子と山背大兄王との間でしばらく決着せず、おのこの皇子を推す群臣同士が対立するさまが描かれている。この対立は、山背大兄王を推挙した境部摩理勢が滅ぼされてようやく解消し、田村皇子が即位して舒明天皇となる。その後しばらく、山背大兄王の動静は史の上に記録を残さない。

上宮王家が  
押し型供与

推古30年(622)に厩戸皇子が亡くなったのちは、山背大兄王が上宮王家を伝領している。吉備池廃寺の造営を開始するにあたって斑鳩寺からおこなわれた援助が、瓦の型の供与という事績で今に伝えられているとすると、それは、山背大兄王の意志に発した、ある程度積極的な援助だったと推測する。

一方、吉備池廃寺軒丸瓦の瓦範が、四天王寺および海会寺へと移っていった時期は、孝徳朝に降るだろう。網伸也は、吉備池廃寺同範軒丸瓦を含む四天王寺第Ⅱ期瓦について、これを難波遷都にともなう四天王寺伽藍の整備と関連づけてとらえている<sup>15)</sup>。

難波遷都と  
四天王寺

『日本書紀』によると、孝徳天皇は、即位後半年たった大化元年(645)の12月にいたって難波に遷った(大化元年12月癸卯条)。その後、翌2年(646)正月にここで「改新の詔」を発し(大化2年正月甲子条)、3月には、東国国司に詔して処断をおこなう(同3月甲子条、辛巳条)。世にいう「大化の薄葬令」が出たのは、その3日後のことだった(同3月甲申条)。

このように、飛鳥を離れた難波の地で新たな施策がおこなわれるなか、大化4年(648)2月、

左大臣阿倍内麻呂（倉梯麻呂）が四天王寺に四衆を招いて、塔の内に仏像四軀を安置し、さらに  
 靈鷲山の像を造った（大化4年2月己未条）。この仏像が小四天王像だったことは、『太子伝古今  
 目録抄』（『提婆羅惹寺麻訶所生秘決』）の「塔内四天王事」<sup>16)</sup>に見える。

四天王寺へ  
 の仏像施入

また、皇祖母尊（皇極）は、白雉元年（650）に、丈六、侍侍、八部など三十六部の繡仏を作  
 らせ（白雉元年10月条）、翌2年（651）3月に完成している（白雉2年3月丁未条）。これが、のち  
 に平城京大安寺に伝来したことは、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』によって判明する。

そして、同年12月に、孝徳天皇は難波長柄豊碕宮に遷った。この宮殿は、翌白雉3年（652）  
 9月にいたって完成を迎え、そのありさまは、「ことごとくに論ふべからず」と評されるほど壮  
 麗なものだったらしい（白雉3年9月条）。

『日本書紀』孝徳紀に、仏像の施入を含む具体的な造営が記される寺院は、入滅した国博士  
 旻法師のために仏・菩薩像を造らせたという記事（白雉4年（653）6月条）<sup>17)</sup>を除くと、上記の四  
 天王寺と、皇祖母尊が繡仏を施入した寺、すなわち大安寺の前身にあたる百済大寺以外にない。  
 孝徳朝における四天王寺と百済大寺の位置づけがうかがえる。四天王寺第Ⅱ期瓦の意義もここ  
 にあったと推断してよからう。それは、難波長柄豊碕宮と不可分の仏教伽藍へと四天王寺が転  
 換した証だった。

では、もう一つの吉備池廃寺同範軒丸瓦をもった寺、海会寺はどうか。この寺に直接関わる  
 文献史料はほとんどない。『日本霊異記』中巻第22縁にみえる和泉国日根郡の「尽恵寺（盡恵寺）」  
 を「畫恵寺」の転写ミスとみて、「ガエジ」＝「カエジ」と想定することは無稽とはいえない部  
 分がある。だが、それと吉備池廃寺あるいは孝徳朝の四天王寺と同範の軒丸瓦が創建瓦とな  
 った海会寺との間には、埋めるべき懸隔が相当にあると判断せざるをえない。

吉備池廃寺と四天王寺あるいは海会寺との関係は、瓦だけからは導き出せない部分が多く存  
 在する。いずれにしろ、飛鳥とその周辺「山田寺式」軒丸瓦を創建瓦とする古代寺院で、大  
 和の範囲を超えた同範関係をもつ寺は、吉備池廃寺をおいて他にない。これは、この寺の性格  
 に大きく関わる特徴といって間違いないだろう。

## C 出土瓦の量的検討

吉備池廃寺から出土する瓦は、通常の古代寺院跡での発掘調査に比較すると、その量が極度  
 に少ない。そして、これこそが、この寺の移転を傍証する一つの材料とされてきた。<sup>18)</sup>では、瓦  
 が出土する宮殿跡や寺院跡あるいは官衙遺跡では、実際にどれぐらいの瓦が出土しているのか。  
 吉備池廃寺はそれと比べてどうなのか。この点を、近年の調査成果に基づきながら、具体的な  
 数値をあげて検討してみよう（Tab. 16）。分析手法は、平城京西隆寺（奈良市）の出土瓦を扱っ  
 た小澤毅にならった。<sup>19)</sup>

瓦出土量を  
 めぐる算数

### i 丸瓦と平瓦の比率

吉備池廃寺からは、総計2,649.4kgに達する瓦が出土した。丸瓦と平瓦の重量比は1：3.60。  
 ただし、当然のことながら、丸瓦と平瓦は1枚の重さが違うので、重量比はそのまま両者の個  
 体数比とはならない。小澤がおこなったように、丸瓦と平瓦各々について、1枚の平均重量を  
 算出し、それによって个体数（以下、「重量比換算个体数」）を計算する必要がある。

重量比換算  
 个体数

丸瓦は、その99%以上が創建丸瓦の1類と判断できる。<sup>20)</sup>丸瓦総重量の576.1kgを、丸瓦1類の

完形個体で計測した重量5.3kgで除せば、重量比換算個体数は108.70本となる。

個体数比の  
算出方法

同様に、平瓦も平瓦1類が90%を占めるから、そのなかで最も完形に近い個体の復元推定重量6.3kgを用いて、平瓦総重量2,073.3kgを除せば、重量比換算個体数は329.10枚という数がえられる。丸瓦と平瓦の個体数比は1:3.03となる。ただし、平瓦については、平瓦2類も創建期に使用された。2類は瓦の厚さが薄く、1枚の重量も軽い。吉備池廃寺の資料では重量を算定できないが、木之本廃寺出土例にほぼ全形がうかがえる資料（吉備池廃寺平瓦2類B）があり、それによると重量は約4.0kgと推算できる。平瓦1類と2類の比率を9:1と仮定した場合、平瓦の重量比換算個体数は次の式で求められる。

$$2,073.3\text{kg} \times (0.9 \div 6.3\text{kg} + 0.1 \div 4.0\text{kg}) = 348.018$$

これによれば、平瓦の重量比換算個体数は348.02枚となり、丸瓦と平瓦の個体数比は1:3.20とやや広がる。

ところで、木之本廃寺から出土した吉備池廃寺平瓦1類と同型式の瓦には、推定復元重量約8kgの例がある。この数値を使って同じ計算をおこない、平瓦の総重量を単純に8kgで除せば、259.16枚という数値がえられる。この場合、丸瓦と平瓦の個体数比は1:2.38。また、総重量の10%を平瓦2類として計算すれば、1類と2類あわせて285.08枚となり、丸瓦と平瓦の個体数比は1:2.62となる。

丸・平瓦比  
瓦葺を明証

以上のように、吉備池廃寺から出土した丸瓦と平瓦の比率として、1:2.62~3.34という数値をえることができた。この数値は、瓦葺建物に使われた瓦としてごく妥当なものと考えられる。ほかの例と比較してみよう。

平城京西隆寺では、数次にわたる発掘調査により、丸瓦3,994.5kg（破片数で23,777点）と平瓦13,283.5kg（同じく104,207点）が出土した。完形に近い個体による丸瓦と平瓦の平均重量は、丸瓦2.5kg、平瓦3.2kg。これをもとに重量比換算個体数を計算すると、丸瓦は1,598点、平瓦は4,151点と算出され、両者の比は1:2.60<sup>22)</sup>だった。

小澤も指摘しているように、この数値は、平城宮第二次大極殿院で佐川正敏が推計した丸瓦と平瓦の総量<sup>23)</sup>（丸瓦47,700枚、平瓦119,900枚）からえられる比率、1:2.51<sup>24)</sup>に近い。

これらの分析例と、吉備池廃寺の出土瓦が示す丸瓦と平瓦の比率は近似している。上記の二つの分析が対象としたのは、西隆寺の中樞伽藍と平城宮第二次（東区）大極殿であり、ともに瓦葺建物が並び建つ遺跡だ。したがって、吉備池廃寺から出土した丸瓦と平瓦は、瓦葺建物にのっていた瓦が遺棄されたものと判断してよい。さらに、飛鳥藤原地域で奈文研が調査した近年の例をみても（Tab.16）、出土量の多い寺院跡あるいは宮殿中樞部では、平瓦の丸瓦に対する重量比は、おおむね3を前後する数値を示している<sup>25)</sup>。これも、傍証としてよいだろう。

次に、吉備池廃寺出土瓦の量そのものが示す意味を考えてみよう。

## ii 丸瓦・平瓦総量2.65 t は多いか少ないか

吉備池廃寺各調査ごとに出土瓦の点数と重量を集計し、100m<sup>2</sup>（1アール）あたりの出土重量をみると、総平均では68.3kgだが、金堂周辺を調査した第81-14次調査は282.2kg、第105次調査でも106.6kgと3桁の数値がでていいる。この量は多いのか少ないのか。

単位面積で  
数百kgの瓦

山田寺では  
4 t の瓦

飛鳥藤原地域にある寺院跡の調査例をみると、1996年の山田寺南面回廊の調査（山田寺第10次調査）は、単位あたりの出土重量が頭抜けて大きく、4 t 近く（3989.7kg）の瓦が出土した。こ

Tab. 16 吉備池廃寺と飛鳥藤原地域の瓦出土量

遺跡・次数等	丸瓦		平瓦		瓦重量kg	調査面積m <sup>2</sup>	100m <sup>2</sup> 当瓦重量kg	平瓦重量 丸瓦重量	
	点数	重量kg	点数	重量kg					
吉備池廃寺	81-14	1,567	253.1	8,419	932.1	1,185.2	420	282.2	3.68
	89	5	7.4	379	30.9	38.3	351	10.9	4.17
	95	132	28.9	604	80.7	109.6	724	15.1	2.80
	105	1,062	182.8	5,212	603.9	786.7	738	106.6	3.30
	111	446	98.1	2,897	399.0	497.1	1,140	43.6	4.07
	(北区)	328	76.0	1,817	289.2	365.2	605	60.3	(3.81)
	(南区)	117	22.1	1,080	109.8	131.9	535	24.6	(4.97)
	奈文研合計	3,264	570.3	17,511	2,046.6	2,616.9	3,373	77.6	3.58
	-----								
	桜井市9次	26	2.5	328	17.3	19.8	239	8.3	
	桜井市11次	17	2.2	102	6.7	8.9	140	6.4	
	桜井市12次	3	1.1	22	2.7	3.8	125	3.0	
	桜井市合計	46	5.8	452	26.7	32.5	504	6.4	4.60
-----									
	総合計	3,310	576.1	17,963	2,073.3	2,649.4	3,877	68.3	3.60
-----									
本薬師寺	参道	21,060	2,596.3	65,471	5,271.1	7,867.4	558	1,409.9	2.03
	西塔	12,765	2,107.0	50,036	13,519.0	15,626.0	609	2,565.8	6.42
坂田寺	1995-1	1,298	216.8	3,913	705.4	922.2	58	1,590.0	3.25
	1996-1	1,554	154.8	12,453	651.1	805.9	120	671.6	4.21
飛鳥寺	1996-1	5,717	529.3	33,788	1,766.8	2,296.1	262	876.4	3.34
	1996-3	2,232	300.2	9,534	975.9	1,276.1	270	472.6	3.25
	91-8	2,461	339.2	7,866	805.5	1,144.7	70	1,635.3	2.37
	99-12	364	33.6	1,056	92.3	125.9	39	322.8	2.75
山田寺	10	4,748	1,592.4	13,533	5,190.1	6,782.5	170	3,989.7	3.26
川原寺	1996-1	5,443	1,206.7	18,622	3,332.4	4,539.1	155	2,928.5	2.76
石神遺跡等	110	45	5.5	200	16.0	21.5	440	4.9	2.91
	116	67	6.8	334	24.2	31.0	490	6.3	3.56
	103	26	1.9	128	7.9	9.8	120	8.2	4.16
	108-4	527	45.6	2,481	159.9	205.5	30	685.0	3.51
藤原宮大極殿院・朝堂院									
	100	12,701	1,477.9	52,591	4,475.1	5,953.0	2,070	287.6	3.03
	107	16,651	2,220.9	59,809	6,049.8	8,270.7	3,140	263.4	2.72
	117	14,246	1,554.5	67,522	4,775.2	6,329.7	1,700	372.3	3.07
藤原宮官衙	78	177	20.6	192	23.5	44.1	1,608	2.7	1.14
	79	19	2.7	77	7.4	10.1	1,320	0.8	2.74
	80	16	2.4	24	6.5	8.9	1,780	0.5	2.71
	82	23	2.3	107	10.8	13.1	1,800	0.7	4.70
	94	54	13.0	164	31.8	44.8	1,260	3.6	2.45
	102	24	3.9	10	0.5	4.4	495	0.9	0.13
	108-5	0	0	5	0.9	0.9	300	0.3	—
	108-8	15	2.1	33	7.2	9.3	350	2.7	3.43
	108-11	35	3.7	351	19.4	23.1	470	4.9	5.24
	108-10	64	21.0	308	88.8	109.8	225	48.8	4.23
藤原京	81-1	36	6.7	126	21.2	27.9	428	6.5	3.16
	81-8	19	2.6	176	29.3	31.9	667	4.8	11.27
	88	6	0.6	43	1.9	2.5	650	0.4	3.17
	90	10	1.7	41	5.2	6.9	1,260	0.5	3.06
	101	10	0.7	45	5.5	6.2	1,663	0.4	7.86
	109	18	4.9	81	7.6	12.5	2,600	0.5	1.55
	113	103	14.4	610	105.6	120.0	2,080	5.8	7.33
	115	68	13.5	154	25.2	38.7	3,000	1.3	1.87

の調査では、回廊部材が倒壊したままの状態で見られ、屋根瓦も落下状態で出土した。とくに、東から2間目あたりでは、まず棟が落下し、北流れの屋根は「く」の字におれて崩壊した状況が遺存していた。これは、瓦葺建物が崩壊したのち、さしたる取りかたづけがおこなわれることなく埋没した例といえよう。<sup>26)</sup>

古代寺院では瓦1 t 超

それに次ぐのは、寺域西半分各所を総延長250mにわたってトレンチ調査した1996年の川原寺調査。回廊西北隅から西に延びる複廊南側の焼失落下瓦層、その南方の築地塀周辺あるいは食堂推定地周辺から大量の瓦が出土し、平均すると100㎡あたり約3 tの出土量となった。<sup>27)</sup>

西塔の西南部と南面回廊の一部を対象とした本薬師寺の調査（本薬師寺1995-1次、1996年）では、数基の瓦溜や雨落溝から多量の瓦が出土した。<sup>28)</sup> これらは西塔と南面回廊に使われた瓦で、100㎡あたり約2.5 tの計算になる。この3例が100㎡あたり2 tを越える。

これ以下では、瓦葺の北面大垣とその瓦が埋没した北外堀を調査した飛鳥寺の例（第91-8次、1998年）が約1.6 t、回廊周辺でおこなった坂田寺の調査（坂田寺1995-1次、1995年）が約1.6 tで、瓦溜などがみつかった本薬師寺参道の調査（本薬師寺1994-2次、1995年）の約1.4 t、飛鳥寺西門の調査（飛鳥寺1996-1次、1996年）の約0.9 tが続く。1995年より古い調査では、整理段階で丸・平瓦の点数や重量を計量していないためデータがないが、飛鳥藤原地域の古代寺院では、100㎡あたり1 tを越える瓦が出土する状況が観とれる。<sup>29)</sup>  
<sup>30)</sup>  
<sup>31)</sup>  
<sup>32)</sup>  
<sup>33)</sup>

官衙や宅地の瓦は微量

これに対して、瓦葺建物がほとんどなかった藤原宮の官衙地区や藤原京内の調査では、100㎡あたりの出土瓦はkg重量1桁台にとどまっている。50kg近い数値を示す調査が1例あるが、これは藤原宮の西面外濠を一部調査した結果だ。<sup>34)</sup> 瓦葺建物のない宮殿の官衙地区や京内宅地と、寺院跡の出土瓦重量との懸隔は甚だしいものがある。吉備池廃寺でも、桜井市教育委員会が単独でおこなった寺域周辺部の調査をみると、100㎡あたり3 kgから8 kgほどの瓦しか出土していない。これは、藤原京内の出方とよく似ている。

では、吉備池廃寺金堂周辺の100㎡あたり280kg余りの出土瓦、第105次調査の107kgほどの出土瓦が意味するものは何だろう。

100㎡あたりの出土瓦がkg重量3桁の数値を示している例を探すと、西面回廊を調査した坂田寺の例（坂田寺1996-1次、1996年、672kg）、西面大垣や講堂の東西両側などを調査した飛鳥寺の例（飛鳥寺1996-3次、1996年、473kg）、寺域東辺を調査した飛鳥寺の例（第99-12次、2000年、323kg）などがある。飛鳥寺の2例は、前者では寺域外を含んでいたり、後者は顕著な遺構のない地点だったりして、数値が低くなったものと推定する。坂田寺の例は、回廊自体が奈良時代に創建された檜皮葺建物で、下層部分の調査を広範にはおこなわなかった結果とみてよい。

藤原宮中枢に似た状況

それよりも注目すべきは、藤原宮中枢部の調査例だろう。近年おこなわれた3回の調査は、第100次調査が内裏東南隅から朝堂院東北隅の回廊部分を含み、第107次調査は朝堂院東第一堂と朝堂院東面回廊、第117次調査では大極殿院東面回廊を調査した。これらは、いずれも、藤原宮を代表する瓦葺礎石建物を含んでいる。しかしながら、出土瓦の量は寺院跡の例に比べてはるかに少ない200kg台から300kg台という数値を示している。<sup>37)</sup> 100㎡あたり4 tという膨大な数値を示した山田寺南面回廊の例が、建物倒壊後ほとんど手つかずの状態に残った瓦の量とみなした場合、藤原宮中枢部の調査例が示す瓦の量は、その1割に満たない。これには、和銅3年（710）の平城遷都による建物の移建と、それともなう屋根瓦の移送が関連していると考え



るのが当然だ。屋根瓦の大半が移送され、1～2割の再用不可能な瓦が現地に遺棄された状態を示しているに他ならない。

藤原宮中枢部から出土する瓦の量について、このような推論が許容されるのならば、吉備池廃寺金堂周辺の調査区（第81-14次調査や第105次調査）から出土する瓦の量も、本来、瓦葺建物に使われた瓦のうち、再利用できない瓦が現地に残された状況を反映したものだ、と解釈できる。吉備池廃寺と藤原宮中枢部が、単位面積あたりほぼ相似た量の瓦を出土するのは、二つの遺跡とも瓦葺建物があつたが、それらがのちに他所に移された、という共通した歴史的経過をたどったことの結果だったと推断する。

瓦葺建物が  
移された

## D 安倍寺・額田寺との関係

吉備池廃寺と近接して立地する安倍寺（桜井市阿部）、そして『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』が百済大寺の前身寺院とする巖凝道場に擬せられる額田寺（額安寺、大和郡山市）は、同範瓦こそ出土していないが、吉備池廃寺の性格と歴史的意義を考察するうえで重要な位置を占めていると考える。二つの寺院について、吉備池廃寺との関連から述べてみたい。

### i 吉備池廃寺と安倍寺

吉備池廃寺に最も近接した古代寺院といえば、安倍寺をおいてない。安倍寺の創建軒丸瓦は、山田寺式軒丸瓦があり、ほかに重圏文縁の素弁軒丸瓦（弁中に細い稜線がある）や、素文縁の単弁軒丸瓦があつて、吉備池廃寺と類似している。それもあつて、後述するように、安倍寺と百済大寺あるいは吉備池廃寺との関係に論及した考察がいくつか提示されている。ここでは、まずそれらについて検討を加えたのち、吉備池廃寺と安倍寺との関係について考察する。

**安倍寺の概要** 安倍寺は、『東大寺要録』巻第六 末寺章第九に「崇敬寺 宇安倍寺 右安倍倉橋大臣之建立也」とあつて、寺号を崇敬寺といったらしい。寺伝に、大化元年（645）僧道昭開基とするが、信じがたい。「安倍倉橋大臣」は、『日本書紀』孝徳即位前紀皇極4年（645）6月庚戌条にみえる「阿倍内麻呂臣（左大臣）」、辛亥条の「阿倍倉梯麻呂大臣」、つまり阿倍内臣鳥の子、麻呂にあたる。阿倍内麻呂は同年（大化元年）7月戊寅条（「阿倍倉梯万侶大臣」）、己卯条（「阿倍倉梯麻呂大臣」）、大化4年（648）2月己未条（「阿倍大臣」）、4月辛亥条（「左大臣」）に登場し、大化5年（649）3月辛酉条に薨去が記される。内麻呂の死後、阿倍氏は布勢・引田・許曾倍などの枝氏にわかれ、斉明から天智の代には阿倍引田臣比羅夫が、持統の代には布勢朝臣御主人が氏の主となった。安倍寺の遺跡は古くから寺跡として知られ、『大和志料』（下巻、奈良県教育会、1914年、188頁）も、周辺にある古墳との関係などから、阿倍氏の氏寺とする。

安倍寺の  
発願者

ここで、ことさらに安倍寺を取り上げるのは、安倍寺発願者との伝承がある阿倍内麻呂について、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』に百済大寺造寺司任命の記録が残っており、吉備池廃寺との間には、近接して立地するという地理的な関係だけでなく、歴史的な関係をも想定しうるからだ。

安倍寺跡は、1965～1967年に木材工業団地区画整理にともなう発掘調査がおこなわれ、金堂・塔・回廊などが確認された。金堂は、基壇規模約23m×約18m、塔は基壇一辺約12m、回廊は北面と西面が確認された。金堂を東に、塔を西におき、これを回廊が取り囲む「法隆寺式伽藍配置<sup>38)</sup>で、講堂は回廊の外にあつたらしい。調査の結果をうけて、伽藍中心部は史跡指定さ

安倍寺の  
伽藍配置

<sup>39)</sup> された。その後、1980年代後半以降、指定地周辺の開発が進んだために発掘調査が増加し、それにともなって新たな知見が加わっている。

1989年には、伽藍の西方から、東側を石積で護岸した幅2.5mの溝がみつかった。<sup>40)</sup> この溝は、翌年の調査でもその延長部が確認され、推定南北長が110mをこえる。<sup>41)</sup> これに対して、塔の南方では区画施設が発見されなかった。<sup>42)</sup> これらの成果に基づき、清水真一は、寺域を一辺180～200mとみて、西面する「四天王寺式」伽藍配置を推定した。<sup>43)</sup>

安倍寺創建  
瓦の年代

安倍寺の創建軒丸瓦について、『安倍寺報告』は4型式5種類に型式分類し、2種ある九弁蓮華文軒丸瓦が単弁・素弁軒丸瓦の72%を占めることから、これらを創建瓦とした。そして、九弁蓮華文軒丸瓦が八弁蓮華文軒丸瓦よりも文様が「便化」している、とみたが、それ以上詳細な編年や年代観は述べられなかった。その後、とくにこの寺に関する論考は発表されず、安倍寺の創建年代を語るときには、山田寺とだいたい同じような時期、と解するのが一般的だった。<sup>44)</sup>

ところが、近年になっていくつかの論考が公表され、安倍寺の創建年代には諸説が登場している。以下、それらを順にみていこう。

菱田哲郎説

**安倍寺創建軒丸瓦に関する諸説** 1994年に菱田哲郎は、安倍寺の軒丸瓦を3種すなわち、A：重圏文縁単弁八弁、B：素文縁単弁八弁、C：素文縁単弁九弁、に分類し、AからB・Cへ変化するとみた。そして、安倍寺での「山田寺式」軒丸瓦採用の背景には、この様式を創出するにあたって阿倍内麻呂の関与が確認できると説いた。<sup>45)</sup> 菱田は、断定を避けながらも、安倍寺の創建を7世紀の中頃に近い時期と考えているようだ。

近江俊秀説

これに対して、近江俊秀はもっと新しいとみた。近江は、1997年に発表した論文で、<sup>46)</sup> 安倍寺創建軒丸瓦を、A：重圏文縁単弁八弁（菱田A・『安倍寺報告』3型式）、B：重圏文縁単弁八弁（『安倍寺報告』1型式）、C：素文縁単弁八弁（菱田B・『安倍寺報告』2型式）、D：小型の素文縁単弁八弁（『安倍寺報告』<sup>47)</sup>になし）、E：素文縁単弁九弁（菱田C・『安倍寺報告』4A型式）、F：素文縁単弁九弁（『安倍寺報告』4B型式）、に分類し直し、B種とD種を除いたA・C・E・Fの4種を安倍寺の創建軒丸瓦とした。<sup>48)</sup> そして、この順、つまりA種→C種→E種→F種、と変化するとみて、これらの軒丸瓦の製作技法を山田寺などの創建軒丸瓦と比較したうえで、安倍寺の創建を7世紀第4四半期と考えた。

その最大の根拠は、安倍寺A種が「天武朝の造営再開に伴い採用された（山田寺）C種から派生した可能性が強い」とこと、「技法的には山田寺C種よりもさらに後出する特色を示している」<sup>49)</sup> こと、さらにはC種・E種が外縁の重圏文を失っていることやその多くが先端未加工の丸瓦を接合すると観察した点にあった。この年代には、7世紀第4四半期と推定しうる田中廃寺（橿原市田中町）軒丸瓦I bの存在をも傍証として<sup>50)</sup>している。<sup>51)</sup>

年代の鍵は  
山田寺C種

菱田・近江とも、安倍寺A種を最古型式に位置づける点では一致し、これと類似すると考えた山田寺C種を年代推定の根拠とすることも共通する。二人の年代観に違いが生まれたのは、山田寺出土瓦の整理が進むなかで、山田寺C種の年代が変更された結果ともいえる。<sup>52)</sup>

それまで、山田寺の創建期（石川麻呂造営期、641～649年）と考えられていた山田寺C種は、造営過程のなかでも後半の造営再開期（661～685年）にその大半が製作・使用されたことが判明した。<sup>53)</sup> くわえて、安倍寺A種は山田寺C種と同範と判明した。近江は「A種については、他の不明寺院の瓦窯から少量安倍寺にもたらされた可能性」を想定していたが、それがいわば的

中したわけだ。そこへ、吉備池廃寺の調査成果が加わった。

近江はこの状況を受けて、新たな議論を展開しつつある<sup>54)</sup>。まず、安倍寺の軒丸瓦編年は再検討が必要だと訴え、かつて自らが田中廃寺を媒介として年代決定の根拠とした先端未加工の丸瓦接合手法について、「7世紀第4四半期まで年代を下げるのは無理がある」と訂正し、安倍寺の創建を7世紀第2四半期に近い時期まで遡らせる考えに変わったようだ。安倍寺と吉備池廃寺との伽藍配置の類似、そして百済大寺造寺司に任命された阿倍内麻呂の存在、といったことがその理由として述べられているが、発表要旨という形でもあり、意を尽くした議論とはなっていない。

以上のように、安倍寺の創建年代については、山田寺に近い7世紀中頃とする説と、7世紀第4四半期とする説の二つがあった。前者の説では、創建者は『東大寺要録』の伝承のように阿倍内麻呂による造営の可能性が考慮され、百済大寺との関連が問題となろう。吉備池廃寺も安倍寺跡と類似した伽藍配置を採るからだ。一方、7世紀第4四半期の造営となると、問題は複雑となる。先に述べたように、阿倍内麻呂が亡くなったあと、阿倍氏は「分裂」するから、枝族のどの氏が寺造営の中心になったのかを議論する必要が生まれる。

なお、創建以降の軒瓦には、軒丸瓦では、平城京長屋王邸（奈良市）や平城京観世音寺（大和郡山市）同範の6272B、平城宮同範の6308Cと6313Aaがある。軒平瓦は、重弧文が発掘調査で3点しか出土しなかったように、基本的には重弧文軒平瓦を採用していない。ほかに、藤原宮同範の6643Cがある。発掘調査で出土したもう1種類の偏行唐草文軒平瓦は、本薬師寺跡出土<sup>55)</sup>例と同範<sup>56)</sup>。

**安倍寺の瓦編年への疑問** 菱田と近江が安倍寺A種を最古型式としたのは、これが原型の山田寺式（山田寺創建軒丸瓦）に最も近似していると考えたからだ。原型からの文様要素の脱落、あるいは文様が崩れていく方向で変化をたどるのは正しい。安倍寺A種にはじまって、C種→E種→F種とする編年案では、外縁の重圈文から素文への変化、蓮弁の輪郭線の消失、そして中房蓮子の減少（A種は1+6、それ以外は1+4）の3点は説明可能だ。だが、疑問な点もある。

まず、安倍寺A種に存在し、C種で稜線状に退化したはずの蓮弁の子葉、さらに、C種でなくなった内区と外縁との間の圈線が、いずれもE種で復活することを、この編年案では説明しにくい。もう一つは、安倍寺では重弧文軒平瓦がともなわないことへの説明。近江は、安倍寺に重弧文軒平瓦がないことに注意を喚起し、それを大和以外の他地域からの影響で説明できる可能性を述べた。具体的には、坂田寺の山田寺式軒丸瓦（坂田寺7A）に重弧文軒平瓦がともなわないことを、善正寺式軒丸瓦（坂田寺8A）の存在を媒介として、河内との関係で説明し、これを例証としている。だが、坂田寺の山田寺式軒丸瓦は、河内に展開する西琳寺式（西琳寺型式）と文様系譜の上でも繋がるから、重弧文軒平瓦がなくても様式的説明が可能なのだ<sup>57)</sup>。

以上、安倍寺創建軒丸瓦に関する旧来の編年案には、多少疑問な点が存在する。したがって、その編年案を前提に安倍寺の創建年代について検討をしてみても、あまり実りのあるものとはならないと思う。そこで、今一度資料に立ち返ってみよう。

**安倍寺創建軒丸瓦の型式分類** はじめに、安倍寺創建軒丸瓦の各型式について、その特徴をまとめる。型式分類は、近江分類を踏襲するが、B種はC種と同範の可能性が高いので、A・C・D・E・Fの5種に分類した（Fig. 117）。

近江新説

安倍寺創建年代に二説

旧案はA→C→E→F

創建軒丸瓦は5種

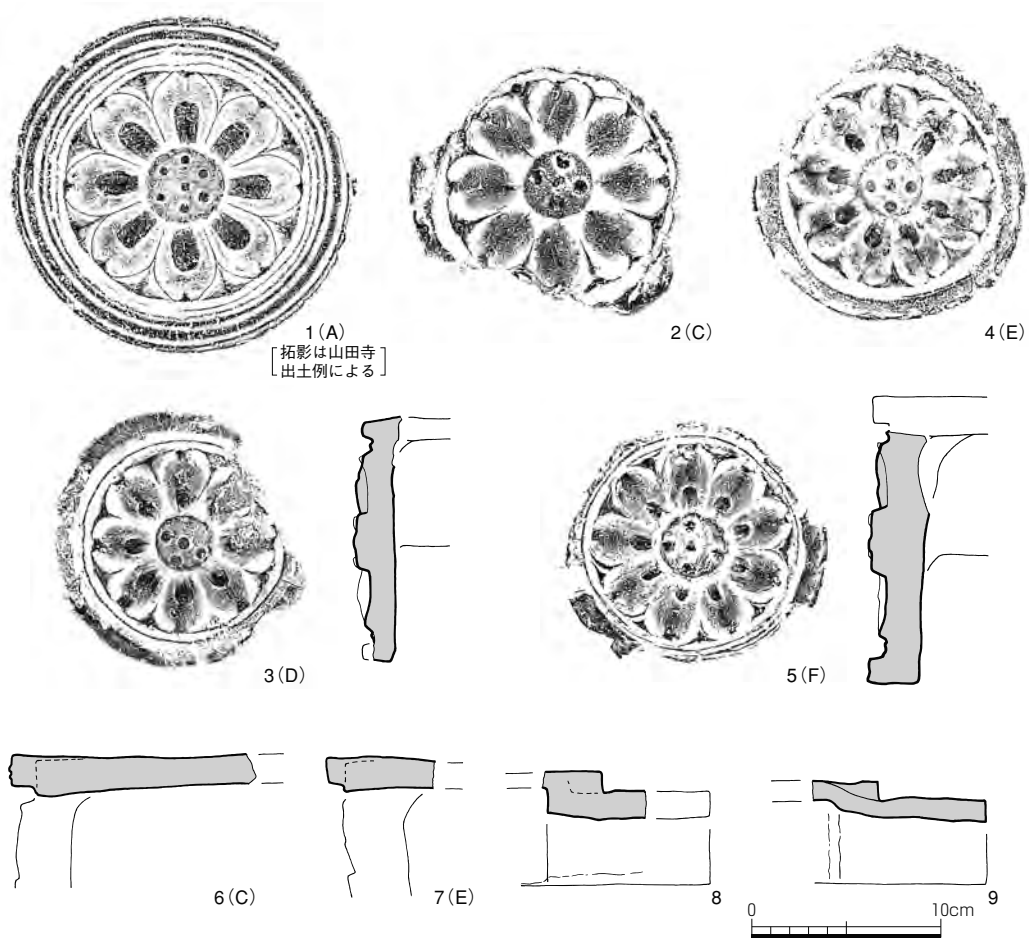


Fig. 117 安倍寺出土瓦 1:4

A種は山田寺C種同范

A 種 蓮弁に舌状の子葉をおく単弁八弁蓮華文軒丸瓦 (1)。蓮弁はややずんぐりとしており、弁端は反転する。弁の周囲に輪郭線がめぐる。間弁は短く、楔形をしている。中房は高く突出し、中房面は平坦。1 + 6の蓮子をおく。外縁は幅約2cmあり、四重圈文をかざる。圈線は外から2条目がほかよりも太い。弁区と外縁との間には1条の圈線がある。瓦当径18cm。山田寺軒丸瓦C種と同范。

小型で薄いD種

C 種 素弁八弁蓮華文軒丸瓦 (2)。子葉はないが、弁中央に稜線がある。間弁は楔形。低い中房に1 + 4の蓮子をおく。幅1.2~1.8cmの外縁に重圈文をかざる。圈線は1条がほかよりも太い。弁区と外縁との間に圈線はない。瓦当径約15cm。

D 種 子葉をもつ単弁八弁蓮華文軒丸瓦 (3)。瓦当径が13cmほどしかなく、5種のなかでは最も小型の軒丸瓦。蓮弁は大きく盛り上がり、弁端にしっかりとした反転の表現がある。蓮弁周囲に輪郭線はない。子葉は先がやや尖り気味となる。間弁は楔形。中房面は緩やかなふくらみがり、そこに1 + 4の蓮子をおく。外側の蓮子はすべて間弁に対応する。外縁は素文縁。弁区と外縁との間にはやや太い圈線がめぐる。圈線の断面形は三角形。

E 種 素文縁の単弁九弁蓮華文軒丸瓦 (4)。蓮弁の形状はD種に似ており、先端が細くなって明確に反転する。中房は低く平坦で、1 + 4の蓮子をおく。外側の蓮子は、1個のみが弁中央に対応するほかは、間弁に対応する。弁区と外縁の間には圈線がめぐる。瓦当径約15cm。

Tab. 17 安倍寺の軒丸瓦型式別出土点数

型式	奈良県調査 報告書	(65~67) 資料目録	桜井市89 (宮西)	桜井市90 (宮西)	桜井市90 (二階堂・三本柿)	桜井市96 (17次)	合計
A	(4)	4					4
B	(1)	0					0
C	(7)	8		4			12
D	(0)	0	1	1			2
E	(18)	11	1	7			19
F	(5)	14	3	6	2	1	26
EカF	(8)	0					
不明			3				3
合計	(43)	37	8	18	2	1	66

F 種 E種と同様の素文縁単弁九弁蓮華文軒丸瓦(5)。蓮弁は、先端が強い丸みをもっており、弁端の反転の表現は弱い。また、弁区全体が、圏線がめぐる外縁との間の部分よりも一段高くなっている。中房は高く突出し、1+4の蓮子をおく。外側の蓮子配置はE種と逆で、1個だけが間弁に対応し、ほかは弁央に対応する。瓦当径14.5cm。

各型式の出土点数は、Tab. 17に示した<sup>59)</sup>。以上の5種のうち、A種は山田寺ほかと同範関係にある。ほかの型式との関係を考える上で重要と考えるので、まず、安倍寺A種と同範例について記す。

**安倍寺A種と山田寺C種の同範関係** 山田寺C種は、範傷のない段階と範傷のある段階とがある<sup>60)</sup>。最も明確な傷は、弁区と外縁との間にあって、弁端と外縁の内側とをつなぐように現れた傷だ。この傷は、安倍寺A種でも確認できる。両者の同範は疑いない。

安倍寺以外にも、豊浦寺およびその南方に近接して位置する西念寺山瓦窯(ともに明日香村豊浦)から、山田寺C種同範瓦が出土している(『藤原概報 8』1978年、51頁)。興味深いことに、山田寺を除く2カ寺と西念寺山瓦窯の瓦は、相互によく似た胎土と焼き上がりを示している。山田寺出土例ではみることもない、砂っぽくてガサガサした感じの胎土が共通する。これは、山田寺の瓦窯(所在未詳)から西念寺山瓦窯へ山田寺C種の瓦範が移り、そこで生産された製品が豊浦寺と安倍寺とに供給された結果にほかならないだろう。

A種は西念寺山瓦窯産

西念寺山瓦窯へ山田寺C種の瓦範が移った時期はいつだろうか。山田寺C種は、瓦範の範傷進行と接合部の丸瓦加工手法によって、① 範傷なし、片ほぞ形Ⅱ型、② 範傷なし、楔形加工、③ 範傷あり、楔形加工、④ 範傷あり、未加工、の4段階に区分できる。

瓦範の移動時期

①段階は、遑っても天智2年(663)の「塔を構える」という記事(『上宮聖徳法王帝説』裏書)の時期で、④段階は、この段階の製品に縄叩き目があることから、奈良時代に降る可能性が高い。同様の技法の製品は、山田寺金堂創建軒丸瓦A種の「第3段階」にもあり、両者ともに瓦範の最終段階の製品に特徴的だ<sup>61)</sup>。

西念寺山瓦窯へ山田寺C種の瓦範が移動した時期が④段階以降だと、同範の安倍寺A種の年代は奈良時代となるが、そうとは断定しきれない。山田寺C種の範傷は、先述した弁区と外縁の間にある傷以外は、明瞭に傷の発生や拡大を確認できない。安倍寺A種で確認できる傷も、

瓦当面が荒れていることもあって、この傷に限られる。したがって、安倍寺A種が、山田寺C種の③段階以降の製品に対応することは断言できるが、④段階以降と確定することは現状では困難だ。範傷発生以後のある段階の一時的移動にすぎず、瓦範が再び山田寺の瓦窯へと戻っていった可能性も考慮する余地はある。

以上、山田寺C種の検討成果によりながら、同範の安倍寺A種の年代を探った。西念寺山瓦窯産と推定できる安倍寺A種の年代は、山田寺の造営が再開された天武2年(673)～天武14年(685)のある時期以降、は確実だが、それ以上には時期を絞りこめない<sup>62)</sup>。

**安倍寺創建軒丸瓦の製作技法** 創建軒丸瓦A・C～F種について製作技法をまとめておこう。

A種は、接合部を観察できる個体がなく、詳細は明らかでない。瓦当は厚さ3.2cmある。丸瓦を、おそらくは未加工で瓦当の上端に接合するようだ。接合粘土をあてるまえに、凸面側の瓦当成形粘土を棒で押しつけた痕跡が残るものがある(県資料No.1722)<sup>63)</sup>。裏面はナデ調整、接合部内面(凹面)は粗いユビナデ調整で、凹凸が残っている。

C種接合溝  
に丸瓦挿入

C種は、範傷の多寡で段階区分できそうだが、基本的には瓦当厚3cm台のやや厚いものが主体。丸瓦は、瓦当裏面上端の外縁位置に接合溝を設けたのちに、そこにさし込んで接合される。接合の角度が上端部でやや鈍角になるものが多い。丸瓦先端凹面は未加工で、キザミもない資料が多いが、なかには先端の凸面を浅くヘラケズリし、凹面に横方向のキザミを入れた資料もある(県資料No.1727)。接合粘土は少量。丸瓦先端がほとんど瓦当表面に接している(Fig.117-6)ためか、瓦当面の外縁基部をヘラのようなものでナデる。裏面は、丁寧なナデ調整で平坦に仕上げる。C種には瓦範が著しく摩滅した例があり(県資料No.1732)、これは瓦当厚が2.2cmしかない。丸瓦接合位置がほかのものより低く、弁区の周囲あたりに対応する。丸瓦剥離面には布圧痕やキザミの痕跡はない。

D種の接合  
粘土は少量

D種(Fig.117-3)は、瓦当厚が2cm未満しかない薄い瓦当。厚さ1～1.2cmほどの薄い丸瓦を瓦当裏面上端、外縁位置に接合する。凹凸面にあてた接合粘土が剥落しているため、キザミの有無などはわからないが、丸瓦の先端に加工はないようだ。丸瓦を立てたのち、凹面に支持ナデつけをし、ごく少量の接合粘土をあてる。瓦当裏面はナデ調整して平坦にする。

E種は、瓦当厚3cm台のものと同程度のものがある。後者には、瓦当裏面中央が浅くくぼむものがあり(県資料No.1735など)、これらの個体では裏面と側面の角をつまむようにしてナデ調整する。瓦当裏面全体に薄い粘土板を貼り足して、瓦当成形する。丸瓦の先端は、凹凸面とも浅くヘラケズリするが、キザミはない。丸瓦の先端はほとんど瓦当表面に接しており(Fig.117-7)、丸瓦を立てたのち支持ナデつけをし、凹面にはやや多めの接合粘土をあてる。

F種(Fig.117-5)は、E種とよく似た作り方をしている。瓦当厚は2～3cmあり、裏面が平坦な個体と、中くぼみになる個体とがある。瓦当裏面に薄い粘土板を貼り付ける手法も、E種と同様。丸瓦の先端は、凹面をやや深めにヘラケズリするものが多い。凸面側もヘラケズリするのかどうかはよくわからない。丸瓦の先端は、ほとんど瓦当表面にとどいている。凹面側の接合粘土の量はやや多い。丸瓦を立てたのち、支持ナデつけする。

安倍寺オリ  
ジナル4種

**安倍寺創建軒丸瓦の再編年** 従来、山田寺の山田寺式軒丸瓦に最も近似することをもって、安倍寺A種をこの寺の創建瓦の筆頭に考えてきた。だが、安倍寺A種は山田寺C種と同範で、しかも山田寺とは瓦窯を異にすることが判明した。したがって、安倍寺の創建軒丸瓦編年は、A

種からの型式変化という方向性で考えるのではなく、C～F種のなかでまず考えてみるべきだろう。この4種では、D種が型式的に先行すると考える。

最古型式は  
D種

D種は、弁のてりむくりや子葉の表現がもっともしっかりしており、また、瓦当が薄くつくられている。接合位置はE・F種と変わらないが、接合粘土が少ない。

また、13cm弱の瓦当径に対応する玉縁丸瓦が桜井市の調査で出土しており、これがD種にと  
もなう可能性が高い (Fig. 117-8・9)。この丸瓦は、玉縁と筒部を一枚の粘土板で作る。筒部から段部をこえて玉縁まで、粘土板合わせ目が連続する資料がある。段部凹面は、ほぼ直角に屈折するものとややゆるく屈曲するものがあるが、ともに玉縁の凹面全面をヘラケズリして布圧痕を残さない。

玉縁凹面を  
ヘラケズリ

玉縁凹面をヘラケズリする手法は、筒部だけに模骨(木型)を使用する飛鳥時代初期の「星組」丸瓦に特徴的な手法で、凹面のほぼ全面をヘラケズリする手法は、奥山廃寺のいわゆる角端点珠型式(奥山廃寺Ⅱ型式)にと  
もなう丸瓦にある。奥山廃寺の例も「星組」の玉縁丸瓦と同様、筒部の上端に粘土を積み上げるやり方で玉縁部を形成しており、削り残した部分には布圧痕はみえない。

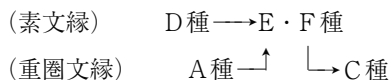
D種に対応する安倍寺の丸瓦は、筒部と玉縁を一枚の粘土板で成形するので、この点では吉備池廃寺や山田寺の創建丸瓦と共通し、そこに奥山廃寺にあった調整手法が残存しているとみることができる。おそらく、強く屈折した模骨に布や粘土板をなじませるのが技術的に困難だったため、そのシワなどをヘラケズリで調整したのだろう。玉縁凹面をヘラケズリする手法は、吉備池廃寺や、山田寺以降に創建された寺院では確認できない。技法的には、吉備池廃寺と相前後する時期とみてよいだろう。

吉備池廃寺  
に近い時期

このD種に後続するのが、同じ素文縁だが九弁蓮華文の軒丸瓦E・F種と考える。瓦当径を拡大したことが、八弁から九弁への弁数の増加につながったのだろう。蓮弁の子葉が小型化している点も新しい要素といえるだろうし、この2種は、瓦当厚がD種よりも分厚く、接合粘土の量も多くなっている。

C種は、八弁蓮華文ではあるが、蓮弁に子葉の表現がない。一方で、外縁には重圏文をかざって、一見、山田寺式の文様を正当に踏襲しているように見える。だが、C種の重圏文縁は搬入されたA種からの影響とみるべきで、その時期はE・F種と併行するか、あるいは若干遅れるとみたい。

以上の安倍寺創建軒丸瓦の関係を図示すれば、素文縁と重圏文縁の2系統があって、



創建軒丸瓦  
の編年案

となろう。したがって、安倍寺の創建時期は、出土点数は少ないが、D種によって判定すべきと考える。D種の蓮華文は、蓮弁に輪郭線こそないものの、山田寺の中門・回廊に葺かれた山田寺軒丸瓦D種に近似するし、先述したように、対応する丸瓦の技法的な特徴から、吉備池廃寺と近い時期と考えると問題ない。安倍寺の創建時期を、吉備池廃寺や山田寺に近接した7世紀第2四半期末頃とみて、大きくは過たないだろう。

**平瓦2類の性格** さて、安倍寺の創建時期をこのように考えると、吉備池廃寺の創建瓦に関して、一つの憶測が成り立つように思う。それは、創建瓦に含めた平瓦2類に関わる問題だ。

平瓦2種は  
安倍寺用か

吉備池廃寺の創建瓦は、軒瓦のほかに丸瓦1類と平瓦1・2類がある。丸瓦1類と平瓦1類はセットを構成するが、平瓦2類には対応する丸瓦が見当たらない。ふつう、丸瓦と平瓦はセットで製作されるから、対応する丸瓦を欠く平瓦の単独生産は想定しにくい。ところが、安倍寺には、吉備池廃寺平瓦2類Bに近似した、凸面に叩き目を残す平瓦が存在する。側面調整は、分割破面だけをヘラケズリするb手法をとることからみて、安倍寺創建時の平瓦だろう。

これが安倍寺軒丸瓦D種とセットだとすれば、対応する丸瓦の直径が12~13cmしかないため、大型の丸瓦を葺いた吉備池廃寺に、丸瓦は葺くことができなかったが、平瓦の規格はほぼ同じだったので、平瓦だけを供給した結果と推測することができる。これが、吉備池廃寺の創建平瓦2類の、創建瓦のなかでの客体的なあり方に反映されているとみてはどうだろう。『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』にみえる、阿倍内麻呂を百濟大寺造寺司に任命したとの記事は、吉備池廃寺平瓦2類の存在にその痕跡をとどめている、ともいえるだろう。

## ii 額田寺との関連について

百濟大寺  
前身寺院

『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』は、百濟大寺の前身寺院として、麿戸皇子が田村皇子（のちの舒明天皇）に託した「熊凝村」の道場をあげる。『扶桑略記』の推古25年（617）条に「願はくは一精舎を熊凝村に建て」、同じく推古29年（621）2月22日条に「平群郡熊凝精舎」とあるのがそれだ。この熊凝精舎を、石田茂作は、伝承に基づき額田寺（額安寺、大和郡山市額田部）にあてるとともに、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』が麿戸皇子没後100年そこそこの記録だから「絶対に信用してよいもの」で、さらに「飛鳥時代の古瓦の出る事は、この創建の記録の誤らない事を重ねて證するものである」とした。<sup>64)</sup>

しかし、福山敏男は、熊凝精舎=額田寺説が鎌倉時代中期に成立した『聖徳太子伝私記』下巻に初めてみえる説にすぎないことから、これを疑問とし、遡って『日本三代実録』元慶4年（880）10月20日条に大安寺の奏上文を引いて「平群郡熊凝道場」とあるのは、「飽浪葦墻宮」が平群郡（『日本書紀』天武5年（676）4月辛丑条には「飽波郡」と見える）にあったとの知識による大安寺側の解釈と断じた。<sup>65)</sup>

『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』にいう熊凝道場=百濟大寺前身寺院説は、「熊凝（熊凝）」の地名自体が失われてしまった現在ではほかに史料もなく、判断のしようがないし、熊凝道場（熊凝精舎）を額田寺にあてる説自体も平安時代以前に遡らないとあっては、これまた検討の余地がない。<sup>66)</sup>

それでも、額田寺の発掘調査で法隆寺若草伽藍金堂所用と考えている手彫り忍冬唐草文軒平瓦が出土したことを受け、この瓦に、熊凝道場にはじまり百濟大寺・高市大寺・文武朝大官大寺・大安寺へと法灯が伝えられたとの伝承の実体が潜むのではないかと、ひかえめに憶測する説がある。<sup>67)</sup>しかし、多くの採集資料を集成して額田寺の瓦を再検討した上原真人の研究成果によれば、額田寺の創建軒丸瓦は、素弁六弁蓮華文軒丸瓦をあてるべきだ。この軒丸瓦は、同文異範2種があり、瓦当径の大きさや幅が広い素文の直立縁といった特徴からして、7世紀第2四半期の瓦としてよいだろう。大和でも類例はほとんどないが、飛鳥の和田廃寺（橿原市和田町）に1点だけ類品があるのは、飛鳥地域との関係をうかがうよすがにはなる。また、額田寺から今のところただ1点しか出土していない手彫り忍冬唐草文軒平瓦についても、過大な評価はつ<sup>68)</sup>つしむべきだろう。<sup>69)</sup>

額田寺の  
創建軒瓦



額田寺では、その後、河内の「西琳寺型式（系列）」の山田寺式軒丸瓦を採用する。直立縁に文様をほどこさず、弁中央に細い稜線を走らせることが、この型式の山田寺式軒丸瓦の特徴で、中河内に多く分布する。一方、大和では坂田寺と寺戸廃寺（北葛城郡広陵町）ぐらいいし採用されていない。上原は、中河内と関連する背景として大和川の水運を推測しているが、妥当な見解だろう。

7世紀後半の額田寺では、法隆寺式が採用される。軒丸瓦は、蓮弁が短く、大きな中房に1+8+16の蓮子を配置する。外縁は、緩い傾斜縁に線鋸歯文をおく。範型は2種あり、一重目の蓮子が弁中央に対応する配置（上原論文図Ⅱ-9~12）は、法起寺塔創建瓦（法隆寺37F）と共通し、一重目の蓮子が間弁に対応する配置（同図13）は、法輪寺所用軒丸瓦（法隆寺37E）と共通する。法隆寺式軒平瓦は1種類だと上原は認定しており、それは法起寺塔創建瓦（法隆寺217C）に酷似する。これらの瓦は、法起寺塔の完成年代から7世紀末頃と認定してよい。

法隆寺式瓦  
を採用

さて、法隆寺西院伽藍の創建にあたって製作・使用された法隆寺式軒丸瓦は、蓮子配置が1+7+11（法隆寺37A~C）または1+6+10（法隆寺37Da）に限られ、外縁は平縁に線鋸歯文をおく特徴が共通する。額田寺の法隆寺式軒瓦は、それとはちがって、法輪寺あるいは法起寺の法隆寺式軒瓦と強い共通点を持ち、法隆寺自体と直接の関係を瓦から導くのは困難だ。額田寺から「法隆寺式軒瓦」が出土するからといって、それによって法隆寺ひいては厩戸皇子とこの寺を結びつけるのは論証とはほど遠く、いかなものかと思う。このほかには、藤原宮式軒丸瓦（上原論文図Ⅱ-15）が出土している。藤原宮とは別範だが、膳夫寺（橿原市膳夫町）と同範のように<sup>71)</sup>思う。

額田寺の軒瓦を概観すると、7世紀代には斑鳩地域や中河内地域と強い結びつきをもち、飛鳥周辺ともわずかな関連を保っているが、そこに宮殿や官寺が関わることはない、といった特徴をうかがうことができる。

続く奈良時代には、平城宮式軒瓦の文様をベースに、独自の瓦当文様を創作しており、額田部氏の氏寺たる額田寺を、瓦当文様としても表現しているように思える。ただし、平城宮式とはいっても、平城宮同範品を使用するわけではないので、平城宮（皇后宮）同範品を使う法隆寺東院とは、寺としての格に懸隔があったとする上原の指摘は重要だと考える。また、大安寺との間にも、軒瓦や鬼瓦で特段の同範関係や文様の共通性は見出せていない。この時代にも、宮殿や官寺との関係は希薄だ。

以上のような、古瓦に表現された額田寺からは、吉備池廃寺へとつながる赤い糸を紡ぐことはできない。福山が述べたごとく、熊凝道場（熊凝精舎）を額田寺にあてる説自体が平安時代以前に遡らないことを、遺物から示唆しているのではなからうか。<sup>72)</sup>

額田寺とは  
縁が薄い

## E その後の吉備池廃寺

吉備池廃寺からは、この寺の創建瓦以外の瓦が少量出土した。そのうち藤原宮期から奈良時代までの瓦（丸瓦2類A~C、平瓦3類・4類A）は、藤原宮同範の軒丸瓦1点を含むものの、瓦葺建物の存在を示すものではない。檜皮葺建物の棟積などに使われたものがあつたのかもしれないが、その用途を特定することは難しい。

これに対して、軒丸瓦Ⅲ型式、軒平瓦Ⅲ型式、丸瓦2類D、平瓦4類Bそして鬼面文鬼瓦は、

種類の揃う  
瓦 — 式

赤褐色に発色する色調や胎土が共通しており、ひとまとまりの瓦としてとらえてよい。軒瓦ばかりでなく、鬼瓦があることによって、これらが一つの瓦葺建物に用いられたこと疑いない。

軒丸瓦は、外区の珠文帯と外縁との間に一段低い素文帯を設けた複弁八弁蓮華文で、中房は一段高い。同范例を聞かないし、類似した文様の瓦を見出すことができなかった。この軒丸瓦は「成形台一本作り」技法<sup>73)</sup>によって作られている。山崎信二は、大和における同技法の瓦を、東大寺や法隆寺の講堂再建に臨んで、平安京からの技術移植によって成立するとし、平安時代中期Ⅰ（910～973）に編年<sup>74)</sup>した。平安京では、この技法が中期Ⅰ期～Ⅱ期（876～1016）に盛行<sup>75)</sup>し、寛仁4年（1020）に藤原道長が創立した法成寺の瓦には認められない<sup>76)</sup>。

軒平瓦は、内区に花菱風宝相華文をかざる。この文様は、丹波篠A号窯で焼かれた法成寺創立の瓦に始まり、平安京瓦編年中期Ⅲ期（1016～1058）に出現する。朝堂院や三条西殿跡、鳥羽離宮南殿跡では、12世紀の播磨産の軒平瓦にこの文様がある<sup>77)</sup>。大和では興福寺に、上下の外区に珠文を並べた花菱風宝相華文軒平瓦がある<sup>78)</sup>。藪中五百樹は、興福寺瓦編年Ⅵ期（1078～1103）とする<sup>79)</sup>。

鬼瓦は、目玉の部分しか文様のわかる部位はないが、これが型作りとは判明した。大和の型作り鬼瓦は、12世紀中頃の法隆寺夢殿<sup>80)</sup>の例、承元4年（1310）再建用の興福寺北円堂<sup>81)</sup>例などが最も新しい作例で、それ以後は、手づくねの鬼瓦<sup>82)</sup>に交替する。

11世紀前半  
に瓦葺仏堂

製作技法から推定される軒丸瓦の年代と、文様から推定される軒平瓦の年代との間に、微妙にずれはあるが、おおむね11世紀前半をこれらの瓦の年代として推定する。

さて、これら一群の瓦は、吉備池廃寺調査区のどこでも出土したのではない。総計41点と量は多くないものの、そのうちの27点が第105次調査中央区から出土した。これには、軒丸瓦と鬼瓦各2点と軒平瓦3点を含んでいる。そのほか、現吉備池北岸に位置する第105次調査西区から5点、第111次調査北区から3点が出土した。第105次調査中央区は、現在、春日神社が鎮座する低丘陵の南側に位置する。この丘陵は、南東から延びていた舌状の丘陵を、吉備池廃寺の造営にあたって中途を削平したために独立したようにみえている。そして、その東南部には、第105次調査中央区を設定した水田から1.5mほどの高さで、幅8mほどの平坦面がめぐっている。おそらく、この平坦面に小規模な瓦葺仏堂が建っていたのだろう。

11世紀の前半に、この地には吉備池廃寺とは別の瓦葺仏堂が建てられた。それが吉備池廃寺を意識したものだったかどうかは、記録もなく明らかでない。だが、その後ほどなく廃滅したことだけは間違いなさそうだ。

## F 瓦からみた吉備池廃寺と百濟大寺

以上、吉備池廃寺出土瓦について、種々の方面から検討を加えた。最後に創建瓦について述べたことをまとめておこう。

吉備池廃寺創建瓦の年代は、軒瓦の文様と製作技法により、おおむね630年代から640年代初頭と判断した。

これは、まず、舒明13年（641）に創建され、大化5年（649）までに完成したと考えられる山田寺金堂および中門・回廊の創建軒丸瓦との比較による。吉備池廃寺創建軒丸瓦は、山田寺のものより様式的に若干先行する要素をそなえている。また、吉備池廃寺創建軒平瓦の型は、

ほぼ630年代と考定した斑鳩寺213Bの押し型を、若草伽藍での使用後に瓦窯と瓦工を変えつつ再使用したものだった。丸瓦の形状も、山田寺創建期の丸瓦によく似ており、それよりは2割ほど大きく作られている。大きな瓦には大規模な建物がふさわしく、それは金堂と塔の基壇規模からも推定されたことだった。

また、吉備池廃寺創建瓦の出土量は、従来からも少ないといわれていたが、これをほかの遺跡での出土量、とくに藤原宮中枢部の近年の調査成果と比較することによって、瓦葺建物が移建されたのちの状況とみるべきことを述べた。出土した瓦のなかには補修瓦がみあたらず、後世の瓦はこの寺に葺かれたものではないことを論証した。

吉備池廃寺創建瓦の年代と規格、そして遺跡での瓦の出土状況は、舒明11年(639)に創建され、わずか三十余年のちの天武2年(673)に高市の地に移されたと伝える「百済大寺」にふさわしい。

『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』には、百済大寺造寺司に阿倍内麻呂(阿倍倉橋麻呂)が任ぜられたとの記録がある。彼は氏寺たる安倍寺創建者とも伝えるが、安倍寺の創建瓦をあらためて検討すると、その創建は7世紀中頃、内麻呂存命中(649年以前)と考える余地も充分あるだろうとの結論をえた。さらに、吉備池廃寺創建平瓦の一部(平瓦2類)が安倍寺から供給された可能性も指摘した。この点では、記録は信頼にたる事実を伝えるとみえる。

だが、その一方で、同書が百済大寺の濫觴とする巖凝精舎(その伝承地の額田寺)に関しては、瓦からは関連を見出すことはできなかった。それはかえって、天皇家勅願寺としての「大寺」の系譜を厩戸皇子(聖徳太子)に仮託しようとする意図をあらわにするよう<sup>83)</sup>だ。

吉備池廃寺の瓦は、この遺跡に、かつて九重塔を誇った百済大寺の大伽藍がそびえていたことを今に伝える。子部神の怨みも、瓦にまでは及ばなかったのだろう。

- 1) 後述する木之本廃寺では、剖面戸瓦を確認した。吉備池廃寺から鴟尾片が一片も出土しなかったことは、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』にみえる「石鴟尾」の存在を暗示するのかもしれない。
- 2) 大脇 潔「大安寺1—百済大寺から大官大寺へ—」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所、1995年。大脇 潔「吉備寺はなかった—『京内廿四寺』の比定に関連して—」『文化財論叢Ⅱ』奈文研創立40周年記念論文集、同朋舎出版、1995年。上原真人「寺院の変遷からみた仏教」『仏教の受容と古代国家—日本古代国家の成立を探るⅢ』第8回歴史の華ひらく泉南シンポジウム、泉南市・泉南市教育委員会、1995年。小澤 毅「吉備池廃寺の発掘調査」『仏教芸術』235号、毎日新聞社、1997年。(小澤「吉備池廃寺と百済大寺」『吉備池廃寺をめぐる—百済大寺はどこか—』帝塚山大学考古学研究所、1998年もほぼ同文)。近江俊秀「吉備池廃寺は百済大寺か—百済大寺と高市大寺の所在地をめぐる—」『吉備池廃寺をめぐる—百済大寺はどこか—』帝塚山大学考古学研究所、1998年。大脇 潔「『百済大寺』論争の行方をめぐって」『吉備池廃寺をめぐる—百済大寺はどこか—』帝塚山大学考古学研究所、1998年。花谷 浩「兄弟の瓦—百済大寺と海会寺」『海会寺跡』(第1回古代史博物館フォーラム 歴史を語る 第1話) 泉南市、1998年。伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅰ』奈文研、2000年。
- 3) 大脇 潔「吉備寺はなかった」前掲註2)、170~171頁。
- 4) 毛利光俊彦・佐川正敏・花谷 浩「法隆寺の至宝瓦」法隆寺昭和資財帳15、小学館、1991年。
- 5) 岩井孝次『古瓦集英』岩井珍品屋、1937年、図版13-55、図版30-153。
- 6) 石田茂作『古瓦図鑑』大塚工芸社、1930年、図版第132-428。現在の明日香村小山にある大官大寺(文武朝大官大寺)跡からの出土として報告され、山村廃寺の均整忍冬唐草文軒平瓦および斑鳩寺型押し忍冬唐草文軒平瓦(213B)と並べて掲載された。目録には「大官大寺ノ創立ハ白鳳時代デアルガ、文様ノ形式上シバラクコ、ニオク」とある。法隆寺式軒瓦が飛鳥時代と認識されていた当時のことで

はあるが、同じ押し型を使った法隆寺例が並置されているのは慧眼といえよう。ただし、その後、奈文研がおこなった大官大寺跡の発掘調査では、当該軒平瓦は1点も出土しなかった。

- 7) 奈良国立博物館『飛鳥白鳳の古瓦』東京美術、1970年。
- 8) 山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』奈文研創立30周年記念論文集、同朋舎出版、1983年、註148。なお、「吉備寺」の存否については、大脇 潔「吉備寺はなかった」前掲註2) 参照。
- 9) 以下、木之本廃寺出土瓦については、伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」前掲註2) と、花谷 浩「京内廿四寺について」『研究論集 XI』奈文研学報第60冊、2000年を参照。
- 10) 四天王寺軒瓦の分類と編年は、以下の文献を参照した。天沼俊一ほか『四天王寺図録 古瓦編』四天王寺、1936年。四天王寺文化財管理室『四天王寺古瓦聚成』柏書房、1986年（以下、『聚成』として引用）。上原真人「仏教」『岩波講座 日本考古学』第4巻 集落と祭祀、岩波書店、1986年。網 伸也「四天王寺出土瓦の編年的考察」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社、1997年。網 伸也「四天王寺の『百済大寺式』軒丸瓦」『古代瓦研究 I』奈文研、2000年。
- 11) 四天王寺出土瓦の観察は、西川雄大がおこなった。調査にあたり、柏原智覚の協力を得た。
- 12) 仮屋喜一郎ほか『海会寺一海会寺遺跡発掘調査報告書』泉南市教育委員会、1987年。
- 13) 海会寺出土瓦の観察は、西川雄大がおこなった。調査にあたり、城野博文の協力を得た。
- 14) 毛利光俊彦・佐川正敏・花谷 浩『法隆寺の至宝 瓦』前掲註4)。
- 15) 網 伸也「四天王寺出土瓦の編年的考察」前掲註10)。
- 16) 『大日本仏教全書』聖徳太子伝叢書、仏書刊行会、1912年、66頁。
- 17) 白雉4年(653)6月条には、これらが川原寺に安置されたと見え、同条所引の或本は、その場所を山田寺とする。しかし、この時点で川原寺が存在したことにはつながらないだろう。
- 18) 小澤 毅「吉備池廃寺の発掘調査」前掲註2)。小澤は、「移建は确实」の根拠として、出土瓦に「補修用の瓦がまったく存在しない」ことと、「丸瓦や平瓦の出土量も僅少であり、そのうえ、圧倒的に小片が多い」ことをあげている(38頁)。
- 19) 小澤 毅「西隆寺創建期の軒瓦」『西隆寺発掘調査報告書』奈文研学報第52冊、1993年。
- 20) 丸瓦1類以外の型式は、出土量の1%に満たない(『年報1998-II』64頁、『紀要2001』82頁)。
- 21) 平瓦を「厚手品」と「薄手品」とで分類集計した第81-14次調査区では9%、第89次調査区では10%が「薄手品」だった(『年報1997-II』90頁、『年報1998-II』64頁)。「薄手品」には、ごく少量の3類以下の平瓦を含むが、基本的には平瓦2類と判断してよい。縄叩きをもつ平瓦3類と4類は、全体量の2%未満しかない(『紀要2001』82頁)。
- 22) 小澤 毅「西隆寺創建期の軒瓦」前掲註19)。
- 23) 佐川正敏「第Ⅱ期遺構の造営瓦とその年代」『平城宮発掘調査報告 XIV』奈文研学報第51冊、1993年、96~117頁。
- 24) ここでの平瓦の枚数は、大極殿の屋根が入母屋の場合の推定所用枚数32,218枚を採用したもの。寄棟の場合は33,528枚で、第二次大極殿院全体の平瓦総計は約121,200枚、丸瓦に対する平瓦の枚数比は1:2.54となる。なお、丸瓦と平瓦の枚数比には、平瓦の葺足が大きな影響を与える。佐川は、大極殿院所用平瓦の葺足を15cmとし、平瓦全長に対する比率0.38~0.40が、恭仁宮や東大寺法華堂の例とも整合するとした。小澤も、西隆寺における丸瓦と平瓦の個体数比(1:2.60)は両者の葺足の比率に対応すると考えて、葺足長12.4cmを割り出し、これが平瓦全長の37%に相当すると述べた。これらは、平瓦三枚葺きの実例だろう。
- 25) 山田寺回廊では、出土した軒平瓦や平瓦に残る風食痕が全長の約半分に達しており、二枚葺きだったとみてよい。この場合、丸瓦に対する平瓦の個体数比は、奈良時代の諸実例より小さくなる。だが、重量比でみるとよく似た数値になる。  
山田寺回廊所用の創建丸瓦(丸瓦BⅡ、BⅣ)は筒部長33~36cm、平均重量2.7kg。創建平瓦は、平瓦3類が全長37~41cm、重量4.7~6.0kg、平瓦4類が全長35~40cm、重量4.0~5.5kg(奈文研『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年)。  
二枚葺きとした場合の丸瓦と平瓦の個体数比は、1.65~1.89で、平瓦の重量を単純に平均して重量5kgとした場合、重量比では1:3.05~3.5となる。奈良時代の瓦に比べると、丸瓦に対して平瓦が重いいため、個体数比と重量比に差がでてくる計算だ。
- 26) 佐川正敏「山田寺の調査」『年報1997-II』。
- 27) 花谷 浩「川原寺の調査-1995-1・1996-1次」『年報1997-II』。

- 28) 千田剛道・西口壽生「西塔・南面回廊の調査(1995-1次)」『年報1997-II』、花谷 浩「本薬師寺出土の瓦」『年報1997-II』。
- 29) 花谷 浩「飛鳥寺の調査-第91-8次調査」『年報1999-II』。
- 30) 『藤原概報26』1996年、87~89頁。出土瓦の多くは、奈良時代回廊の整地土層から出土した。出土した軒瓦も90%が7世紀代のものだった。
- 31) 『藤原概報26』1996年、62~75頁。
- 32) 花谷 浩「飛鳥寺の調査-西門地区の調査(1996-1次)」『年報1997-II』。
- 33) このほか、1984年の山田寺東面回廊の調査では、調査面積572m<sup>2</sup>で11tの瓦が出土したと報告した(『藤原概報15』1985年、95頁)。100m<sup>2</sup>あたり1.92tの計算になる。
- 34) 渡邊淳子「西方官衙南地区の調査-第108-10次」『紀要2001』。藤原宮外周の大垣は瓦葺。
- 35) 西口壽生・佐川正敏「坂田寺の調査-1996-1次」『年報1997-II』。
- 36) 西口壽生「飛鳥寺1996-3次調査」『年報1997-II』。
- 37) 3つの調査区は奈文研調査以前に日本古文化研究所が発掘調査しており、また、第100次調査区の北辺にある礎石建物SB530のまわりと東辺は、奈文研第2次調査区と重なっている。第100次調査区と重複する第2次調査区については瓦を全量採取していたので、第100次調査区の面積に対して20%ほどを占める第2次調査区重複分を補正する必要がある。これを2割とみたとき、単位面積あたりの瓦重量は、 $287.58 \div 0.8 = 359.48\text{kg}$ 、と推算できる。
- 一方、古文化研究所の調査は、基本的に、トレンチ調査あるいは壺掘りによって礎石位置を確認する手法をとっており、また、埋め戻した土からも多量の丸・平瓦が見つかる。破片となった瓦は採取せずに埋めてしまったようなので、その影響は考慮せずともよいだろう。
- ただし、大極殿院回廊「東殿」をねらった第117次調査の北区だけは、日本古文化研究所がやや広範囲に全面調査を実施している。その時の調査では瓦敷が発見されたが、これを掘り出して除去してしまっている。また、ここにはかつて鴨公小学校校舎が建っていて、それによる攪乱も著しかった。第117次調査について、北区(1,200m<sup>2</sup>)と南区(500m<sup>2</sup>)にわけて瓦の出土量を記すと、北区：丸瓦885.14kg、平瓦2,364.22kg、合計3,249.46kg、南区：丸瓦669.33kg、平瓦2,410.87kg、合計3,080.2kg。100m<sup>2</sup>あたりの瓦重量は、北区：270.79kg、南区：616.04kg、となって、北区での日本古文化研究所の調査による瓦の減失は否定できない。第117次調査については、現在もまだ整理中なので、今後さらに検討を要するし、それ以降の調査についても同様のデータを積み上げていきたい。
- 38) 石田茂作は、塔跡土壇の北東に畑地があって、ここが講堂跡に推定できると報告している。石田は、約1町四方の法隆寺式伽藍配置を考えた。石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉賛会、1936年、145~156頁。
- 39) 田中英夫・久野邦雄・泉森皎ほか『安倍寺跡環境整備事業報告-発掘調査報告書-』桜井市、1970年。以下、『安倍寺報告』として引用。
- 40) 清水真一「国史跡安倍寺・宮西地区 発掘調査概要」『桜井市内埋蔵文化財1989年度発掘調査報告書1』桜井市文化財協会、1990年。
- 41) 清水真一「国史跡・安倍寺の周辺地区発掘調査概要」『桜井市内埋蔵文化財1990年度発掘調査報告書2』桜井市文化財協会、1991年。
- 42) 清水真一「安倍寺跡第14次調査」『桜井市内埋蔵文化財1993年度発掘調査報告書』桜井市文化財協会、1994年。清水真一「安倍寺跡第17次調査報告」『桜井市内埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書1』1997年。
- 43) 清水真一「安倍寺跡」『埋文センター5年のあゆみ』桜井市文化財協会、1994年。
- 44) たとえば、小島俊次「安倍寺址」『国史大辞典』第1巻、吉川弘文館、1979年。
- 45) 菱田哲郎「瓦当文様の創出と7世紀の仏教政策」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流 5、名著出版、1994年。
- 46) 近江俊秀「安倍寺の瓦-大和安倍寺の造営年代をめぐる一考察-」『古代文化』第49巻第5号、古代学協会、1997年。以下、「近江1997年論文」として引用。
- 47) 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』前掲註38)、図版第88-1。
- 48) B種とD種を除外したのは、奈良県教育委員会による発掘調査でB種が1点しか出土せず、D種が全く出土しなかったことによる。ただし、B種の存在は疑問。註58) 参照。
- 49) 近江1997年論文(前掲註46))、34頁。

- 50) 当初範 (Ia) では蓮弁に子葉があるが、これを削り落として素弁に改範したもの。竹田政敬「平松廃寺 前身寺院は飛鳥に―」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所、1995年。
- 51) 近江は、安倍寺の創建年代が『東大寺要録』の記述に引きずられている状況を危惧し、出土瓦の分析から安倍寺の造営時期を考えようとした。これは、至極正當な着眼だった。
- 52) 山田寺C種のほとんどは製作が天武朝に降る、と公表したのは、1994年の『年報 1994』(28~29頁)。
- 53) 近江俊秀『大和考古資料目録 第23集 飛鳥・奈良時代寺院出土の軒瓦』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、1998年、39頁。
- 54) 近江俊秀「大和の山田寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくり IV 山田寺式軒瓦の成立と展開(1)』古代瓦研究会、2000年。以下、「近江2000年論文」として引用。
- 55) 『安倍寺報告』前掲註39)、第14図1・2。
- 56) 『藤原概報 26』1996年、69頁 Fig. 45の「新形式」とした軒平瓦。
- 57) 花谷 浩「畿内の山田寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくり V 山田寺式軒瓦の成立と展開(2)』奈文研、2001年。
- 58) 『安倍寺報告』前掲註39)では、B種(報告の型式番号は1型式)について、「子葉のもたない8葉の単弁で」「周縁は高く、三重圏文がめぐらされている」とし、C種の特徴を「(B種より)直径が1cmほど小型につくられ、辨央の稜線が先端まで明瞭に附されている」とする(14頁、括弧内は筆者)。また、近江は1997年論文(前掲註46))のなかで、B種は「弁央にややにぶい稜線」、C種は「弁央(特に中房付近と先端部)にするどい稜線」をもつと述べている(32頁)。
- しかし、『安倍寺報告』の第13図1に示されたB種の拓本を、同図2(C種)の拓本と重ね合わせると、中房蓮子の配置と間弁の位置がまったく重なる。さらに、桜井市所蔵資料も含めて、弁央に子葉のない軒丸瓦を比較した結果では、確かに、弁央の稜線が蓮弁基部だけにしか表現されない個体と、弁央の稜線が弁端まで明瞭な個体とがあるけれども、両者は中房蓮子の配置が一致するだけでなく、弁区にある筈傷もすべて一致する。同範は疑いない。
- 『安倍寺報告』第13図1のB種の拓本は、図版7-1にB種として掲載された瓦と、瓦当面を横断する割れの形状や位置が一致する点からみて、これをもとに復元的に作成したものだろう。18頁第3表によれば、B種は1点しか出土していないことも、そうした想定を裏づける。この図版7-1掲載の瓦を奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で実見したところ、C種だった。直径は、18頁第3表でB種の直径とされる17.1cm。以上、安倍寺出土の軒丸瓦で子葉をもたない八弁蓮華文には、C種と異なる型式は認められず、B種の存在は否定すべきだろう。
- なお、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館所蔵資料の観察にあたっては、今尾文昭の協力を得た。また、桜井市埋蔵文化財センター所蔵資料の観察には、清水真一の協力を得た。多謝。
- 59) 近江が1997年論文(前掲註46))と2000年論文(前掲註54))で記載した出土点数のうち、伽藍中心部出土としたものは『安倍寺報告』前掲註39)18頁第3表の点数そのまま、『大和考古資料目録 第23集』前掲註53)作成時に再整理した成果ではない。Tab.17の「奈良県調査・報告書」は、『安倍寺報告』18頁第3表に記載の型式別点数(括弧内に表記)。報告の型式番号と本稿での型式名との対応は、1=B、2=C、3=A、4 A=E、4 B=F、(4)=EカF、とした。「奈良県調査・資料目録」は、『大和考古資料目録 第23集』39~45頁所載の資料と、桜井市立埋蔵文化財センターに寄託中の資料をあわせて型式認定した点数。合計にかかわる奈良県調査分の点数はこれによるものとする。桜井市調査資料については、年次と地区ごとで集計した。文献は、註40)~42)を参照のこと。ただし、報告とは点数が一致しないものもある。
- 60) 奈文研『山田寺発掘調査報告』前掲註25)、490~498頁。
- 61) 奈文研『山田寺発掘調査報告』前掲註25)、497頁 Fig. 184。
- 62) 安倍寺跡から発掘調査で出土した偏行唐草文軒平瓦は、粗い胎土をもち、うち1点は安倍寺A種と似たような赤茶色の発色をしている。これは平瓦部凹面に模骨痕を残さないので、一枚作りの可能性が高く、奈良時代に降るだろう。ただし、西念寺山瓦窯や本薬師寺でのセットを確認できないので、両者のセット関係については保留したい。
- 63) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館「大和考古資料目録 第23集 飛鳥・奈良時代寺院出土の軒瓦」前掲註53)。以下、番号は同書による。
- 64) 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』前掲註38)、281~296頁(引用文は293頁)。

- 65) 福山敏男『奈良朝寺院の研究』高桐書院、1948年、15～30頁。飽波評の成立および飽波郷と額田郷の帰属については、仁藤敦史「額田部氏の系譜と職掌」『国立歴史民俗博物館研究報告 第88集』国立歴史民俗博物館、2001年参照。
- 66) 黒田慶一「熊凝考」『歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念論集、真陽社、1988年。
- 67) 前園実知雄「額安寺旧境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1978年度』奈良県教育委員会、1979年。
- 68) 上原真人「額田寺出土瓦の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告 第88集』国立歴史民俗博物館、2001年。
- 69) 手彫り忍冬唐草文軒平瓦は、ほかに上宮遺跡（生駒郡斑鳩町）でも出土している。斑鳩町教育委員会荒木浩司による。
- 70) 仁藤敦史「額田部氏の系譜と職掌」前掲註65)、111頁。
- 71) 上原真人「額田寺出土瓦の再検討」前掲註68) 所載の拓本と、保井芳太郎『大和上代寺院志』大和史学会、1932年、図版第24掲載の膳夫寺軒丸瓦の写真（疏瓦4）を比較すると、外区の蓮子配置が一致する。額田部氏と膳氏については、時代は異なるものの、推古紀18年（610）10月丙申条の、「額田部連比羅夫に命<sup>みことおほ</sup>せて、新羅の客迎ふる<sup>かざりうま</sup>莊馬の長とす。膳臣大伴を以て、任那の客迎ふる莊馬の長とす」という記事が想起される。余談だが、膳夫寺から出土する山田寺式軒丸瓦の内区だけを使ったとおぼしき垂木先瓦が、文武朝大官大寺（明日香村小山）の発掘調査で1点だけ出土している（『藤原概報 11』1981年、42頁）。同じものが膳夫寺からも出土するかどうかは不詳。
- 72) 狩野久は、熊凝精舎を飽浪葺宮の近傍に存在する「宮室に付属する仏堂のように考えられる」とし、『日本書紀』に登場しないという理由で、その存在まで疑うことには否定的な見解を示している。狩野久「額田部連と飽波評」『日本古代政治社会史研究』上巻、塙書房、1984年（狩野『日本古代の国家と都城』東京大学出版会、1990年所収）。また、大江親通『七大寺巡礼私記』は、熊凝精舎を撰津国熊凝村とする。この説におおかたの論者は否定的だが、黒田慶一は、『荒陵寺御手印縁起』にみえる撰津国の「熊凝地」が撰津国大郡だとする。黒田慶一「熊凝考」前掲註66)。
- 73) 毛利光俊彦「成形成一本造り技法の展開」『平城宮発掘調査報告 XIII』奈文研学報第50冊、1991年、270～276頁。これは、木村捷三郎が提唱した「一本造りあぶみ瓦」で、鈴木久男のいう「D技法」、上原真人のいう「横置き型一本造り」に対応する。木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」『造瓦と考古学』木村捷三郎先生頌寿記念論集刊行会、1976年。鈴木久男「一本造り軒丸瓦の再検討」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館、1990年。上原真人「仏教」前掲註10)。
- 74) 山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」『研究論集 VI』奈文研学報第38冊、1980年。
- 75) 近藤喬一「軒瓦の編年試案」『平安京古瓦図録』平安博物館、1977年。
- 76) 木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」前掲註73)。
- 77) 近藤喬一「軒瓦の編年試案」前掲註75) 参照。
- 78) 平安博物館『平安京古瓦図録』前掲註75)。
- 79) 藪中五百樹「平安時代における興福寺の造営と瓦」『仏教芸術』194号、毎日新聞社、1991年。なお、最近では、V期（1017～1067）に遡る可能性も述べている。藪中五百樹「奈良～平安時代の興福寺の新形式瓦」『帝塚山大学考古学研究所研究報告 II』帝塚山大学考古学研究所、2000年。
- 80) 毛利光俊彦・佐川正敏・花谷 浩『法隆寺の至宝 瓦』前掲註4)。
- 81) 奈良県教育委員会『重要文化財興福寺大湯屋・国宝同北円堂修理工事報告書』1965年、第314図。
- 82) 毛利光俊彦「鬼瓦」『山田寺発掘調査報告』前掲註25)、524～532頁。
- 83) ただし、麩戸皇子の斑鳩宮に瓦葺仏堂があったことは、出土瓦のなかに隅軒平瓦（215A）が存在することによって確実だ。同じような施設を飽浪葺宮に想定し、それを熊凝精舎にあてようとする狩野久の見解は、今のところ否定する材料がない。

## 5 藤原京条坊と寺地

### A 藤原京の京域と道路規格

吉備池廃寺が寺院としての機能を失ったのち、一帯は藤原京の範囲に含まれ、条坊が施工された。「第Ⅲ章2 遺構各説」で報告したように、今回の一連の発掘調査でも、藤原京の条坊道路側溝のほか、溝や建物・塀などの遺構を検出している。

なお、藤原京の京域については、岸俊男<sup>1)</sup>の復元が長く定説としての位置を占めてきた。中ツ道と下ツ道を東西の京極、横大路を北京極とする、12条×8坊の復元案である。この場合、1坊は半里(約265m)四方で、4町(1町=約133m四方)に分割されていたことになる。

ところが、1979年以降、岸説では京外にあたる部分でも、藤原京の条坊遺構があいついで検出され、宅地のありさまも、岸説の京内部分とまったく変わらないことが判明する。したがって、岸の復元を越えた範囲に条坊がしかれ、京として機能したことは動かない状況となった。そして、1996年には東と西の京極が確認され、京域の東西は岸説の2.5倍にあたる5.3kmにおよんでいたことが確定するにいたる。

また、条坊道路の規格を検討すると、側溝心々間距離で比較した場合、岸説でいうところの偶数条坊大路(二条大路・東二坊大路など)が約16m(45大尺)の幅員をもつものに対して、奇数条坊大路(三条大路・東一坊大路など)は約9m(25大尺)と格段に小さく、むしろ一般の小路(条間路・坊間路)の約7m(20大尺)に近似した数値を示す。平城京以後の都城が、例外なく16町を1坊とする形態をとる事実とあわせて、藤原京の1坊も1里(約530m)四方と考えるべきであろう<sup>2)</sup>。つまり、岸説の偶数条坊大路だけが本来の大路であり、奇数条坊大路は、坊の中央を走る条間路や坊間路であったことになる。実際、奇数条坊大路と小路の25大尺と20大尺という幅員は、それぞれ、平城京の条間路・坊間路と小路にそのまま受け継がれているのである<sup>3)</sup>。

1坊は16町

以上の点から、藤原京域の東西幅5.3kmは、正しく10坊分に相当するとみてよい。一方、南北の京極は今のところ未確認だが、少なくとも9条分の広がりをもつことが確認されている。律令における坊令の人数規定を考えあわせると、南北の京域も、東西の坊数と同じく10条であった蓋然性は高いだろう<sup>4)</sup>。その場合、4坊分を占める藤原宮は、10条×10坊の正方形の京域の中央に位置することになる(Fig.118)。

10条×10坊  
の京域復元

なお、藤原京の条坊は、平城京で左京「三条二坊」というような数詞呼称が用いられたのとは異なり、「林坊」(『続日本紀』文武3年(699)正月壬午(26日)条)のごとく、固有坊名で呼ばれたことがわかっている。また、平城宮朱雀門下層の下ツ道西側溝から出土した「左京小治町」と記す過所木簡も、大宝令施行後の藤原京で、「小治町(小治坊)」という固有坊名が使用されていた事実を示している<sup>5)</sup>。

したがって、藤原京条坊に関しても、岸説の偶数条坊大路を大路、奇数条坊大路を条間路や坊間路、その他を小路とする1坊=16町型の呼称が実態に即していることは明らかだが、南北の京極が確定していない現況も勘案して、ここでは、ただちにそうした平城京型の呼称を適用することは差し控え、条坊呼称については、便宜上、従来の呼称を踏襲することにしたい<sup>6)</sup>。



## B 東西道路の復元

吉備池廃寺の寺域全体を画する外郭施設については不明な点が多いけれども、その伽藍がのちの藤原京左京三条九坊・十坊と四条九坊・十坊の一部にかかることは間違いない。寺地の南寄りの部分には三条大路、北方ないし北寄りの部分には二条大路が東西に走り、その間に三条条間路が通っていたと推定される。これらの東西道路はいずれも過去に調査例があり、三条大路と三条条間路は、今回の調査でも側溝を検出することができた。一方、南北方向の道路は、東九坊大路と、東京極より1本内側（西側）にあたる東十坊坊間路が寺域内を通過する位置に想定されるが、それらに関しては、今のところ発掘調査で確認した例がない。ただし、東京極にあたる東十坊大路や東九坊坊間路は発掘例があり、東五坊大路など、中ツ道以东におけるその他の調査成果も蓄積されつつある（Tab. 18, Fig. 118）。以下、そうした成果に基づき、吉備池廃寺周辺の条坊を復元しておこう。

作業にあたっては、データの解析と統計的な処理を容易にするために、条坊道路の道路心や

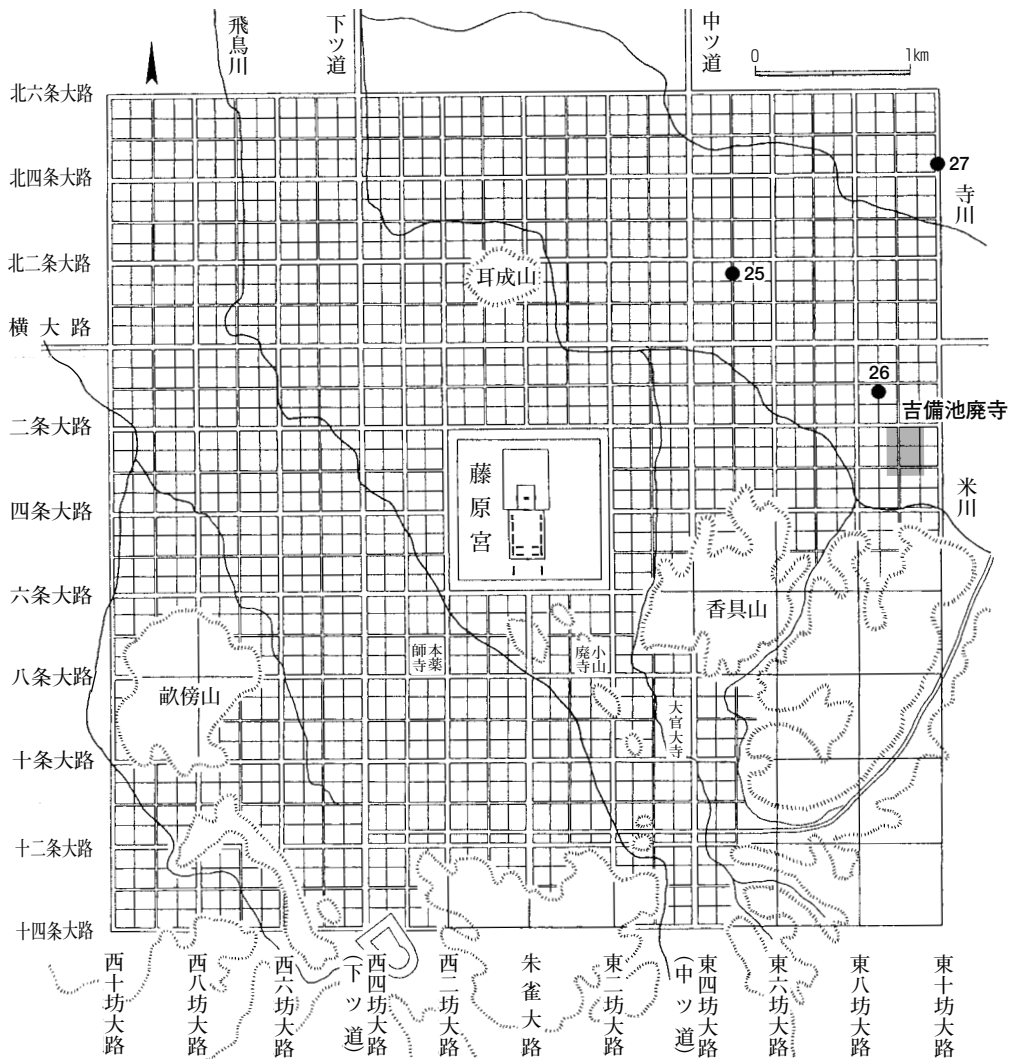


Fig. 118 藤原京条坊の復元と吉備池廃寺の位置 1:50000

数字はTab. 18と対応、一部の条坊は模式図  
条坊呼称は便宜的に岸説とその延長呼称による

側溝心を、国土座標を用いたX・Yの1次関数であらわすこととする。そして、単回帰分析により、直線の傾きと切片の最確値を計算する方式を採用した<sup>7)</sup>。あわせて、それらの直線性と実測値との整合性を検証するために、相関係数と残差分散を表示した<sup>8)</sup>(Tab.19)。

**二条大路** 今回の調査では直接確認していないが、右京三坊から左京一坊にかけて、複数の検出例がある (Tab.18-1~12)。側溝心々間の幅員は、16.2~16.9m (復元値45大尺=15.9m) である。回帰分析により算出される両側溝心の方程式はやや傾きを異にするが、検出遺構と回帰式の齟齬を示す残差 (実測値と予測値の差) や残差分散 (残差の平方和を自由度で割った値) を比較すると、北側溝心 (残差分散0.162) は、南側溝心 (残差分散0.024) にくらべてかなり大きな数値となって

Tab. 18 関連条坊座標値一覧表 (1) \* 計算により修正

番号	条坊道路	種 別	X座標	Y座標	調査機関・回数	座標値の典拠
1	二条大路	北側溝心	-166,035.2	-18,088.4	橿原市 1992年度	文献1 p.29
2	二条大路	北側溝心	-166,034.7	-18,002.0	奈文研 39次	文献1 p.27
3	二条大路	北側溝心	-166,034.2	-17,773.0	奈文研 58-13次	文献2 p.30
4	二条大路	北側溝心	-166,031.8	-17,458.0	奈文研 71-3次	文献3 p.74
5	二条大路	北側溝心	-166,030.9	-17,336.2	奈良県 1967年度	座標再計算
6	二条大路	南側溝心	-166,051.7	-18,088.4	橿原市 1992年度	文献1 p.29
7	二条大路	南側溝心	-166,050.9	-18,002.0	奈文研 39次	文献1 p.27
8	二条大路	南側溝心	-166,050.7	-17,905.0	奈文研 58-14・15次	文献4 p.31
9	二条大路	南側溝心	-166,050.5	-17,886.4	奈文研 41-1次	文献5 p.52*
10	二条大路	南側溝心	-166,050.4	-17,839.0	奈文研 33-3次	文献1 p.27
11	二条大路	南側溝心	-166,050.4	-17,816.0	奈文研 48-7次	文献6 p.48*
12	二条大路	南側溝心	-166,047.8	-17,336.2	奈良県 1967年度	座標再計算
13	三条条間路	北側溝心	-166,172.9	-18,087.4	橿原市 1996年度	文献1 p.31
14	三条条間路	北側溝心	-166,172.0	-17,999.0	奈文研 39次	文献7 p.28*
15	三条条間路	南側溝心	-166,179.9	-18,087.4	橿原市 1996年度	文献1 p.31
16	三条条間路	南側溝心	-166,176.8	-17,524.6	奈文研 18-3次	実測図
17	三条条間路	南側溝心	-166,163.3	-14,931.0	奈文研 111次	文献8 p.80
18	三条大路	北側溝心	-166,303.2	-18,000.0	奈文研 25次	文献1 p.27
19	三条大路	北側溝心	-166,292.8	-16,994.0	奈文研 108-11次	文献9 p.54
20	三条大路	北側溝心	-166,292.7	-16,958.9	奈文研 27次	文献1 p.25
21	三条大路	北側溝心	-166,274.0	-14,948.0	奈文研 111次	文献8 p.78
22	三条大路	南側溝心	-166,312.2	-18,000.0	奈文研 25次	文献1 p.27
23	三条大路	南側溝心	-166,301.7	-16,958.9	奈文研 27次	文献1 p.25
24	三条大路	南側溝心	-166,299.2	-16,779.2	奈文研 21-2次	文献10 p.25*
25	東五坊大路	道路心	-165,061.3	-16,102.9	桜井市 1986年度	文献1 p.38
26	東九坊坊間路	道路心	-165,788.0	-15,187.8	桜井市 1996年度	文献1 p.38
27	東十坊大路	道路心	-164,376.0	-14,800.3	桜井市 1996年度	文献1 p.38

文献 1 奈文研『藤原京研究資料 (1998)』1999年  
 2 奈文研「第58-13次調査」『藤原概報 19』1989年  
 3 奈文研「第71-3次調査」『藤原概報 24』1994年  
 4 奈文研「第58-14・15次調査」『藤原概報 19』1989年  
 5 奈文研「右京三条二坊の調査 (第41-11次)」『藤原概報 15』1985年  
 6 奈文研「二条大路の調査 (第48-7次)」『藤原概報 17』1987年  
 7 奈文研「右京二条二坊・三条二坊の調査 (第39・43次)」『藤原概報 15』1985年  
 8 箱崎和久・小谷徳彦「吉備池廃寺の調査 -第111次」『紀要 2001』2001年  
 9 小池伸彦「東北官衙・東方官衙北地区の調査 -第108-11次」『紀要 2001』2001年  
 10 奈文研「藤原宮第21-2次の調査」『藤原概報 8』1978年

いる。したがって、ここでは、遺構データとの当てはまり具合のよい南側溝心の回帰式(相関係数0.99318)の傾き(E 0° 17' 08" N)を、二条大路の方位と考えておきたい。

なお、二条大路推定位置付近の地形を観察すると、現在の春日神社の北に「磐余邑顕彰碑」が建つが、その北東に、丘陵を東西方向に切り通した痕跡が残っている。これが二条大路の道路痕跡である可能性は高いだろう。<sup>9)</sup>藤原京の大路として、多少の地形の改変を伴いながら、直線的に施工されたものと推定される。

**三条条間路** 今回、南側溝SD350を検出した(Tab.18-17)。北側溝に相当する溝は確認できなかったが、後代の削平を受けたものと判断しておく。三条条間路については、これ以外に、右京三坊と右京一坊で検出例があり(Tab.18-13~16)、側溝心々間の幅員7.0m(復元値20大尺=7.1m)という成果が得られている。

SD350

ただし、北側溝心の確認例は相互に近接した2地点しかなく(Tab.18-13・14)、それらを結んだ直線は、南側溝心にくらべてかなり大きな傾きを示すが、信頼性に欠ける。精度的に安定した(相関係数0.99996、残差分散0.012)南側溝心の回帰式の傾き(E 0° 18' 01" N)を三条条間路の振れとみるのが妥当だろう。三条条間路は、二条大路に近似した方位であったことになる。ちなみに、今回の調査成果を除く2つの南側溝心(Tab.18-15・16)を結んだ直線を延伸しても、今回の実測値との間には0.8mの差を生じるにすぎない。SD350が三条条間路南側溝にあたり、直線的に施工されたことは確実とみられる。

**三条大路** 今回の調査で、北側溝SD180を検出している(Tab.18-21)。対になる南側溝は、調査区外となるため、確認できなかった。三条大路については、これ以外に、右京三坊と左京二坊で検出例があり(Tab.18-18~20・22~24)、側溝心々間の幅員は9.0m(復元値25大尺=8.9m)であることが判明している。

SD180

今回の成果を含む北側溝心の回帰式を算出すると、その傾き(E 0° 32' 39" N)は、南側溝心にくらべて若干小さな数値となる。しかし、検出地点間の距離が、南側溝心の約1220mに対して、北側溝心では約3050mと2.5倍に達しており、相関係数(0.99951)においても上回る。よ

Tab. 19 条坊道路の関数化

( )は問題を含むもの

条坊道路	種別	方程式	相関係数	残差分散	典拠
二条大路	北側溝心	$X = \tan 0^\circ 19' 28'' Y - 165,933.0$	0.98299	0.162	1~5
二条大路	南側溝心	$X = \tan 0^\circ 17' 08'' Y - 165,961.5$	0.99318	0.024	6~12
三条条間路	北側溝心	$(X = \tan 0^\circ 35' 00'' Y - 165,988.8)$	—	—	13~14
三条条間路	南側溝心	$X = \tan 0^\circ 18' 01'' Y - 166,085.0$	0.99996	0.012	15~17
三条大路	北側溝心	$X = \tan 0^\circ 32' 39'' Y - 166,131.8$	0.99951	0.218	18~21
三条大路	南側溝心	$X = \tan 0^\circ 35' 56'' Y - 166,124.1$	0.99897	0.197	22~24
朱雀大路	東側溝心	$Y = -\tan 0^\circ 37' 39'' X - 19,240.7$	0.99962	0.126	30~34
朱雀大路	道路心	$(Y = -\tan 0^\circ 25' 09'' X - 18,644.3)$	0.99943	0.042	35~37
朱雀大路	西側溝心	$(Y = -\tan 0^\circ 23' 55'' X - 18,592.6)$	—	—	38~39
東一坊坊間路	道路心	$(Y = -\tan 0^\circ 38' 26'' X - 19,149.1)$	—	—	41~42
東一坊大路	道路心	$Y = -\tan 0^\circ 54' 20'' X - 19,793.0$	0.99986	0.015	43~45
東二坊坊間路	道路心	$Y = -\tan 0^\circ 57' 12'' X - 19,790.7$	0.99965	0.094	46~53
東二坊大路	道路心	$Y = -\tan 0^\circ 54' 43'' X - 19,537.0$	—	—	54~55
東三坊坊間路	道路心	$Y = -\tan 0^\circ 07' 01'' X - 17,094.5$	0.99777	0.018	56~61

って、残差分散そのものには、両者の間で大きな差がないけれども（北側溝心0.218、南側溝心0.197）、北側溝心の傾きを三条大路の振れと考えることにしたい。いずれにしても、三条大路は、二条大路や三条条間路と比較して、かなり大きな振れをもっていたことになる。

なお、今回の成果を除いた調査事例から北側溝心の回帰式を求め、北側溝心の位置を計算すると、今回の検出位置より2.0m北となるが、これは、他の検出地点との間隔（最も近いもので約2010m）を勘案すれば、ほぼ一致しているとみてよい。遺構の検出状況とあわせて、SD180が三条大路北側溝にあたり、直線的にのびていたことは間違いなさだろう。

### C 南北道路の復元

一方、東九坊大路と東十坊坊間路は、過去に検出例がまったくなく、中ツ道（東四坊大路）以東の南北道路については、方位の振れを知ることができる事例さえ存在しない。ただ、吉備池廃寺に比較的近接して東九坊坊間路を確認しているのので、これと東五坊大路および東十坊大路に基づき、条坊の復元を試みることにしよう（Tab.18-25~27）。方位に関しては、以下、朱雀大路を含む左京の南北道路の振れを検討して、参考資料としたい（Tab.20）。

**朱雀大路の方位** 藤原宮・藤原京の中軸線である朱雀大路は、北五条から七条にかけて調査例があり（Tab.20-30~40）、とくに東側溝心については良好な資料が得られている。側溝心々間の幅員は、藤原宮内の先行条坊で15.8~16.5m（復元値45大尺=15.9m）、宮南面の七条で24.8m（復元値70大尺=24.8m）である。道路幅員の異なる後者の成果（Tab.20-34・40）を除いて算出した両側溝心の回帰式は、傾きに差があるが（Tab.19、東側溝心  $N 0^{\circ} 37' 39'' W$ 、西側溝心  $N 0^{\circ} 23' 55'' W$ ）、観測数の多い東側溝心のデータの信頼性が高い（東側溝心の回帰式の相関係数0.99962、残差分散0.126に対して、西側溝心は2点しかデータがない）。

一方、七条の調査成果を含めた道路心の回帰式は、直線性にこそ優れているものの（相関係数0.99943、残差分散0.042）、検出地点の両端間の距離（約1139m）は、東側溝心（約2823m）のそれより大幅に短い。また、藤原宮の北面中門および南面中門（朱雀門）の建物心（Tab.20-28・29）は、朱雀大路の道路心に一致すると考えられるが、上記の回帰式から、各々の位置での道路心を求めると、北面中門心とは0.2m、南面中門心とは実に3.0mの差を生じてしまう。

これに対し、東側溝心の回帰式を用いて、8.0m（側溝心々間距離の1/2）西に道路心を推定した場合、その位置は、北面中門および南面中門の建物心とほとんど一致する（実測値と計算値の差は0.1~0.2m）。したがって、東側溝心の回帰式が、道路心の回帰式にくらべて、検出遺構との整合性に優れていることは明らかである。ここでは、東側溝心の方位（ $N 0^{\circ} 37' 39'' W$ ）を朱雀大路の振れと考えることにしよう<sup>11)</sup>。

なお、以上の朱雀大路の方位は、下ツ道と中ツ道の間値を示す。下ツ道は、平城京から藤原京まで多くの調査例があり、途中の部分や藤原京域内で多少のばらつきは認められるものの、全体としては、 $N 0^{\circ} 18' \sim 19' W$ の安定した振れをもつ<sup>12)</sup>。それに対して、中ツ道の振れはかなり大きく、奈良盆地の北端に位置する平城京の南辺では、下ツ道を基準に同じく4里を測り出した平城京東京極の位置より、160m近く中ツ道が西に寄る結果となっている。藤原京朱雀大路は、下ツ道と中ツ道の正しく中央に設定されているので、両者の方位が影響を与えていることは間違いなさだろう。

朱雀大路の  
回 帰 式

東側溝心の  
振れを採用

Tab. 20 関連条坊座標値一覧表(2) \*計算により修正 ( ) 推定値

番号	条坊道路	種別	X座標	Y座標	調査機関・回数	座標値の典拠
28	北面中門	建物心	-166,113.2	-17,429.2	奈文研 18次	文献11 p.22*
29	南面中門	建物心	-167,019.8	-17,419.4	奈文研 1次	文献11 p.22*
30	朱雀大路	東側溝心	-164,410.9	-17,440.1	橿原市 1990年度	文献 1 p.28
31	朱雀大路	東側溝心	-166,085.7	-17,421.4	奈文研 18次	文献 1 p.24
32	朱雀大路	東側溝心	-166,394.0	-17,418.2	奈文研 83-7次	文献 1 p.27
33	朱雀大路	東側溝心	-166,430.7	-17,418.3	奈文研 20次	文献 1 p.25
34	朱雀大路	東側溝心	-167,233.9	-17,408.5	奈文研 17-2・3次	文献 1 p.32
35	朱雀大路	道路心	-166,085.7	-17,429.3	奈文研 18次	文献 1 p.24
36	朱雀大路	道路心	-166,430.7	-17,426.5	奈文研 20次	文献 1 p.25
37	朱雀大路	道路心	-167,225.1	-17,420.9	奈文研 17-2・3次	文献 1 p.32
38	朱雀大路	西側溝心	-166,085.7	-17,437.2	奈文研 18次	文献 1 p.24
39	朱雀大路	西側溝心	-166,430.7	-17,434.8	奈文研 20次	文献 1 p.25
40	朱雀大路	西側溝心	-167,233.9	-17,433.3	奈文研 17-2・23次	文献 1 p.32
41	東一坊坊間路	道路心	-166,359.0	-17,289.2	奈文研 55次	文献12 p.7
42	東一坊坊間路	道路心	-166,520.0	-17,287.4	奈文研 58次	文献13 p.7
43	東一坊大路	道路心	-165,873.0	-17,171.4	奈文研 48次	文献 1 p.37
44	東一坊大路	道路心	-166,379.6	-17,163.5	奈文研 38次	文献14 p.6*
45	東一坊大路	道路心	-166,470.0	-17,161.9	奈文研 78・78-7次	文献15 pp.9-10
46	東二坊坊間路	道路心	-165,653.3	-17,034.4	奈文研 56次	文献 1 p.37
47	東二坊坊間路	道路心	-165,822.5	-17,031.1	橿考研 1993年度	文献16 p.20
48	東二坊坊間路	道路心	-166,370.6	-17,021.8	奈文研 30次	文献17 p.12*
49	東二坊坊間路	道路心	-166,396.5	-17,021.2	奈文研 75-13次	文献18 pp.27-28
50	東二坊坊間路	道路心	-166,426.0	-17,020.9	奈文研 21-1次	文献 1 p.24
51	東二坊坊間路	道路心	-166,562.6	-17,018.5	奈文研 33-4次	文献19 p.25*
52	東二坊坊間路	道路心	(-167,310.0	-17,006.5)	奈文研 75次	文献20 pp.47-48
53	小山麿寺金堂	建物心	-167,536.4	-17,002.8	橿考研他 1973年度	文献21 p.95
54	東二坊大路	道路心	-166,400.0	-16,888.4	奈文研 75-13次	文献18 pp.27-28
55	東二坊大路	道路心	-167,510.0	-16,871.0	橿考研 1992年度	文献 1 p.39
56	東三坊坊間路	道路心	-165,705.0	-16,756.5	奈文研 54-17次	文献22 p.48
57	東三坊坊間路	道路心	-165,780.8	-16,756.3	奈文研 60-6次	文献 1 p.38
58	東三坊坊間路	道路心	-165,944.0	-16,756.3	奈文研 66-17次	文献23 p.43
59	東三坊坊間路	道路心	-166,952.0	-16,754.0	奈文研 47・50次	文献 1 p.39
60	東三坊坊間路	道路心	-167,033.0	-16,753.8	奈文研 53次南区	文献24 p.26
61	東三坊坊間路	道路心	-167,857.3	-16,752.2	明日香村 1987年度	実測図

- 文献 1 奈文研『藤原京研究資料(1998)』1999年
- 11 奈文研「藤原宮第18次の調査」『藤原概報 6』1976年
- 12 奈文研「藤原宮東方官衙・内裏東外郭地域の調査(第55次)」『藤原概報 18』1988年
- 13 奈文研「内裏地域の調査(第58次)」『藤原概報 20』1990年
- 14 奈文研「藤原宮東方官衙地域の調査(第38・41・44次)」『藤原概報 15』1985年
- 15 奈文研「内裏東官衙地区・東方官衙北地区の調査(第78次調査・第78-7次調査)」『藤原概報 26』1996年
- 16 今尾文昭・大西貴夫「藤原京左京二条二坊発掘調査報告書-東二坊坊間路の調査-」『奈良県遺跡調査概報 1993年度(第2分冊)』奈良県立橿原考古学研究所、1994年
- 17 奈文研「藤原宮東方官衙地域の調査 I(第30次)」『藤原概報 11』1981年
- 18 奈文研「東二坊大路・宮東面・東方官衙地区の調査(第75-13次)」『藤原概報 25』1995年
- 19 奈文研「藤原宮東方官衙地域の調査(第33-4次)」『藤原概報 12』1982年
- 20 奈文研「左京七条一・二坊の調査(第75次)」『藤原概報 25』1995年
- 21 泉森 皎「紀寺跡の主要伽藍と藤原京の条坊」『条里制・古代都市研究』通巻15号、1999年
- 22 奈文研「左京二条三坊の調査(第54-17次)」『藤原概報 18』1988年
- 23 奈文研「左京二条三坊の調査(第66-17次)」『藤原概報 23』1993年
- 24 奈文研「左京六条三坊の調査(第53・54-1次)」『藤原概報 18』1988年

**左京の南北道路の方位** 藤原京左京の南北道路で方位の知られるものとしては、西から順に、東一坊坊間路、東一坊大路、東二坊坊間路、東二坊大路、東三坊坊間路がある。

**東一坊坊間路** 東一坊坊間路は、2地点で道路心のデータが得られている。側溝心々間の幅員は、7.0~7.2m(復元値20大尺=7.1m)である。点間距離が短く(約161m)、精度に問題は残るが、それぞれを結んだ直線は、朱雀大路に近い振れ(N $0^{\circ} 38' 26''$ W)を示す。

**東一坊大路** 東一坊大路は、3地点の道路心データがあり、側溝心々間の幅員8.6~9.0m(復元値25大尺=8.9m)という成果が得られている。回帰直線によくのるけれども(相関係数0.99986、残差分散0.015)、その振れは、朱雀大路にくらべるとかなり大きい(N $0^{\circ} 54' 20''$ W)。

**東二坊坊間路** 東二坊坊間路については、6地点の道路心データがある。側溝心々間の幅員は、6.3~7.1m(復元値20大尺=7.1m)である。このほか、西側溝心の東3.5mに道路心を推定できる例があり(Tab.20-52)、小山麿寺(紀寺)金堂心(Tab.20-53)もこの道路心に一致するとみてよい。<sup>13)</sup>それら8地点から求めた回帰式の傾きは、東一坊大路に近い数値(N $0^{\circ} 57' 12''$ W)を示している(相関係数0.99965、残差分散0.094)。

**東二坊大路** 東二坊大路の道路心データとして確実なものは、2地点で得られている。側溝心々間の幅員は、16.0~16.6m(復元値45大尺=15.9m)である。約1112m離れた両者を結んだ直線は、東一坊大路や東二坊坊間路に近い振れ(N $0^{\circ} 54' 43''$ W)を示す。

**東三坊坊間路** 東三坊坊間路は、6地点で道路心データが得られており、側溝心々間の幅員は、6.3~7.3m(復元値20大尺=7.1m)である。いずれのデータも回帰直線によくのるが(相関係数0.99777、残差分散0.018)、その傾きは正方位に近く(N $0^{\circ} 07' 01''$ W)、東一坊大路や東二坊坊間路・東二坊大路はもちろん、朱雀大路とも大きく異なる。

以上、左京の南北道路は必ずしも方位が揃うわけではなく、朱雀大路や東一坊坊間路など、 $0^{\circ} 38'$ 前後の振れをもつものと、東一坊大路・東二坊坊間路・東二坊大路のように $0^{\circ} 55'$ 前後振れるもの、さらに東三坊坊間路のように、 $0^{\circ} 07'$ しか振れないものが存在することが明らかとなった。これらは、右京の南北道路が全体として、下ツ道に近いながらもわずかに大きな振れを示すのとは、明らかに状況を違えている。

こうした方位の振れの違いは、藤原京設定時の測量精度が、それほど高いものではなかったことを明示している。ただ、そのなかで、 $0^{\circ} 55'$ 前後の振れをもつ例が多いのは注目してよく、中ツ道の方位が影響を与えた可能性が想定される。<sup>14)</sup>

**東九坊大路・東十坊坊間路** 以上のように、朱雀大路を含む左京の南北道路の方位は必ずしも一定せず、朱雀大路に近いか、それ以上の振れをもつ場合が多い。今回問題となる東九坊大路や東十坊坊間路の方位を積極的に推定しうる根拠は得られなかった。そこで、調査例も多く、精度的に安定した数値を示す朱雀大路と東一坊~東二坊大路の振れを用いて条坊の復元をおこない、両者を比較してみよう。

まず、道路心の位置が判明している東五坊大路・東九坊坊間路・東十坊大路が、いずれも朱雀大路の振れ(N $0^{\circ} 37' 39''$ W)をもつと仮定し、三条大路付近(X=-166,270)における各々のY座標を求めると、西から順に-16,089.7、-15,182.6、-14,779.6となる。それぞれの間隔は907.1mと403.0mだが、これに方位の振れを勘案しても、907.0m・403.0mとほとんど同一の数値を示す。東五坊大路と東九坊坊間路の間隔は7町分に相当するので、平均すると、この間

Tab. 21 吉備池廃寺周辺の条坊道路の推定

条坊道路	種別	方程式	備考
二条大路	道路心	$X = \tan 0^\circ 17' 08'' Y - 165,953.5$	南側溝心から8.0m北
三条条間路	道路心	$X = \tan 0^\circ 18' 01'' Y - 166,081.5$	南側溝心から3.5m北
三条大路	道路心	$X = \tan 0^\circ 32' 39'' Y - 166,136.3$	北側溝心から4.5m南
東九坊大路	道路心	$Y = -\tan 0^\circ 37' 39'' X - 16,869.3$	東九坊坊間路心から134.3m東
東十坊坊間路	道路心	$Y = -\tan 0^\circ 37' 39'' X - 16,735.0$	東九坊坊間路心から268.6m東

の1町の東西長は129.6m (907.0m÷7)、一方、3町分にあたる東九坊坊間路と東十坊大路の間は、134.3m (403.0m÷3) ということになる。

次に、上記の南北道路の振れが、東一坊大路・東二坊坊間路・東二坊大路の3本の振れの平均値 (N 0° 55' 25" W) に等しいと仮定して同様の計算をおこなうと、各々の地点のY座標は、順に-16,083.4、-15,180.0、-14,769.8と算出される。間隔は、それぞれ903.4mと410.2m (方位の振れを補正して903.3m・410.1m) である。東五坊大路～東九坊坊間路間の1町の平均東西長は129.0m (903.3m÷7)、東九坊坊間路～東十坊大路間は136.7m (410.1m÷3) となる。

したがって、後者の振れを用いた場合は、東九坊坊間路の東と西で、1町の平均東西長がかなり大きく異なることになってしまう。もとより、これらは、原則的には等しくなるように設定されたはずであり、現実には差が生じている例が多数存在することは事実だが、後者の振れが前者にくらべてやや妥当性を欠くことは否めないだろう。ここでは、今回の検討対象とした左京の条坊道路全体 (朱雀大路を除く) の振れの平均値 (N 0° 42' 20" W) にも近い、前者の朱雀大路の振れを、東九坊大路と東十坊坊間路の振れと仮定することにした。そして、東九坊坊間路心を起点に、以東の1町の平均東西長である134.3mの間隔をおいて、東九坊大路と東十坊坊間路の道路心を推定しておく。以上により算出される吉備池廃寺周辺の条坊道路の方程式は、Tab. 21のとおりである。

朱雀大路の振れを採用

## D 吉備池廃寺の寺地と条坊

まず、上記の方程式を用いて、吉備池廃寺周辺における条坊道路を復元しておこう (Fig. 119)。それぞれの交差点の道路心は、Tab. 22のようになる。

前項で記したように、ここでは東九坊大路と東十坊坊間路の方位を同一と仮定し、両者の間隔 (坪の東西長) を134.3mとして計算したが、東西方向の道路は、それぞれ方位を異にしてい

Tab. 22 吉備池廃寺四周の条坊復元

交差点	条坊道路と種別	X座標	Y座標
A	二条大路と東九坊大路の交点の道路心	-166,028.5	-15,050.9
B	三条条間路と東九坊大路の交点の道路心	-166,160.4	-15,049.5
C	三条大路と東九坊大路の交点の道路心	-166,279.2	-15,048.2
D	二条大路と東十坊坊間路の交点の道路心	-166,027.8	-14,916.6
E	三条条間路と東十坊坊間路の交点の道路心	-166,159.7	-14,915.2
F	三条大路と東十坊坊間路の交点の道路心	-166,278.0	-14,913.9



Fig. 119 吉備池廃寺周辺の条坊復元 1:2000



るので、坪の実長には差がある。

以下、左京三条十坊西北坪とその南の西南坪の辺長を、条坊計画線間（道路心々間）距離と比較すると、まず、二条大路と三条条間路の振れはほぼ等しいので、西北坪の西辺（A-B間）と東辺（D-E間）は、ともに131.9mと算出される。これは、藤原京の1坪（1町）の標準的な辺長とされる約133m（375大尺）に近い数値である。一方、これらにくらべて三条大路の振れはかなり大きいので、西南坪の西辺（B-C間）は118.8m、東辺（E-F間）は118.3mと、かなり

西南坪の南北長は短い

短い数値となる。

なお、第95次調査西区で検出した2条の東西溝SD219とSD226の溝心の位置は、三条大路の道路心から、それぞれ56.2m、51.8m北にあるとみられる。この距離は、当該坪の南北長の1/2（59.2～59.4m）に比較するとかなり短く、条坊計画線間を2等分する設定とはいえない。同様に、SD226の東端も、東九坊大路の道路心より50.0m西に位置しており、坪の東西長を134.3mとした場合、その1/2（67.2m）と1/3（44.8m）の間の数値を示す。したがって、これらが坪内の区画溝として掘られたとしても、その位置は、坪を規則的に等分するということではなかった可能性が高い。

ところで、東西に走る三条条間路と三条大路は、今回の調査で、それぞれ南側溝と北側溝を検出しているため、いずれも、吉備池廃寺が廃絶したのちに、寺域内を横断するかたちで建設されたことは間違いない。また、二条大路についても、地形の状況からみて、実際に施工されたことは確実といえる。

廃絶後の条坊道路施工

一方、南北方向の道路は、東九坊大路と東十坊坊間路が寺域内を通過する位置に想定されるが、遺構を確認するにはいたらなかった。もっとも、復元的前提となる資料自体に限界があり、ここで推定した位置が必ずしも正確とはいえないものの、東十坊坊間路に関しては、周辺の遺構の検出状況を勘案すると、削平を受けたとみてよいだろう。

また、東九坊大路は、塔基壇にかかる位置に想定されるけれども、そうした痕跡もまったく認められなかった。巨大な基壇が遺存するため、そこを通過する道路施工は見送られたか、実際の道路位置が推定とずれているかのいずれかであろう。後者の場合、今回の推定より当該道路の振れが小さいか、東九坊坊間路との間隔が狭かったとすれば、塔基壇の西を南北に縦貫したことは充分考えられる。ちなみに、塔基壇と西面回廊の間は、整地土が失われるほどの削平を受けているとみられるので、道路側溝が遺存しないとしても不自然ではない。

さらに、これをそのまま北へ延伸すると、寺域北方の小丘陵の西、第105次調査西区との間を通過する。その部分は、東側にくらべて西側が一段低く落ちており、現在の里道北側の等高線にもそうした状況があらわれている。これらが人為的な地形の改変を示しているとすれば、東九坊大路は、今回の推定位置の若干西を通過していた可能性が高いことになる。今後の調査の進展による解明を待ちたい。

- 
- 1) 岸 俊男『日本古代宮都の研究』岩波書店、1988年、5～28頁（初出1969年）。
  - 2) 阿部義平「新益京について」『千葉史学』9号、千葉歴史学会、1986年。
  - 3) 井上和人「古代都城制地割再考－藤原京・平城京を中心として－」『研究論集Ⅶ』奈文研学報第41冊、1984年。井上和人「都城の定型化」『季刊考古学』第22号、雄山閣出版、1988年。
  - 4) 小澤 毅「古代都市『藤原京』の成立」『考古学研究』第44巻第3号、考古学研究会、1997年。ただ

- し、すでに宮殿や寺院が集中していた飛鳥中枢部をはじめ、大和三山や丘陵地帯には条坊が施工された痕跡がない。これらは、そこが藤原京の設定範囲や理念上の京城からはずれることには直結しないが、実際の施工にさいしては、現実的な対応が図られたことがうかがえる。
- 5) 平城宮木簡1926号。奈文研『平城宮木簡Ⅱ解説』奈文研史料第8冊、1975年、59～62頁。
  - 6) 条坊呼称を実状にあわせて全面的に改定した長岡京の例を引くまでもなく、将来的には、藤原京についても、実態に即した呼び方に改めるのが望ましいだろう。少なくとも、北京極の位置が決まれば、数詞呼称の起点は確定できるので、改定作業そのものに支障はなくなる。また、以後、再改定が必要となるような事態が生じるおそれもない。
  - 7) 作業には、市販の表計算ソフト「Microsoft Excel」の分析ツール「回帰分析」を使用した。なお、条坊遺構の方程式を算出・提示することについては、その意義を疑問視する見解もある（武田和哉「日本古代都城の条坊施工の一側面—幅員が変化する条坊道路の存在—」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会、2001年、註28）。たしかに、これらは二次的なデータのうえ、たえず更新される性質のものであり、一次資料としての発掘成果こそがまず重視されるべきであることは言うまでもない。しかし、条坊道路が直線として施工されているかどうかを検証し、検出遺構がそれに該当するかを確認するうえでも、関数を用いた解析はやはり不可欠であろう。いたずらに数式の算出に紙数を費やし、一次資料をおろそかに扱うことに対する警鐘としては評価したいが、上記の作業の必要性ならびに有効性は否定できないと考える。
  - 8) 回帰式の適合度を検証するうえでは、残差（実測値と予測値の差）や残差分散（残差の平方和を自由度で割った値）が有効な指標となる（入倉徳裕「条坊の復元」『平城京内の発掘調査報告—1994（平成6）年度—』奈良県遺跡調査概報1994年度（第1分冊）、奈良県立橿原考古学研究所、1995年、94～98頁）。ただ、検出地点間の距離もデータの安定性に強くかかわっており、その大小は相関係数にも影響を与えるが、一般に、距離が大きいほどデータの安定性も高いと考えてよいだろう。ここでは、直線性および実測値との整合性をはかる指標として、相関係数と残差分散の両者を提示しておくことにしたい。
  - 9) 大脇 潔「藤原京京城復原論」『文学・芸術・文化』第9巻第2号、近畿大学文学部、1998年。
  - 10) 北面中門と南面中門の建物心を結ぶ直線の傾きも、 $N 0^{\circ} 37' 10'' W$ と、朱雀大路東側溝心にごく近い振れを示す。しかし、後者のデータにくらべると点間距離が短いため（約907m）、ここでは、より安定した精度をもつことが確認されている東側溝心の方角を朱雀大路の傾きとする。
  - 11) ちなみに、幅員を異にする宮南面の七条の調査データを含めて、東側溝心の回帰式を算出すると、 $Y = -\tan 0^{\circ} 38' 13'' X - 19,267.6$ となる。この傾き（ $N 0^{\circ} 38' 13'' W$ ）や相関係数（0.99958）、残差分散（0.151）は、七条の成果を除いた場合の先述の回帰式（傾き $N 0^{\circ} 37' 39'' W$ 、相関係数0.99962、残差分散0.126）と大きな変化がない。つまり、幅員が広がるとされる宮南面部分を含めて、東側溝心はほぼ一直線に通っていたと考えてよいことになる。朱雀大路の「拡幅」の実態については、なお検討が必要であろう。
  - 12) 分析にあたっては、以下の文献所載の調査データを使用した。奈良市教育委員会『史跡 平城京朱雀大路跡—発掘調査・整備事業報告—』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第2冊、1999年、76～78頁。奈文研『藤原京研究資料（1998）』1999年。
  - 13) 泉森 皎「紀寺跡の主要伽藍と藤原京の条坊」『条里制・古代都市研究』通巻15号、条里制・古代都市研究会、1999年。
  - 14) 竹田政敬「藤原京の京城」『古代文化』第52巻第2号、古代学協会、2000年。以上の点からも、藤原京条坊の方角の違いを、施工時期の先後に結びつける見解（山中章『日本古代都城の研究』柏書房、1997年、45～99頁（初出1993年））は成り立たないだろう。